
願い事

沖田コウ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

願い事

【Nコード】

N9768U

【作者名】

沖田コウ

【あらすじ】

ある朝目覚めたら、体が女の子に！？僕こと島崎葵^{しまづき あおい}は大混乱！！親友、遠藤直樹^{えんどう なおき}は普段と変わらぬボ・カーフェイス！？原因は？両親には、友人には何て説明すればいいの！？そんなことより、僕は男に戻るの！？

現在、同時連載中の『ANOTHER SKY』と一話交代で更新しています。更新できない日は、活動報告にて報告させていただくので、よかったら覗いてみてください！

第一話 ある日の不思議な目覚め・・・（前書き）

こんにちは、コウです！

実は、小説の本文はよく思いつくのですが、
タイトルが思い浮かびません・・・。

なので、この小説も

「どこが、『願い事』だよ！」

と突っ込みたくなるかもしれませんが、よろしく願います！

第一話 ある日の不思議な目覚め・・・

「なあ・・・」

「どうした？」

「ずっと、思ってたんだが・・・」

「なんだよ、面倒くさいな。もったいぶらずにさっさと答える。さもないと、そのメロン揉むぞ」

「へ、変態っ!？」

「お前、さつきから会話する気あるのか？」

「あるよ!あるに決ってる!!」

「だったら、早く話せ」

「・・・なんで、俺は女になっているんだ？」

「・・・」

「な?な?おかしいだろ!?昨日まで男だったんだぜ!なんで急に女になってんだよ!」

「・・・知るか」

「はああああ!?お前なんだよ、そのそっけない態度!お前ん家で泊まった次の日に女になるってどういうことだよ~~~~~」

「!」

「だから。知るか」

「だから、そのそっけない態度はなんだ!」

こうして、僕こと島崎葵は15年の男子生活を終え、女として生まれ変わった・・・?

神サマ、お願い。あたし・・・じゃない!

僕を男に戻してください・・・

第一話 ある日の不思議な目覚め・・・（後書き）

文章はラノベ調ですね。

ジャンルは『コメディ』になつてますが、
これってコメディーなのかな（汗）
ちよつとでも笑ってもらえると嬉しいです。

第二話 男って……！

「お前、昨日俺に何かした？」

僕は、いつの間にか（恐らく、体が女になった時に）伸びていたサラッサラの髪をかき上げながら、ベッドの隣に座っている遠藤直樹に聞いた。

直樹は幼馴染で、小さいころの記憶といえどいつと遊んだことか、こいつに泣かされたことしか覚えていない。何事においても平々凡々な僕とは違い、頭はいいし、スポーツ万能。さらに、さわやか系イケメンだ。

天は僕には何も与えず、こいつに二物以上与えやがった。

ただ、本人にそんな気はないのだろうが、ポーカーフェイスでさりと変態発言をすることが玉に瑕。

「今のお前ならともかく。男のお前に手なんか出すか」

こいつ、またさらりと変態発言を……。

「もう、どうすればいいんだよ……」

お先真つ暗だ……。今日は学校だというのに。しかも、学校が終われば家に帰る。この状況を両親に友達になんて説明すればいいんだ。

「早く、準備しろ。学校遅れるぞ」

直樹を見ると、もうすでに制服に着替え始めていた。

くそう！こいつはなんでこんなにドライなんだよ！

友人が次の日、女になってんだぞ。もっとマシな反応があるだろ。

「早くしろったって。着る服がないよ」

すると、直樹はあろうことか僕のバッグの中をあさりだした。

「おい、こんなのがあつたぞ」

直樹が何かをつかんで僕の前に差し出した。どうやらそれは、水色の小さな三角形の布のようだ……。ってパンツ！！

「わああああ！？」

僕はすぐに、直樹の手からそれを奪い取った。いつたいなぜ、こんな物が僕の鞆の中に入っているんだ。

心臓が爆発しそうなほど速い。男にパンツ見られるなんて。恥ずかしい……。

待て待て、男の僕が何を恥ずかしかる必要がある。

「なるほど。お前、元々そういう趣味だったのか。15年間一緒にいて何も気がつかなかったが・・・なんと言うか、不幸中の幸いだな」

「んなわけあるか〜！」

「と言うより。つまりこれはカツラか？」

直樹が僕の長い髪を引っ張った。

「い、痛い！何するんだよ」

「本物……？じゃあこれは」

そう言う、彼はおもむろに手を伸ばしてきた。

「ひゃっ！？ちよっ、バカ！どこ触ってんだよ！！」

僕が繰り出した全力の張り手をひらりと躲される。

こいつ、あろうことか僕の胸を揉みやがった！！

しかも、今さらハッキリと自覚したが、僕の胸は少々大きいらしい。なるほど、さっきから感じていた肩の重さはこのメロンが原因か・・・。

「こっちも本物……」

「だから言つたろう！俺は女になつてしまつたんだよ」

「それよりお前……」

じつと、こつちを見る直樹。何か言いたそうな顔をしている。見
つめられるのに耐えられなくなり、僕から切り出す。

「な、なんだよ……」

「……けっこ可愛いな」

「なあつ・・・！？」

何を馬鹿なことを……！？

不意を突かれたせいか顔が熱い。たぶん真っ赤だ、ゆでだこみた

いに。

まさか、直樹にそんなことを言われるとは。

「それに・・・」

「まだ何かあるのか！」

僕は恥ずかしさを紛らわせるために、大きな声を出す。

「お前、ノーブラ」

僕の胸元を指さしながら言った直樹。

赤くなっていた顔が、さらに赤くなるのがわかった。今度は恥ずかしさと、怒りだ。

男って・・・！！

震える拳を振り上げ感情のまま振り下ろす。

今日二度目になる全力の張り手。今回は、直樹の顔にヒットさせることができた。

第二話 男って……！（後書き）

こんにちは、コウです！

私が高校生の時、書いていた小説を友達に見てもらっていたのですが、

よく言われていたのが、「展開が早い」ということでした。

今回の作品もそんな気がします……（汗）

第三話 心当たりは？

僕はため息を吐きながら、通学路を歩いていった。隣にはもちろん、いつもと変わらぬポーカーフェイスの遠藤直樹。その左頬には真っ赤な手形がついている。

怒ってはいないだろうか？

直樹を横目で見たが、その表情に変化はない。

じっと見ていると、気がついたのか直樹と視線が合った。左頬の手形が痛々しい。

まあ、僕がつけた物なんだが・・・。

「あ、あのさ・・・」

「どうした・・・」

「怒ってないのか？」

「何を？」

「張り手のこと」

「別に・・・」

ああ、わからない。15年間も一緒にいるのに、こいつの考えていることは何もわからない。

わからないことと言えば、二つ。

一つは、今着ているこれ。いわゆる制服だ。女子の。つまり、僕が穿いているのはスカートなわけで、人生初スカートだ。股がスーッして気持ち悪い。

これも、パンツ同様、僕のバッグに入っていた。しかも、制服だけでなく、他の服や下着まで出てきた。もちろん全て女物だ。訳が分からん。

それに、あれは何だ？

ブラとかいうやつだ。着けにくいつたりやありやしない。5分も格闘したうえ、拳句の果てには直樹に手伝ってもらう始末・・・。

ああ、思い出したくない。恥ずかしい、恥ずかしすぎるよぉ！

そして、もう一つ。こうなった原因は・・・。

「なんだと思う？」

「急にどうした？」

「俺がこうなった原因だよ」

「さっきも言っただけだ。知るか、と」

「お前、真剣に考えてないだろ！」

もう一度、大きくため息を吐いた。なぜ、僕はこんな男と15年間も友達をやってこれたのだろう。

わからないことが、もう一つ増えてしまった・・・。

「そう言うお前は、何か心当たりないのか？」

「あつたら苦労しないよ・・・」

「そういえば、お前昨日。生まれ変わったら女の子になりたい。とか言っってたか」

「嘘！そんな簡単なことで性別が変わるのか！」

「でも、言っただよな？」

「それは、そうだけど・・・」

まさか、そんな簡単なことで？

確かに言っただけ、あれは一時の気の迷いというか。なんというか・・・。ただ女の子としての生活を純粹に楽しみたいと思っただけなのに。それに、生まれ変わったらって言っただけ。

「じゃあ、それで決まりだ」

さらっと話を終わらせようとする直樹。

そんなことさせてたまるかあああ！

「ンなわけあるか！」

「じゃあなんだ？あれか？変な妖精か、胡散臭い魔法使いにでも頼んだのか？」

駄目だ、何が何でも話をここで終わらせる気だ。

「イエス様にでも祈ったか？それとも神社か？」

友達がこんなに悩んでいるというのに、なんといい薄情も・・・の？

あっ・・・。

僕の思考は一瞬にしてフリーズした。
心当たり・・・あった！

第三話 心当たりは？（後書き）

こんにちは、コウです！

どうやら、葵には心当たりがあったようです。
さて、ここからどうなることやら。

やはり、展開が早い・・・。

気のせいではなかったようです。

コウ「直樹よ、僕はどうしたらいいのかな？」

直樹「・・・知るか」

コウ「・・・」

第四話 あの時願い

「まさか、いやそんなはずは・・・」

「何を一人でぶつぶつ言っている？」

生まれてから、今までを振り返ると一度だけ、たった一度だけ心当たりがあった。

だが、それこそ一時の気の迷いだ。あんな物が今頃になって効果を発揮するなんて信じられない。いや、信じたくない。

しかも、直樹絡みとは・・・。

「何か思い出したのなら言ってみろ」

うるさい。今それどころじゃないんだ。

「・・・おい」

だから、黙ってくれ。僕は今すぐ、この記憶を消し去りたいんだ。

「葵」

「え、直樹？って、わあああ!？」

気がつくと、直樹の顔が互いに息のかかる距離にあった。僕はすぐに後ろに飛び退く。

「びっくりした！何だよ急に!!」

「お前が急に動きを止めたからだ」

そう言っ、直樹は先に歩いていく。

心臓がまた速くなっていた。だが、それは忘れ去りたい過去の記憶のせいではなく、直樹の顔がすぐ近くにあったからだった。

そう、ただ。びっくりしただけ・・・。

「早くしろ、学校遅れるぞ」

「お、おう・・・」

こいつはデリカシーがないというか、なんというか。もう少し気を使ってくれてもいいんじゃないか？

こっちは、心は男でも体は女なんだぞ。

僕は直樹の隣まで走った。これも、今さら気がついたことだが、

男の時と歩幅が違う。直樹の隣に行くまでも一苦労だった。
どうやら、身長も縮んでいるらしい。いつも通っている道のはず
なのに、少し違う風景に見えた。

「まだ、話したくなかったら話さなくていい」
「え・・・？」

僕は直樹を見る。彼はまっすぐ前だけを見ていた。

「まだ、気持ちの整理がついてないんだろう？」

「そりゃあ、まあ・・・」

「だったら、まだ話さなくていい。整理がついたらちゃんと話せ」
「なんだ、気を使ってくれているのか？」

まさかとは思うが、起きた時からのそっけない態度も、こいつな
りに気を使っていたのか。

なんだか、急に嬉しくなり、スキップを試みる。

「でも、一生整理なんてつかない気がするけどな・・・」

「それは駄目だ。ちゃんと話せ」

「命令形かよ・・・。でも、ありがとう」

僕は直樹に向かって微笑んで見せた。

無理に笑ったのではなく、率直な気分だった。

ただ、まだ不安の種はたくさん残っていた。

気持ちの整理はつくのだろうか？

それに、何についての整理だ？

朝、目が覚めたら女の子になっていたこと？

家族や友達に説明しなければいけないこと？

このまま、女として暮さなければいけないかもしれないこと？

どれについてだ？

いや、きつとすべてだろう。

それに、その中には『直樹にあの時の願いを話す』ことも含まれ

ているはずだ。

それを聞いたとき直樹はどんな反応をするのだろう。あいつのとだから、また一言で終わらせるに違いない。

そして、これが一番大きな不安。

僕は男に返ることができるのだろうか？

「そんなに不安そうな顔するな。俺も何かできることがあれば手伝ってやるから」

どうやら、不安が顔に出ていたらしい。

直樹の手がぽんつと僕の上に置かれる。僕はすぐにその手を払いのけた。

「うるさい。いつも『知るか』の一言で終わらせるくせに」

横目で睨む僕を無視して、直樹は大げさに肩をすくめながら僕の前を歩いて行った。

心なしか、僕にはその背中が頼もしくも見えた。

第四話 あの時的心愿（後書き）

こんにちは、コウです！

サブタイトルが『あの時的心愿』にもかかわらず、
肝心的心愿については全く触れずに終わってしまった第四話……。
どうだったでしょうか？

葵はいつ、誰に『女の子になりたい』と願ったのでしょうか。
願いについては徐々に（？）触れていききたいと思います。

原稿を何度も修正しているうちに、
設定がいまいになつたり、話が分かりにくくなっているところがある気がします……。。

何かおかしな所、気が付いた点等があれば、教えてくれると嬉しい
です！

第五話 ホームルームにて……

「ついに、ここまで来てしまった」

僕は今日何度目になることだろう、ため息を吐いた。

目の前には、見慣れた門がある。そう、僕と直樹が通っている高校の門だ。

これほど学校に入るのに躊躇った日はあるだろうか。恐らく、風邪を引いた日や、あまり気分が乗らない日でも、これほど学校に行きたくないと思ったことはないだろう。

「ほら、早く行くぞ」

「ちよつと待ていゝ!!」

僕は一人で学校に入っていこうとした直樹の腕を引っ張る。

「なんだよ？」

「まだ、心の準備が……」

「そんなの待っていられるか」

男のままならともかく、女になってしまった僕では、たとえ全力を出したところで直樹の力に抵抗できるはずもない。僕は逆に直樹に引っ張られる形で学校へ足を踏み入れた。

校舎に入ってから、僕は直樹を引っ張るのを諦めて彼の隣を歩いた。

廊下ですれ違う人たちは、僕のことをどう見ているのだろうか？ 誰も僕が島崎葵と気づかないはずだ。となれば、直樹の隣を歩いている僕は、こいつの彼女に見えるのだろうか。

想像してしまったせいで、一瞬背筋が凍りついた。

「おい、直樹」

「なんだ？」

「俺はなんて言って教室に入ればいいんだ？」

「……………」

沈黙。まあ、どうせまた「知るか」の一言で終わらせるんだろうけど。

その一言で終わらせたら、向う脛に蹴りをお見舞いしてやる。

隣の直樹を窺うと、あごに手を当てて考え込んでいる。意外と真剣に考えているらしい。どうやら、さっきの言葉は嘘ではなかったようだ。

「わたし、女の子になっちゃったの！これからもよろしくね！」

「てめえ……。ご丁寧に声色まで変えやがって！」

「嘘だ……」

「嘘かよ！」

こいつ、本当に真剣に考えてるのか？

僕が額に手を当て、ため息を吐くと直樹が口を開いた。

「間違っても、今俺が言ったようなことは言うなよ」

「誰が言うか！！」

「違う。今日起きたら女になっていたことを言うなと言ったんだ」

「何で？言わないと説明できないだろう」

女になってしまったことを言うな？

本気で言っているのだろうか。いったい、こいつの思考回路はどうなっているんだ。

そんなことを思っていると、直樹がこっちを見ていた。

「な、なんだよ」

「お前、気づいていないのか？」

「何に？」

「いや、気づいてないならいい……」

「なんだよ、ちゃんと理由を言えよ」

そうこうしている間に教室に着いた。時計を見ると遅刻ギリギリだった。すでに先生も教室の中にいるようだ。

因みに担任の先生は今年新しくこの高校に来た女の先生でけっこの美人だ。いや、まったくそんなことは関係ないのだが……。教室の中からはいつもと変わらない話し声や笑い声が聞こえてくる。

扉に手をかけて気が付いた。手が震えている。足もそうだった。震える手を胸に当て深呼吸。いつの間にか、鼓動まで速くなっている。

落ち着け、落ち着け僕。

何をそんなに怖がる必要がある。ただ、いつも通り教室に入るだけじゃないか。

僕が立ち止ったままでいると、直樹が扉に手をかけた。

「さっき言ったこと、分かっているな？」

そう言って、直樹は教室に入ってしまった。

分かっているなだと？ちゃんとした理由も言わずに分かれなど、土台無理な話だ。

僕は直樹に続き教室に入った。

見知らぬ女子生徒が教室に入ってきたというのに、他の皆は全く何の反応を示さない。

僕は先生の立っている教壇に近づいた。

そして、震える声をなんとか抑えて先生にこう告げた。

「先生、俺が誰だかわかりますか？島崎葵です。今朝、目が覚めたら女になっていました」

「えっ!？」

大きな声を出したせいで、他の皆もこちらに注目していた。

「驚くのも無理はありません。俺だって驚いています」

「あの、島崎さん。何を言っているの？」

先生が言ったと同時に大きな音が教室に響いた。

驚いて音のした方向を見ると、周りにあった机を巻き添えにして、

直樹がズツコケていた。

「な、直樹大丈夫か？」

僕が直樹に近づこうとすると、これはすぐに起き上がり僕と先生の所に歩み寄った。

「すみません、先生。こいつ、今朝頭打ってから少し変なんです」

「お、おい。何言ってるんだ！俺は・・・ふがあ！？」

直樹の話を遮ろうとすると、逆に口をふさがれてしまった。

いやああ！何も喋れない！

「あの、遠藤君。島崎さんは大丈夫なのかしら？」

「様子を見て、治らないようでしたら保健室に連れて行きます」

忘れてた！よく考えれば、こいつはクラス投票をぶっちぎりトップで委員長になった男だ。しかも仕事もよくしているから、先生の信頼は絶大！

くそう、分が悪すぎる！

「そう、じゃあ二人とも席に着いて」

「はい。お騒がせしてすみませんでした」

直樹は僕の口をつかんだまま。耳打ちしてきた。

「いいから、話を合わせる。理由は後で話す」

「わかった。わかったから放せ！」

直樹の手から解放された僕は、納得できない気持ちを堪えて自分の席に移動した。

時々、笑い声が聞こえる。完全に僕に向けられたものだ。

・・・笑い声？どうして笑われる？

人が突然女になってしまったことがそんなにおもしろいのか？

いや、そんな雰囲気ではなかった。

「頭打ったんだって？大丈夫？」

席に座ると、隣の友人が声をかけてきた。

「う、うん」

一応、そう答えはしたが何か引っかかる。

心配するところはそこか？

第五話 ホームルームにて……（後書き）

葵 「今回は珍しく話が長いな」

コウ 「そりゃ、まあ頑張ったからね」

葵 「その調子で早く俺を男に戻してくれ」

コウ 「ヤダ（笑）」

葵 「鬼~~~~!!」

コウ 「それではまた、次話で会いましょう」

第六話 パラドックス

昼休みが始まるチャイムの音で僕は目を覚ました。

僕は授業中ほとんどの時間を寝て過ごしている。ああ、なんという親不孝者。

そのため僕のことについてどんな話がされているのかも、まったくわからない。

大きく背伸びをする。霞んでいた視界も徐々にクリアになっていた。今から弁当だの時間だ。

「葵、お弁当一緒に食べよう」

「お、おう」

声をかけてきたのは、僕のもう一人の幼馴染の女子、西村京子。ショートヘアの彼女はいつも前髪を二つのヘアピンでとめている。

そのヘアピンは小学生の時、僕と直樹が誕生日プレゼントにあげたものだった。まだ、大事に持ってくれているらしい。

それにしても、こういうことだろう。僕がこんな姿になったことに気を使っているのだろうか？

「葵」

声のする方に向くと直樹が教室の入り口に立って手招きをしていた。

とつさに京子の方を見してみる。

「私たち待っているから。先に行っておいで」と複雑な表情。

なぜ、京子がそんな顔をするの？

問いかけようと思い、口を閉じる。

そういえば、京子は直樹のことが好きだったっけ。

でも僕はもともと男だから、気にする必要はないと思うけど。やっぱり、女の恰好をしていることが問題なのだろうか。

「ゴメン。すぐ戻る」

僕は席を立ち、直樹の所に走っていく。

「なんだ？」

「ちゃんと周りの奴に話を合わせろよ」

「なんで？」

「あと、喋り方にも注意しろ。ちゃんと女言葉で話せ」

「だから、なんで？」

「お前は本当に気づいていないのか。どれだけ鈍いんだ？」

直樹が呆れたように言う。

「おかしいと思わないのか？先生も京子も他の皆も、女になったお前に対して何の反応も示さない」

「つまり、どういうことだ・・・」

「つまり、お前は元々女だと思われているということだ」

「なんだよそれ？俺は男だろう？」

「ああ、俺とお前にとって、昨日まではな。だが、皆には違う。皆にとってお前は、最初から女なんだ」

「ゴメン。遅くなっちゃった」

僕は京子の所へ戻り、弁当を取り出す。

まだ僕の頭は混乱したままだった。直樹の言葉がぐるぐると頭の中を回っている。言われたことをちゃんと理解できていない。

最初から女・・・？

じゃあ、確かに昨日まで男だった僕はなんなんだ？

（それは、またあとで考えよう。今は何も考えず、女を演じておけ。頭のおかしい奴だと思われたくないだろう？）

それだけを言って、教室に戻ってしまった直樹。彼は今、男子のグループと弁当を食べている。いつもなら僕もそこにいるはずだった。

「そっいえば直樹君が言っていたけど葵、今朝歩いてて電柱に頭ぶ

つけたんだって?」

「え? う、うん。そうなんだ。でもわたし、その時のこと全然覚えていなくなってる・・・」

ああ、気持ち悪い。なんで僕が「わたし」なんて言わなければならないんだ。

それになんだ。歩いているときに電柱に頭をぶつけた?

あいつ、もつとまともな嘘は思いつかなかったのか。

「大丈夫なの?」

「ちよつと混乱してたけど、今は大丈夫」

僕は弁当を広げる。今日の弁当は直樹が作ってくれていたものだった。ああ見えて料理もできるなんて、なんて完璧な野郎だ・・・。
「あれ? いつもとお弁当箱違うね?」

京子が問いかける。

「ああ、今日は直樹が作ってくれたんだ。昨日、あいつの家に泊まりだったし」

「へー、仲いいんだね。もしかして付き合ってる?」

「いや、別にそんなんじゃないよ」

「隠さなくったっていいじゃん」

他の女子が茶化す。

これはマズイ・・・。

正面にいる京子を窺う。その表情は徐々に暗くなっている。僕はそんな気なんて全くないのに。

「だから、そんなんじゃないって。あいつとはただの幼馴染!」

「ホントに?」

半分泣きそうな顔で僕を見る京子。なぜ僕が悪いことをした気分にならなければいけないんだ。

「ホントに。あいつと付き合うなんて、考えただけで寒気がする」

ほっとした表情を見せた京子を見て、僕もほっとする。

女の子って、結構面倒だな。率直な感想だった。

〈放課後〉

ようやく、今日の授業が終わった。

ふと、教室の入り口を見ると直樹が帰ろうとしているのが見えた。僕はすぐに帰りの準備をして、直樹を追いかける。そしてその背中に蹴りを入れてやった。

こんな日に僕を置いて帰ろうなど言語道断！

「で、どうだった？」

「ああ、なんか変な気分だったよ。お前が言った通り、男の俺なんて最初からいなかったみたいだ」

「やっぱりか・・・」

ふと、前を歩いている女子を見る。京子だった。

「直樹、ちょっと待ってる」

僕は直樹をその場に置いて、京子のところへ走った。

「京子！」

「あれ、葵。どうしたの？」

「あのさ、今日の昼休みのことだけど・・・」

「うん？」

「本当にわたしと直樹は、なんでもないからね。だから、・・・」

「だから？」

「だから。そう、何も気にしなくていいから」

そう言つと、急に京子の表情が曇った。

なんだ。何かまずいことでも言ったか？

「で、でも・・・。昨日、直樹君の家に泊まってたんだよね？」

今にも泣きそうな顔で僕に問う京子。

そうだ、こいつは昔から泣き虫だったつけ。よく、近所の子供にいじめられて泣いてたつけ？

で、いつも助けていたのは直樹。確かそれで、直樹のことが好きになった、って言っていたはずだ。

「泊まったって言っても。ほら、わたしと直樹は幼馴染だし・・・」

「ふえ・・・」と声にならない声を上げる京子。

「私だって、直樹君と幼馴染だけど一度も泊まりに行ったことないよ」

「じゃあ、こんど一緒に泊まりに行こう」

言った後、はっと気が付いた。

しまった。男の感覚でさらっと誘ってしまった・・・。

「え、でもそれって・・・」

京子は一瞬で耳まで真っ赤に染まってしまった。その視線は僕のなぜか僕の後ろに向けられていた。

「何の話だ」

「うわあああ！」

いつの間にか直樹が真後ろに立っていた。

結局、僕たちは帰り道が一緒ということもあって、三人で帰ることにした。

「ってか、なんでお前来たんだよ。俺待っているって言ったよな？」

「お前の言うことを聞かなければいけない理由がどこにある？」

ぐうつ、この野郎。

「何の話？それに葵、今『俺』って・・・」

はっ！し、しまった~~~~！

あれほど注意していたのに・・・しかも、直樹にまで呆れた表情をされてしまった。

こうなれば仕方ない・・・。

「なあ、京子には言ってもいいだろ？」

「まあ、こいつならだれにも言わないだろうし、かまわないだろう」

「え、何？何の話？」

また、京子が不安そうな顔になる。

「その顔やめろ」

直樹が京子に言った。

おいおいそれは、いくらなんでも言い過ぎ……。

「……萌える」

「そういう意味かい！」

僕の突っ込みもむなしく、直樹は無視。京子に至っては僕の声など聞こえていないようだった。

「それで……」

僕は大きく深呼吸した。

「あのな、京子。朝学校で聞いたと思うけど、俺今朝起きたら女になつていたんだ」

「え？頭を打って混乱してたんじゃないの？」

「いや、頭を打ったって言うのは嘘」

「……でも、葵はもとから女の子だよ」

沈黙……。

僕は助けを求めるように、直樹の方を見た。

「葵が言っていることは本当だ、一応な……」

「な、直樹君までそんな……」

「悪いが、俺の記憶の中では、葵は確かに昨日まで男だった」

京子は明らかに混乱した様子だった。僕と直樹の顔を交互に見ておろおろしている。

「信じられないか？」

直樹が聞く。

「ゴメン。何言っているのかわからない……」

「だよなあ……」

僕はため息を吐く。

いったいどうすれば、信じてもらえるのだろう。

「今すぐ、信じることはできない。でも、葵が今大変だっていうこ

とはわかった」

「本当？」

「うん。だから、困ったときはいつでもわたしたちを頼ってね」

「京子・・・」

嬉しさのあまり、視界がかすむ。持つべきものは友だと思った瞬間だった。

「でも、葵と直樹君は葵のことを男だと思っているんだよね？」

「そう。でも俺たち二人以外は、こいつのことをもともと女だと思っている」

「ん、何というか。不思議だね」

この状況を不思議で片づけるな！

「誰がおかしいんだろうな？」

僕は急に沸き起こった疑問を口にする。

「俺とお前以外の意見が一致している。今のままじゃ、おかしいのは俺とお前だけだな」

その言葉に落胆する僕の肩に、京子は手を置いた。

「大丈夫。わたしは二人の味方だよ。二人に何が起きたのか、わたしにはわからない。だけど、わたしは秘密を守るし、葵がもどに戻れるように協力するから」

「うん、ありがとう」

「なんだか、小さい頃に戻ったみたいだね。三人で秘密を共有するなんて」

「そうだな・・・」

幼かった頃を思い出し無邪気にはしゃぐ京子を見て、なぜか癒される僕だった・・・。

第六話 パラドックス（後書き）

第六話、新キャラ登場です！

因みに、サブタイトルの『パラドックス』はある事実に反する説で、その説に反対する正当な論拠を見出しがたいもの。

という意味を使用しています。

まさに、葵と直樹の状況ですね。

第七話 遠藤直樹の思考回路

「ただいま・・・」

「あら、お帰り。直樹、今日は遅かったわね？」

母が玄関まで出迎えに来る。

「友達と話していた」

「そうなの」

玄関で靴を脱ぎ、俺は自分の部屋に入ろうとした。

「なあ、母さん。葵のことだけど・・・」

「葵ちゃんのこと？」

「・・・いや、やっぱりいい」

母があいつのことを「葵ちゃん」と呼んだ。それだけ聞けば十分だった。

やはり、母さんの中でもあいつは女であるらしい・・・。

「そつえば、今日お弁当作れなくてごめんね」

「いや、いい。俺も料理好きだし。母さんは仕事だったから仕方ない」

「葵ちゃんは喜んでいた？」

「別に。ごちそうさまは言っていた」

「で、どうなの最近？」

「何が・・・？」

「葵ちゃんよ。何かないの？」

「別に、何も無いよ・・・」

「本当に？」

「本当だよ。それに、あいつはただの幼馴染だ。母さんだって知っているだろう？」

「幼馴染だからって調子に乗ってると、あの子可愛いんだからすぐに他の男の子に取られてしまうわよ」

俺は母を無視して部屋に入りすぐにドアを閉めた。

そうしないと何かまずい気がした。

未だに手に残るあの感覚……。

あんなこと、するのではなかったと今更後悔。

今朝、女になっていたあいつを初めて見た時の事を思い出しそうな気がした。

それにしても、なぜ俺まで葵が男だったことを覚えているのだろう？

葵だけが覚えているならまだ話が分かる。単にあいつの頭がおかしい。その一言で終わらせることが可能だ。

しかし、俺は覚えている。

俺が覚えておかねければならない理由があるのか……？

それまでの思考は、夕飯の合図を聞いた瞬間。俺の頭の中からなくなっていた。

第七話 遠藤直樹の思考回路（後書き）

今回は直樹の話です。

久しぶりに短い話になりましたね。

それにしても、夕飯の合図を聞いただけで、それまで考えていたことをすべて忘れるとは、なんという男だ……。。

現在、一日一話ペースで投稿していますが、忙しくなってきたので少しの間、二日で一話や三日に一話になるかもしれません……。できるだけ早く投稿するように心がけるので、よろしく願いします

第八話 西村京子のため息

「ただいまー」

「お帰り、京子。晩御飯の支度できているよ」

「はい。すぐに行くー」

わたしは靴を脱ぎ、台所へ向かった。

台所に一步近づぐごとに、いい匂いが強くなる。やっぱり、お母さんの料理が一番だ。

でも、直樹君の料理も食べてみたいな……。

いいな、葵は……。直樹君の家に泊まるし、お弁当も作ってもらうし……。

わたしだって、一応二人の幼馴染なのに。

ふと、わたしは今日葵が話していたことを思い出した。

朝起きたら女の子になっていた、と言った彼女。でも、葵は元々女の子、いったいどういうことだろう。

「ねえ、お母さん」

「どうしたの？」

「あのね、友達が言ってたことなんだけどね。その子は元々女の子のはずなのに、朝目を覚ましたら体が男の子から女の子に変わっていったって言われたの。それに幼馴染の男の子も、その子の言っていることに間違いはないって言うの。お母さんはどう思う？」

「そんなことを言った子が、あなたの友達にいるの？」

一瞬にして、お母さんの顔が怪訝な表情を作り出した。いやな予感がする。

「あなた、そんな子に関わって——」

「ごめん、お母さん。言葉が足りなかったわ。そういうストーリーの小説を思いついたの」

とっさに、わたしは嘘をついた。わたしは文芸部に入っていたし、お母さんにも作品を読んでもらっていたから、あっさりと信じても

らえた。

少し申し訳ない気がする。

「なんだ、てつきりそんな子があなたの友達にいるのかと思ったじゃない」

お母さんはお腹を抱えて笑っている。

「いいんじゃない？なんていうか、とても突飛な考えで、おもしろいと思うわ」

「それって、褒めてる？」

葵と直樹君の名前を出さなくてよかった。二人の名前を出していたら、きつとお母さんは「もう、二人と関わるのはやめなさい」と言うだろう。

私のことを気遣ってくれるのはありがたいが、少し過保護すぎるのだ。

でも、現実ではだめで、物語はならびいい。これはいつたいてどいうことなのだろう？

片方は許されるのに、もう片方では許されない。理不尽というものではないだろうか？

それとも、こんな考えを持っているのがわたしだけなのだろうか？

それがどちらにせよ、わたしの思いは変わらない。二人を信じ（とても信じられることではないが）手助けをすることは決めている。だって二人はわたしの親友だから。

そんなことを考えながら、わたしは世界で一番好きなお母さんの料理を口に運んだ。

ああ、でもやっぱり直樹君の料理も食べたいな……。
ため息をつく、わたしだった。

第八話 西村京子のため息（後書き）

えゝ、今回は京子の話です。

今回の話も少し短いですね・・・。

まあ、前回と合わせてのサブイベントなので大丈夫かな？（汗）

コウ「なんというか・・・京子については何も言えない（笑）」

京子「え？なにそれ！何か言ってますよ」（泣）」

コウ「感想、評価お待ちしてますゝ！」

第九話 最大の試練

これも、これも、これもこれもこれも……！

「写真まで、女の子になつてる……」

僕はため息をつく。

さつき、母さんに今朝のことを話してみた。返事は「何それ、何のネタ？」大爆笑だった。

晩御飯を食べ終わった後、僕は今までに撮った写真をすべて見直していた。

僕が生まれた時の写真も、直樹や京子と遊んでいる写真も、小学校の時の卒業アルバムも、中学校の時の卒業アルバムも、すべて女だった。

「葵」。お風呂空いたよ。着替えも置いておくからね」

姉さんの声が僕の部屋まで届いた。

言い忘れていたが、僕には島崎明日香という二つ年上の姉がいる。同じ高校の三年生だ。今の僕と同じくロングヘアー、そして弟（すでに妹？）の僕が言うのもあれだが、なかなかの美人だ。ただ、男勝りな性格のせいで中々彼氏ができないのが悩ましい。

「わかった。ありがとう」

部屋のドアを開け返事をする。

僕は卒業アルバムを力任せに投げつけた。壁に当たり大きな音を立てる。

まだ、気持ちの整理がついていない……。

朝、目が覚めたら女の子になつていたこと？

家族や友達に説明しなければいけないこと？

このまま、女として暮さなければいけないかもしれないこと？

どれについて？

いや、どれも違う・・・。

直樹にあの時の願いを話すこと。

そう、このことだ・・・。

また、ため息・・・。

いったい今日何度目になるだろう。

「葵。今の音はなに？」

「なんでもない。本を落としただけ・・・」

「そう、どうでもいいけど早くお風呂に入らないと、お湯冷めるわよ」

「うん、わかった」

風呂に入ろう。そこで今までのことをまとめて、まとめて・・・。
・まとめて、どうする？

とにかく、風呂に入ろう。少しは気分もよくなるはずだ。

服を脱ぎ下着姿になる。ふと、脱衣所にある鏡を見た。見慣れぬ少女が一人、こっちを見ている。

「うわああ!？」

僕はとつさに、服で胸元と局部を隠す。同時に鏡の中の少女も同じ格好をした。

・・・って、自分じゃん。

僕は下着姿のまま、鏡に映った僕を見た。自分で言うもなんだが、直樹の言っていたとおり、中々可愛い。不幸中の幸いと言ったところだろうか？

どうしよう、ドキドキしてきた。いくら自分の体とはいえ、頭の中身は健全な15歳の男子。しかも、女の子の裸なんて一度も見たことないのに！

あれこれ考えているうちに、どんどん心臓が速くなっている。いつか破裂してしまいそうだ。

このままでは、風呂に入ることができない！
どうにか、自分の体を見ずに風呂に入ることにはできないのか・・・。

神はこんなところで最大の試練を僕に課した！！

「ふ~~~~・・・」

熱いお湯に肩まで浸かる。視界には風呂場の天井。水滴がたくさんついている。

結局、僕は上を向いて風呂に入ることにした。

いくら自分の体とはいえ、15歳の女の子の裸を見るのは、申し訳ない気がした。

「そう、俺は男なんだから・・・」

言い聞かせるように言った。いつか、絶対に男に戻るため・・・。

そもそも、申し訳ないとは誰に対して思うことだろう。

しかし、上だけを見て行動するのは、意外と難しいものだ。下着を脱ぐまでは簡単だったが、風呂に浸かるまでに三度も転んでしまった。おかげでお尻が痛い・・・。

僕は島崎葵。

今朝、男から女になった。

遠藤直樹以外、僕がもとも女だと言う。

写真に写っている僕もすべて女。

・・・。。。

どうしようもなくないか？

どう足掻こうと、僕の体験を話せば話すほど、僕は頭のおかしいやつになる。

・・・決めた。明日、直樹に打ち明けよう。『あの時の願い』を・

体、洗おうと。

僕は湯船から立ち上がる、視線は例のごとく天井。

ゆっくりと左足を湯船の外に出す。次に右足・・・・・・・・。

右足が何か丸くツルツとした物を踏んだ。

ヤバっ!?

踏んだものが石鹸とわかる前に足を滑らせ、四度目の尻餅をついた。

「痛い！」

僕はお尻をさすりながら立ち上がった。

はっ、これってセクハラ・・・?

数秒、その場で固まる・・・。

そんな訳ないか、一応自分の体だし。

体を洗った後、シャンプーを手に取った。

えっ?なんで、体を洗った時の話を省いたかって?

つまり、あれだ。体を洗うということは、必然的に体に触らなければいけないということで。胸やら何やらを触つ・・・・。

深い自己嫌悪に駆られる僕だった。

シャンプーのいい匂いが風呂場に広がる。

いつもと同じように力任せに髪を洗っているときだった。

「いったゝい!!」

頭に伝わる違和感。髪が引つ張られているような痛みだ。

か、髪が絡まった・・・！！

「明日香姉さ〜ん！」

僕はたまらず姉さんの名前を叫んだ。

「どうしたの！」

パジャマ姿の姉さんが大急ぎで現れ、風呂場のドアを勢いよく開けた。

「うわああ！」

あまりにも早い姉さんの登場に僕は驚き、風呂の中に飛び込む。

「急に入ってくるなよ！恥ずかしいだろ！」

「女同士なのに何恥ずかしがる必要があるの。ってか、泡つけたまま風呂に入るな。母さんまだ入ってないんだぞ！」

「・・・で、なんであたしは呼ばれたの？」

風呂場のタイルの上で正座させられている僕。もちろん全裸。視線は相変わらず天井・・・。

というか、恥ずかしい。足の痺れより、全裸で正座が辛すぎる。

なぜ僕だけこんな目に・・・！

「髪が絡まったのよ・・・」

「あんたはガキか！」

僕の頭をつかみ前後に揺さぶる姉さん。

予想以上に痛い・・・。

「どこ？見せて」

姉さんに頭を差し出す。

「あゝ、あった、あった」

ブチッ——！！

「きゃー！！」

姉さんは僕の髪の絡まりを見つけると、力任せに引き抜いた。

「はい、お終い」

「そんなガサツだから可愛くても彼氏できないんだよ！」

僕は目に涙を浮かべながら言った。が、これがいけなかった。完全に地雷を踏んでしまっていた。

「誰が、どうして、彼氏ができないって……!」

「え、……ちよつと、姉さん? 今のは冗談——!」

「問答無用!」

いやあああああ!!

「ほら、そこに座んなさい」

「え?」

「髪洗ってあげるからさっさと座れ!」

「はい!」

説教もようやく終わったが、今度は命令。僕の姉はどこまで男勝りなんだ……。

姉さんに言われるがまま椅子に座る。目は自分の胸が視界に入らないように固く閉じた。

すると、すぐに姉さんの手が僕の髪触れた。優しい手つきで髪を洗っていく。

こういうところは女の子なんだから……。

口には出さず思っていると、鼻歌が聞こえてきた。姉さんだ。

「昔を思い出すわね」

「昔って?」

「あんたがまだ小学生になったころよ。毎回あんた髪を絡ませるから、いつもあたしが洗っていたのよ。どうせ覚えてないでしょう?」

「え、うん……」

ふと、思った。姉さんの記憶で僕はどうなっているのだろう。やはり、女のままなのか。

「ねえ、姉さん」

「ん?」

「わたしって、小さい頃どんな子だった?」

「なによ急に。まだ思い出に浸るには若いでしょう？」

「いいから……」

「うーん、そうね。一言でいえば喧嘩っ早いというか、口が悪いと
いうか、男勝りな女の子だったわね」

「姉さんのことは聞いてないんだけど……」

僕の頭に拳骨が降ってきた。

第九話 最大の試練（後書き）

コウ 「……………（反省中）」

明日香 「あんたも全裸説教一時間コースいつとく？」

コウ 「ごめんなさいいいい！」

葵 「感想、評価お待ちしてます」

明日香 「どこ行くの葵。あんたもだよ？」

葵 「いやあああ！！！」

第十話 一日の終わり

「姉さん、そこ痛い！」

「あんたが悪いんでしょう。我慢しなさい」

姉さんは僕の言ったことを無視して、僕の髪を洗い続ける。だから、そこ、たんこぶ——痛いっ！！

「もう少し、優しくしてくれてもいいんじゃない？」

「はい。シャンプーお終い」

無視かよ……。

「最近どうなの？」

シャンプーを洗い流した姉さんは、リンスを手に取りながら、そう聞いた。

「最近？」

「そう、最近」

「もう、何もかも無茶苦茶」

「え、何それ？ケンカでもしたの？」

姉さんの言葉に一瞬目を開きそうになる。もちろん、僕は今朝からのことを言っただけだ。

「姉さん。何の話してるの？」

「何って、直樹君のことに決まってるじゃない」

姉さんの予想外の言葉に、僕は飛び上がった。しまった。

「何言ってるの、姉さん！あいつはただの幼馴染だから！」

僕は姉さんの顔を見ながら、大真面目に言った。だが姉さんの目は、僕を見ていない。

「葵、そんな恰好で言われても説得力ないよ」

不思議に思った僕は、姉さんの視線を追ってみる。

そこには大きなメロンが二つ……。

「きゃーー！」

姉さんの言葉に驚いた拍子に目を開けていた僕は、しつかりと見てしまった。決して見ないと誓ったはずの15歳の女の子の体を・・。

とにかく、僕は手で胸元やら、なにやらを隠した。

それに「きゃー！ー！」ってなんだ恥ずかしい。

「それにしても、いつの間にそんなに大きくなったの。あたしなんか、こんなに小さいのにさ」

姉さんは自分の胸と僕の胸を見比べながら言う。確かに、僕がメロンなら姉さんは、まな板クラスだ。何となく勝ち誇った気分になる。

「食べてるものも同じなのに、あんただけこんな怪しからん乳しやがつてゝ！」

「え、コラコラ、なんだその手は・・・。いや、ちょっと、姉さん？ いやあああ！」

今日、二度目の辱めを受けた僕だった・・・・。

十分後

「ね、姉さっ・・ん。そろそろ、やめ・・ふああっ！」

あの後から、姉さんは僕を風呂場の床に押し倒し、胸をいやというほど揉みしだいている。

一方、僕は一切の抵抗を許されず、姉にセクハラをされるという奇妙な感覚に襲われている。

しかも、まだ満足してないらしく、姉さんの手の動きはどんどんエスカレートしていく。

慣れた手つき（？）で胸を揉まれるたび、堪えきれずに声が漏れる。

あの、これ以上の描写って危険じゃないですか・・・？

ようやく姉さんの魔の手から解放された僕は、リンスを洗い流し風呂場から出ることができた。

「ああ、楽しかった！」

「全然楽しくなかった！」

満足げな顔をしている姉さんとは対照的に、僕は激しい羞恥心に顔を赤く染める。

人生初の胸を揉まれる体験に……初じゃない、二度目だった。

一回目は今朝の……やめた、思い出すだけでイラッとする。あの変態ポーカーフェイスめ！

下着を穿きながら考える。

姉さんの手つき、かなり慣れというか、何をされたらどう感じるかを把握しているような手つきだった。

自分の姉がこんなにエッチだと知ったのはもちろん初めてで、その点に関しても驚きを隠すことができない。

女の子同士でこういうことをするのは当たり前なのか？

それとも、姉さんにはそっちの気が……

そんな訳ないか。

「葵、なんか言った？」

「うっん。何も……」

僕は朝、驚くほど苦戦を強いられた物を手に取った。

ブラだ。

それに苦戦というか、あれはいろんな意味で惨敗だった。

今度こそ——！！

そう意気込み、ブラを胸に当て手を後ろに回す。あとはホックをするだけ……。

「あんた、何やってんの？」

「ホックがうまくつけられない・・・」

呆れた顔をして、姉さんが僕の背に回る。また胸を揉まれるのではないかと身構えたが、姉さんはホックをつけてくれただけだった。「そんなに体固かったっけ？」

姉さんが僕に聞く。

「別に固くはないけど、今朝からうまくつけられなくて・・・」

姉さんが驚いた顔になる。「なんだ、その顔は」と言いたくなるが我慢。僕が何かおかしいことを言ったのだろうか。

「あんた、今朝って。直樹君の家に泊まってたんじゃ・・・」

「あつ——！」

今朝のことを思い出した僕は、顔が真っ赤になる。

それを見た姉さんは、予想が確信に変わったらしく意地悪な笑みを浮かべる。

「あんた、やつぱりそういう関係だったんじゃない」

何が面白いのか、姉さんは愉快そうに僕の肩を叩いた。僕は不愉快でしかたがない。

「違う！それは誤解、そんな関係でなんか一切ありません！」

「そんな、隠さなくったっていいじゃない」

「隠してなんかないよ。だいたい、あんな無口で、ポーカーフェイスで、やる気あるのかないのかわからなくて、変態で、スケベで、デリカシーの欠片もないあんな奴となんで、そんな関係にならなきゃいけないのよ！考えただけで、背筋が凍るわ！」

「へー、そうなんだ。じゃあ、あたしが直樹君もらっちゃおうかな」。あの子、あたし好みだし」

姉さんの言葉にぎよっとする。

「ダメ。それは絶対にダメ！」

「なんで？付き合っているわけでもないんでしょ？」

「どうしても！自分の姉と友人が付き合うなんて考えられない！」

「そんなこと言って、本当は直樹君を取られたくないんでしょ？」

僕が顔を背けると、姉さんは悪戯っぽく笑う。

「素直になりなよ」

全力で否定する僕だったが、姉さんには全く効果がなかったらしい。

「……完全な誤解です。」

「嫌い嫌いも、好きのうち」

姉さんはウインクしながらそう言つと、さつさと自分の部屋に戻つてしまった。

下着姿の僕と、完全な誤解を残して……。

僕は自分の部屋に戻り、散らかしたままだった部屋を片付ける。片付けが終わると、すぐにベッドに倒れこんだ。

今日は散々な目にあつた。

朝起きたら、女の子になつていて。

直樹以外、誰も男だった僕のことを知らない。

京子も、母さんも、姉さんも僕はもとも女だと言つし。

写真まで、すべて女の子。

姉さんにセクハラされるし……。

本当に今日は何んという日だったんだろう。

明日から僕はどうすればいい？

何ができる？

じゃあ、女の子のままこれからを過ごすか？

嫌だ。

体が女で、頭の中身は男。

この違和感には耐えられない。

自分を偽り、生活するなんて考えられない。

それは、悪夢に等しい・・・。

悪夢——？

そうか、そういうことか。

それならば、今日の事の辻褄が合う。

これは夢だ！

それしかない！

目を覚ませば男に戻っているはずだ！

僕は安心したせいか、そのまま眠りに落ちてしまった。

物事がそんなに都合よくいく訳などないと知らずに…………。

第十話 一日の終わり（後書き）

なんかかんや言いながら更新してしまった第十話。
如何だったでしょうか？

コウ「R指定なくても大丈夫かな？」

葵「……ノーコメント」

明日香「コウ」

コウ「ん？その声は……」

明日香「まだ、反省が足りていないみたいね！ウフフフ」
コウ「いやああああ！！」

感想、評価、ダメだし等々、お待ちしております

第十一話 「なぜだ！」と叫びたくなる朝って、ありますか？

いつもの目覚まし時計のベルが鳴る。

僕は枕に顔を埋めたまま、耳を劈くようなその音の主を手で探った。

あれ、ない……？

いつもは枕元に置いているはず。だが、いくら枕元を探しても目覚まし時計の感触がしない。

仕方なくベッドから起き上がると、目の前にパジャマ姿の姉さんが目覚まし時計を持って立っていた。

「あれ？・・・姉さん、おはよう」

「なに呑気なこと言ってるの。早く起きないと学校遅れるよ」

姉さんは僕の目の前に目覚まし時計を突き出す。時間は七時、まだかなり時間に余裕がある。

「まだ、七時だろ？もう少し寝かせて・・・」

僕がもう一度枕に顔を埋めた瞬間、姉さんの拳骨が降ってきた。

「何するんだよ！」

「だから起きなさいって言っているの。あんた、いつも準備に時間かかるんだから」

「準備なんて五分で終わるって・・・」

そのまま、眠りに着こうとしたが、背中に姉さんの殺気を感じ、僕はしぶしぶ起きることにした。

「うわっ！あんたすごい寝癖！どんな寝方してたの？」

姉さんが僕の髪を触りながら言った。触られている感じで、何となくわかるが、確かに大変なことになっているようだ。

いつもの寝癖とは何かが違う。

「寝癖くらい水でも浸けておけば直るって」

僕は目を擦りながら言った。

「いや、水だけじゃ絶対に無理。あたしが直してあげるから、部屋
においで」

そう言つと姉さんは自分の部屋に戻つていった。

なぜ僕が姉さんに寝癖を直してもらわなければいけないんだ。と
思つたが、怒られると怖いから姉さんの後に付いて行く。

「ほら、早く座つて」

「え？」

「髪梳かしてあげるからさつさと座れ！」

「はいい！」

ん？・・・なんかデジャヴ？

身に覚えのあるような、ないような、そんなやり取りに僕は首を
傾げた。そして、姉さんに促されるまま、鏡台の椅子に座る。

鏡に映つたのは、姉さんと女の子。

僕がいない・・・？

僕は寝ぼけているのか？

自分の右頬を思い切りつねる。すると、鏡の中の女の子も右頬を
つねつた。

「コラコラ。なにをしてるの・・・！」

僕の行動に驚いた姉さんが僕の手を叩く。同時に鏡の中の女の子
も叩かれた。

・・・。。。。。

なぜか視界が霞んできた。僕は後ろに振り返り姉さんを見つめる。

涙目になっている僕を見て姉さんが驚いた。

なぜか………？

いや、理由くらいわかっている………。

「え、なに？そんなに痛かった？ゴメン、葵！」

僕は目を擦り、鏡台に向き直った。

恐る恐る。ゆっくりと。慎重に。何か大切なものでも触るように・

・僕は手を自分の胸に当てる。そこには、大きな膨らみが二つ・
・。

鏡の中の女の子も同じ格好……。

姉さんは口をあんどりと開けている。

そして、……僕はゆっくりとそれを揉んでみた。ふわふわ
とした柔らかい感触が手に伝わり、胸にはくすぐったいような、何
とも言えない感触………。

姉さんは口を開いたまま僕を見ていた。

僕は涙目のまま姉さんを見る。

二人の視線が交わる。

沈黙が二人を包む………。

「なぜだああああー！！！！？？」

第十一話 「なぜだ！」と叫びたくなる朝って、ありますか？（後書き）

葵 「なぜだああああー！！！？？」

明日香 「それは、あたしのセリフだあああ！！！」

そして、葵の頭にはたんこぶが増えましたとき。

直樹 「めでたし、めでたし・・・」

京子 「直樹君っ！？まだ終わらないよ！！！」

第二章スタートです！

感想、評価お待ちしております！

第十二話 心は男！でも時々、乙女モード？

たんこぶが痛い…………。

僕は頭をさすりながら、通学路を歩く。

ちょうど、頭のとっぺん辺りに二つのたんこぶが仲良く並んできていた。二つとも、姉さんの鉄拳によるものだ。

あの後、僕に鉄拳をくらわせ「もう、葵なんて知らない！」と涙目で叫んだ姉さんは、通学力バンを持って家を飛び出していった。

なぜ、涙？泣きたいのは僕の方だよ？

姉さんが泣いて飛び出していったことに思い当たる節は、一応ある。

僕が突然自分の胸を揉みだしたからだろう。姉さんは男勝りな性格はしているが、心は女の子。自分の胸がまな板だということは、彼女のコンプレックスの一つだった。

そんなコンプレックスを持った姉の前で、自ら胸を揉みだすメロシな妹……。

彼女の眼にはどう映ったのだろうか？

強烈な嫌味と取られても仕方がない。

それを考えると申し訳ないことをしてしまった気がする。でも、仕方なかったんだよ。

僕だって混乱していたんだよ、姉さん？

因みに、着替えるのを忘れてパジャマのままで学校に行こうとし

ていた姉さんは、家を出て、五分後に顔を恥ずかしさで真っ赤にさせたまま着替えに帰ってきた。

髪を梳かして、寝癖を直してくれると言っていたが、もちろんその話はお流れ。

自分で髪を梳かすのは、もちろん初めての体験でかなりの苦労だった。

それでも、寝癖を完璧に直すことはできなかったので、姉さんの髪留めのゴムを拝借しポニーテールにして何とか誤魔化すことには成功した。

「それでも、もう少し優しくしてくれたっていいじゃない・・・」
僕は呟いた。

そろそろ、直樹の家だ。僕と直樹は一緒に学校に行っている。あいつも、僕も一度も時間に遅れたことはない。そう、ちょうどこのぐらいの所で直樹は家から出てくる。

すると、直樹の家まであと十メートルほどの所で、直樹が家から出てきた。

「直樹〜！」

僕は手を振りながら直樹の名前を呼んだ。
声に気が付いた直樹は、僕の顔を見て、一瞬変な顔になる。眉に皺を寄せ、遠くを見るような顔だった。

そして・・・直樹、ダッシュ！！

えっ！なぜ？

「直樹！待てよ！」

僕も慌てて直樹を追いかける。

速い！だが、まだまだ！！

実は、僕が一つだけ直樹に勝てることがある。それは短距離走・
・・・のはずなんだけど。

追いつけない！それどころか徐々に離されている！

僕はそこである事実を思い出した。

僕は今、・・・女です！

容姿、身長、体重、体力、すべて女の子仕様です！

追いつけるわけありません！

「諦めてたまるか！——つて、ひゃあ！」

——ズシャアアア！！

転んだ・・・・・・何もないところで！

僕が転んだことに気が付き、直樹が立ち止る。僕は転んだまま、
うつぶせで直樹が近寄ってくるのを待った。

「おい、葵・・・・。大丈夫か？」

かかった——！！

直樹の影が視界に入った瞬間、僕は飛び起き直樹の腕をつかんだ。

「捕まえたあつー！」

鼻血を出しながら言う僕だった。

何とか直樹を捕まえ、今は隣を歩かせている。

鼻血ももう止まって、制服に付いた汚れも払った。

ただ、さっきから直樹の様子が変だ。僕の顔を見た瞬間、走って逃げだすし、今は僕の隣でずっとブツブツ呟いている。

「違う、夢だ。これは夢だ。俺はまだ夢を見ているんだ」

こんな調子。それによく見ると、直樹の額には汗が伝っている。

直樹がここまで動揺しているのを見たのは、これが初めてだった。そのせいで余計心配になる。

僕は何か悪いことをしただろうか。

「直樹？」

「な、なんだ？」

やっぱり、明らかに動揺している……。

「いったいどうしたんだ。俺の顔見て逃げ出すなんて？」

一度、直樹が俺の顔を見た。そして、ため息。

「夢じゃなかったんだ……」

「そうさ、断じて夢なんかじゃない。俺の姿見てわかるだろう」

「ああ、だから逃げた」

そんな理由か……。

と思いつつ、自分も昨日のことを夢だと思っていたので、口には出さない。普通だよな、夢だと思うのが……。

二人を沈黙が包む。

「なあ。これ、どうだ？」

沈黙に耐えきれなくなった僕は、直樹にポニーテールを見せる。

「どうだ、って……？」

「似合ってるか、ってことだよ」

直樹は僕をじっと見る、正確には僕の髪だが・・・。

「ああ、似合ってるよ」

直樹が少し微笑んだ。

その顔を見た瞬間、心臓が跳ね上がる。

なんで？

自分で聞いたことなのに、期待して言った言葉なのに、期待通りの返事に驚きを隠せない。

というか・・・顔、熱っ！

まだ、直樹はこつちを見ている。二人の視線が交わる。

「それに、ほら・・・」

直樹が僕の髪に触れる。

一瞬、何かに期待。

「引っ張りやすい——」

・・・は？

「いたたたた！！コラ、直樹——」

あるうことか、直樹は僕の髪をつかみ引っ張った。

僕の痛がる姿を見て、大笑いする直樹。今までの空気台無し！！

いや、おかしい！そもそも、僕は何に期待していたんだ！それに別に、空気台無しって・・・。

僕がそっちの気あるみたいじゃん！！

あゝ、これもこの残念なイケメンのせいだ。

直樹のバカ~~~~~！！

第十二話 心は男！でも時々、乙女モード？（後書き）

葵、心は男と言いつつ、今回の話は乙女モード全開ですね。

因みに、

いつもポーカーフエイスの直樹が『微笑んだ』、『大笑い』した件ですが。

直樹の『微笑んだ』 葵や京子など、幼馴染にしか感じ取れない。

『大笑い』 ちよつと声を出して笑った。

といった感じです（笑）

感想、評価、ダメだし等々、お待ちしております！

第十三話 唐揚げはテンションを左右する！

「おい・・・」

直樹の声を無視して歩き続ける。

「葵？」

「ああ！もう、うつとしい！俺に話しかけるな！」

あれから、直樹は何度も話しかけてくるが、僕はことごとく無視し続けていた。

直樹は散歩後ろを歩いている。もっとも、僕が近づかれないように速く歩いているだけだが。

「おい」

——グキッ！！

不意にポニーテールを引っ張られ、首から変な音が出る。さっきから思い切り引っ張られるせいでむち打ちになりそうだ。

「だから、引っ張るな！！」

「怒っているのか？」

「それより放せ！痛いんだよ！」

ようやく直樹が、僕の髪を放した。放されてすぐに、直樹の方に向く。

「怒っているのか？」

直樹がもう一度聞いてきた。

「ああ、怒っているよ！」

「どうして？」

「どうしてだと？よくそんなことが言えるな！女の命とも言える髪を引っ張りやがって！それに——！」

「お前、女の命って・・・男に戻るの諦めたのか？」

「どうしてそうなる！！」

僕の不意を突いたパンチは直樹の腹に見事命中した。うまい具合に鳩尾に決まったらしく、直樹は膝を折り地面に手をついた。

僕はそれを見て鼻を鳴らす。

「乙女の純情を弄んだ罰だ！」

「おま、・・・都合のいい時だけ乙女になるな・・・それに、いつ俺がお前を弄んだ・・・」

僕はその場に直樹を置いて、一人学校へ歩いて行った。

～昼休み～

「あゝ、よく寝た！」

昼休み開始のチャイムとともに、僕は目覚める。手で口を隠しながら大きな欠伸をした。

「葵」

「京子、おはよう」

「いや、おはよう。じゃないでしょ。毎回授業寝てて、テストは大丈夫なの」

「ん、大丈夫。たぶんだけど。さ、弁当食べよう」

京子が何か言いたそうな顔をしている。

「どうした？」

「あの、直樹君呼ばない？」

少し恥ずかしそうに言う京子。こういうところが、こいつの可愛さだよな・・・。

「オツケ。じゃあ、呼んでくるわ。それとも京子が呼んでくる？」

悪戯っぽく行ってみると、京子は恥ずかしそうに首を横に振った。確かに京子がこっという顔を見ると、直樹の言っていたように萌え

る気がする……。

僕は席を立ち、直樹の所へ行く。

「直樹、弁当一緒にどう？京子が呼んでるんだけど」
そう言うと、直樹は僕から顔を背けた。

「乙女の純情とやらを弄んだ（らしい）俺に、そんな資格はない」

「お前、まだ根に持っているのか。しかも、らしいってなんだ！」

「嘘だ。わかった。それなら屋上に行かないか？」

「いいな、それ」

弁当を持った直樹が僕の後ろを付いてくる。それに気づいた京子は嬉しそうに、弁当を準備し始めた。

「萌えるなあ」

そう直樹が呟いて、なぜかイラツとする僕だった。

「屋上って、意外と空いてるんだな」

高校生と言えば、皆屋上で弁当を食べている。というイメージがあつたが意外にも、人は少なかった。

適当な場所に、僕たち三人は腰を下ろした。

「で、どうだった昨日？」

直樹が僕に聞く。

「どうだった、って？」

「お前のことだ。どうせ親とかに、女になってしまったとか、言っ
たんじゃないのか？」

——ぐっ！！

こいつに言い当てられると、なんか腹立つ。

「凶星みたいだね……」

「だな……」

二人は興味深そうに僕を覗きこむ。

「ああ、言ったよ！言いました！」

「で、どうだったの？」

京子は、僕の弁当の唐揚げを取り口に入れながら言った。

「ああっ！コラ、京子！」

唐揚げを取られた。弁当に入ってるだけでテンション上がるほど

大好きなのに・・・。

「この恨みはいつか必ず晴らしてやる！」

「ゴメン。ほら、卵焼きあげるから」

その様子を見ていた直樹が、僕の最後の唐揚げを口に入れてしまった。

「お前、それ最後だったんだぞ！吐け！今すぐ吐けー！」

「嫌だ・・・」

弁当は食べ終わったが。三つも入っていた唐揚げを一つしか食べられなかった僕のテンションはガタ落ちだった・・・。

「葵、続きは？」

京子が昨日のことを話すように促す。

テンションが下がった原因を作ったというのに、それに対してはなにも感じていないらしい。

まさか、あの京子にこんな一面があったとは・・・。

「そうだ、早く話せ」

「お前が言っな！」

僕は直樹に向かって言った。

「とりあえず、晩御飯の時に母さんには話してみたよ」

「なんて言われた？」

「何それ、何のネタ？だとさ」

「驚きもされなかったのか。なんというか、哀れだな・・・」

「うるさい！」

僕はため息をついた。直樹に哀れまれるとは……。

「納得いかなかったから、卒業アルバムを見たけど、それも全部女だった……」

一同沈黙……。

「なあ、京子はなんで俺の言ったことを信じてくれたんだ？」

「うん。実をいうと、まだ完全には信じられてないんだよね。でも、葵が困っているんだから、それは助けたいな、って」

京子の言葉に頷垂れる。

信じようとしてくれているのは救いだ、信じられていない。これは意外とダメージを受ける言葉だ。

「仕方ないさ。俺たち二人しかわからないんだから……」

直樹が言った。それを聞いた京子が不思議そうな顔をする。

「でも、なんで直樹君まで、葵と同じ記憶なんだろう？」

「確かにそうだ。俺も京子たちと同じ記憶なら、葵の頭がおかしくなった。で済ませられるのに……」

なぜ、俺を見ながら言うんだ直樹よ！

「俺の家で泊まった日に女になるとは……。全く厄介なこととしてくれやがって」

「俺のせいだよ！」

「あの、二人は泊まってた時に……。その、何か……。した？」

なぜか恥ずかしそうに顔を赤らめて言う京子だったが、意味はすぐに理解できた。

僕も想像して顔を赤くする。

「そんな訳あるか！直樹、お前もなんか言え！」

「そうだな、と顎に手を当てる。何を真剣に考える必要がある！」

「寝る前までは女じゃなかったから、何もしてない」

「一回、死んで来い……！」

第十三話 唐揚げはテンションを左右する！（後書き）

十三話です。

時間に遅れてすみません！

それにしても、京子のキャラが定まっていな気が……。
今回は何か、ブラック(?)な一面まで出てきたし……。

感想、評価、ダメだし等々、お待ちしております！

第十四話 安い挑発の裏には何かある！

「唐揚げ……」

「お前、まだ根に持っているのか？ すんだことは早く忘れろ」

「だから、お前が言うな！」

僕たちが屋上で騒いでいると、誰かが近寄ってきた。

「あ……。葵、あれ」

京子が気づき、その人物を指さす。男子生徒のようだ。ただ、逆光で顔が見えにくい。僕は目を凝らした。

「……げっ!？」

それが誰だかわかり、僕は顔をしかめる。

「なんだ、気色悪い声出して」

直樹もそちらに向く。そして、その顔を見た瞬間、険しい顔つきになった。

「こんにちは、葵ちゃん」

「……前川」

「他の子に聞いたら、ここにいるって聞いたんだ」

こいつは、前川隼人。中学の時から同級生で、今は隣のクラスにいる。

直樹とは対照的な性格でお喋り。身長も高いし、顔もカッコいいから女子からの人気も高い。

一言でいえば、容姿から性格まで直樹の真逆。同じなのは変態というだけ。まあ、種類は違うが……。

悪い奴ではないと思うけど。正直言って、僕はこいつが苦手だ……。

「どうしたの、そんな顔して？」

そう言いながら前川は僕の隣に腰掛けた。

「誰が座っていいと言った」

直樹が前川に冷たく言い放つ。

「僕がどこかに座るのに、君の許可が必要かな？ね、葵ちゃん？」

前川は余裕の表情で答える。直樹は険しい顔つきのままだ。

この二人はあまり仲が良くない。というより、直樹が一方的に避けているだけで、前川の方は全然気にしていないらしい。どうすれば直樹と仲良くなれるかを僕に聞きに来ることだってある。

確か、直樹が前川を避けるようになったのは中学の時からだ。僕の知らないところで何かあったらしい。

「直樹、やめとけ・・・」

一触即発の空気に僕が割り込む。

「葵・・・」

「さすが葵ちゃん。わかってるね」

そう言いながら前川は僕の腰に手を回し、抱き寄せるようにする。

これだ。僕が前川のことを苦手とする理由は・・・。

前川はやたらボディタッチが激しい。それは僕が男の時からのこと。肩を組んだり僕の腰に手を回したり、ということは日常茶飯事だった。僕が狙われているという変な噂も一時流れたくらいだ。さらに本人はバイセクシャルを公言しているから余計に怖い。

バイセクシャルなのは本人の自由だからどっちでもいいが、僕は男だからあまりべたべた触られていい気はしない。

と言っても僕は今、体が女だから、他人の目には変には映らないのか・・・。

いや、それでも僕は嫌だ！心は男！！

「前川、頼むからべたべた触るのやめてくれ」

「どうして、僕と葵ちゃんの仲だろ？」

「俺たちはいつからそんな仲になったんだ？」

「それに、葵ちゃん『俺』だなんて、ますます可愛いね」

——ゾワッ——！！

今、なんか変なものが背筋を通った……。

しかも、また事情を知らないやつにやってしまった。直樹も京子も呆れた顔をしている。当のこいつは全く気にしていないようだが……。

なんとかして、こいつを僕から引き離すことはできないだろうか……。

——そうか！その手があったか！！

僕の腰に回されている、前川の手を僕はそっと退かす。

「前川、昨日の話知っているか？」

「昨日……？ああ葵ちゃんが電柱に頭をぶつけて、変なこと言い出したって話でしょ？」

「そう、それだ。実は頭を打ったっていうのは嘘なんだ」

前川は不思議そうな顔をする。直樹が止めようとしたが、気にせず僕は続ける。

「で、その変な話は。俺が朝起きたら女になつてた、って騒いでいたことだと思っただけ。それ、実は本当の体験なんだ」

前川はきょとんとしている。直樹に至っては口を出しても遅いと思っただのか、完全に諦めた表情をしていた。

「お前、言ったよな？俺と京子以外にそれを話したら、頭のおかしい奴だと思われるって……」

直樹は小声で僕に言った。だが、それこそが僕の狙いだ。いくら前川でも、頭のおかしい奴はゴメンだろう。

僕は勝利を確信して、口角を上げた。

だが、僕は前川という男を甘く見ていた。

「何それ、何のネタ!？」

前川、大爆笑!？

——デジャヴだよ……。

「でも、可愛いね葵ちゃん。そんな嘘もつけるんだ？」

しかも、逆効果!!

「嘘じゃない!」

「ところで葵ちゃん。今日は面白い話を持ってきたんだけど」

こいつも人の話を無視するのか……。

「なんだ。話してみる……」

僕は半分諦め気味に聞いてみた。

〈三日後〉

「何で俺達まで来なけりやならなかったんだ？」

「だから、悪かったって言ってるだろう。俺一人だと前川に何されるかわからないし……」

直樹は明らかに不機嫌だ。隣の京子は眠そうに眼を擦っている。

「それに、直樹は自分で付いて行くって言っただろ」
「あいつが何考えているのかわからないからな」

「夜の学校を探検しない？」
「はっ？」

あまりにも予想外の言葉に僕たちはぽかんとする。

「学校・・・探検？」

「そう、俗に言う肝試しってやつ」

肝試しと聞き僕と京子の顔が引きつる。

「肝試しって夏にやるものだろう？」

「まあ、まあ、そう言わずに。あと一か月もすれば夏だよ？」

「どんな理屈だ・・・」

直樹が呆れたように言った。

「悪い、前川。せつかくの誘いだけど、俺はやめとく」

僕はさも申し訳なさそうに言った。もちろん、申し訳なさそうなのは演技だ。本当は肝試しに行きたくないだけ・・・。

肝試しだと？そんなもの僕ができるか！

「まさかとは思っけど葵ちゃん、怖いのかい？」
その言葉に力チンとくる。

「誰が怖いと言った。誰が！」

「じゃあ、来てくれるよね？」

「ああ、肝試しでもなんでも行つてやるよ！」

「よかった。じゃあ三日後の深夜0時に正門前で・・・」

そう言つと、前川は楽しそうに鼻歌交じりで教室に戻つて行つた。

「お前があんな安い挑発に乗るから・・・」

「うるさいな。悪かつたつて言つてるだろう」

挑発に乗り、ここまで来たのはいいとして。この後どうしよう・・・。

正直言つて、僕はホラー系が大嫌いだ。ホラー映画は見たくもないし、肝試しなんて以ての外。

今さらながら、あんな挑発に乗つたことを後悔する僕だつた・・・。

第十四話 安い挑発の裏には何かある！（後書き）

新キャラ、前川隼人登場！
まえかわ はやと

この作品にもう一人変態が増えちゃいました・・・。
それにしても人物描写が下手な私・・・。
何とかしないと・・・。

誤解を避けるために書いておきますが、バイセクシャル＝変態、と言いたいわけではありません。
すみません。うまく伝えられなくて。

そして、今気が付きましたが、二章に入ってサブタイトルの傾向が変わってきてますね（笑）

隼人「葵ちゃん、それにみんなも、どうして僕だけ苗字で呼ぶの？」

葵「どうしてって言われても・・・なあ、直樹」

直樹「そうだな、京子」

京子「確かにそうね、葵」

隼人「お前ら、それ絶対わざとだろ！！」

感想、評価、ダメだし等々、お待ちしています！

第十五話 ほら、やっぱりそうだった・・・ side A（前書き）

今回の話は作者が暴走してしまったため、少々過激な表現が含まれています・・・。

なんと、今日で私がこの作品を投稿し始めてちょうど二週間目になります！

ここまで続いているのも、読んでくれる方がいるからです！感謝です！！

現在、深夜0時30分の定時投稿となっています。
都合により投稿できない日は当日、活動報告に記事を書くようになります！

これからも『願い事』をよろしくお願いします！！

第十五話 ほら、やっぱりそうだった・・・。

side A

「葵ちゃん、こっち、こっち」

暗くてよく見えないが、声からして前川だろう。正門の上に腰掛け手招きしている。

「ん？直樹君に京子ちゃん。こんばんは」

以前から思っではいたが、こいつはなんて呑気なやつなんだ。まさか、この二人が付いてくることまで予想済みだったとか・・・。

「こんばんは、前川君」

「・・・」

京子はまだ眠そうに眼を擦りながら挨拶を返す。直樹に至っては完全に無視だ。

「さあ、さっそく始めようか。と言っても、四人だと、あんまり怖くないでしょ。特に、直樹君みたいに見るからにケン力強そうなのがいたら」

直樹を見て笑いながら言う前川。直樹の目も前川をじつと捉えていた。

まあ確かに、こいつがいたらお化け屋敷も、夜の墓場もあまり怖くないかもしれない。直樹が驚いたところあまり見たことはないが、普段ボーカルフエイスのこいつがお化けや幽霊程度で驚くのは考えにくかった。

「グーとパーで二組に分かれようか・・・」

四人ともが手を出す。

「グッパー、——」

で、なんでこうなるんだ……。

「葵ちゃん、どうしたの。怖い？」

「全然怖くはない！」

僕は見栄を張って答えた。もちろん、前川に……。

分かれた結果は、パーが僕と前川。グーが直樹と京子。しかも一発で決まってしまった。

どうして僕はこんなに運がないんだろう……。

「どうしたの、そんなに浮かない顔して？」

「お前と二人で夜の学校を歩いてるからだよ……。」

「うわっ！ ストレートに言うね。流石に僕も傷つくよ。そりゃあ、直樹君の方が頼りになるっていうのはわかるけど……。」

うん、確かにそれもあつた。

前川はなんとというか、少しフニヤフニヤしたところもあるから、頼りなさげに見える。普段はあんな直樹が頼れる存在に見えるくらいに……。

だが、それよりも心配なのは何か出てこないか、ということ。それと、こいつに何かされないか、ということだ。

それもあつて、僕は前川の数歩後ろを付いて行っている。

「そんなに離れないで、こっちにおいでよ。怖かったら、手を握ってあげてもいいよ？」

「いい、遠慮しとく……。」

と言いつつ、なんか申し訳ない気もするので、隣について歩くことにした。

肝試しのコースは至って簡単だった。ただ、校内を隅々まで回ってくるだけ。ただそれだけ。

スタート地点は学校の正面玄関からで、お互いのグループは反対方向に進む。途中一度だけ出会うと思う、と前川は言っていた。

ゴールはスタート地点と同じ場所。

コースは簡単だ。だが、それだけに何か仕掛けがあるのではないかと不安になる。

「どうせ、お前の友達がどこかに隠れているんだろ？」

僕はできる限り感情を込めずに聞いてみた。

「ううん、いないよ。誰にも頼んでいない。それに僕には、そんなことを頼める友人いないし・・・」

寂しそうに言う前川。どうやら聞いてはいけないことを聞いてしまったようだ。何かフォローを入れようと思ったが、何も言葉が出てこない。

「葵ちゃんただけだよ。僕にまともに接してくれるのは・・・」

いや、僕たちもそこまでお前と親しいわけではないけどね。直樹とか特に・・・。

これはもちろん言わないでおいた。

「でも、ほら。お前、女子に人気あるだろう？」

「あの子たちはダメだ。僕の外面しか見てくれない・・・」

「そう、なのか・・・」

こいつには、こいつの事情というものがあるらしい。なんだか前川がかわいそうに思えてきた。これからは、もっと普通に接してやった方がいいのかもしれない。

もちろん、お触りがなくなればだが・・・。

「ごめんね。なんか、しんみりさせてしまっただけ」

「いや、別にいいよ」

「そうそう、僕の友達はいないけど、一応この中に他の人はいるよ。もちろん、直樹君と京子ちゃん以外にね・・・」

「えっ、何それ。俺はそんな話、聞いてないぞ！」

僕たち四人以外、となると幽霊・・・？

まさか、いじめを苦に自殺した生徒の幽霊が――！？

「警備員のおじさんがいるんだ」

「警備員かいっ！」

「見つかったら、不法侵入辺りで即、警察行きだろうね。そのあと停学にされたり……いやー、スリル満点だと思わない？」

はしゃぐ前川を見て、気が抜ける僕。

「まさか、肝試してそういう……」

なるほど、こんなくらい校舎なのになぜ懐中電灯一本も持っていないのかと思えば、そういうことだったのか……。

どうやら幽霊やらお化けやらの心配はどうやら杞憂に終わりそうだ……。

「なあ、前川」

「どうしたの？」

「三日前、お前に言っただよな。女になってしまった、ってこと」

「うん、聞いたよ」

前川は楽しそうにニコニコしている。隣でこんな顔をされたら、怖がりな僕でさえ真っ暗な校舎に何の恐怖心も抱かなくなっていた。正直、今一番怖いのは警備員に見つかることだ。ただでさえ、黙って家から抜け出しているのに、その上停学になった日には、僕の命がなくなってしまう。

「お前、あの話信じてる？」

「もちろん信じるよ。葵ちゃんは僕のお姫様なんだから」

「三日前は嘘とか言ってたくせに。というか、どこまで本気なんだか……」

急に前川の足が止まった。ちょうどそこは音楽室の前。

「ねえ、葵ちゃん。確か、ピアノ弾けたよね？」

不意に前川が口を開いた。

今はもう辞めているが、確かに昔ピアノを習っていた。

・・・なぜ、前川がそれを！

「弾けるけど。まさか、今から弾けと・・・？」

「その通り！」

前川が指を鳴らす。

「お前な。警備員が来たらどうするんだよ？」

「大丈夫。少しだけだから」

少しだけって、弾くのは僕だろう。

ため息をつきながら、僕は前川に続き音楽室に入った。

ピアノの椅子に腰かけ、指を鍵盤に当てる。久しぶりにピアノに触り少し緊張していた。

「何がいい？」

「じゃあ、月が綺麗だから『月光』で・・・」

僕は一度深呼吸して、ピアノを弾き始めた。

ちらっと、窓の外を見ると、そこには前川の言うように綺麗な満月が上っていた。

「きゃーーーーー！！！」

僕がピアノを弾き始めて、少し経ったとき誰かの悲鳴が聞こえた。誰の声かは、すぐにわかった。京子だ・・・！

「京子ちゃんの声だね」

ピアノを聞きながらくつろいでいた前川が立ち上がる。
僕たちは顔を見合わせた。

「京子！」

音楽室から飛び出て、声のした方向を探す。だが、明かり一つないせいで何も見えやしない。

「どうする？」

前川が僕に聞く。

「どうするって、探すしかないだろ！」

「葵ちゃん！」

僕は前川の静止を振り切り、声の聞こえた方へ走っていく。

「誰だ！そこにいるのは！」

——えっ！？

後ろから突然、声をかけられ驚く。振り返るとだいぶ遠くではあるが、懐中電灯を持った誰かが立っていた。

——ヤバイ！！

直感的にわかった。前川の言っていた警備員だ。こんな時に出くわすとは、今日はつくづく運がないらしい。

とっさに近くの教室に逃げ込もうと思ったが、生憎鍵が閉まっていて、ドアが開かない。

とにかく僕は走った。警備員も走って追いかけてくる。少しずつではあるが、それでも徐々に近づいてきている。

「葵ちゃん！」

前川だ。真正面にいる。

「お前、どこにいたんだ！」

「それは後。とりあえず入って！」

前川に促されるまま、僕は廊下に置いてある掃除用具入れに飛び込んだ。前川も僕の後に入ってきた。

「狭い……」

掃除用具入れの中は意外と狭い、僕は壁向きに、前川は僕の後ろに同じ向きで入っていた。

前にギリギリまで詰めているせいで胸が押さえられて、息が苦しい。

「僕がもう少し後ろに詰めるから、楽にしていよいよ……」

「悪い、前川……」

僕は前川の言葉に甘え、彼の胸にもたれた。

「もう行ったかな？」

「まだみたいだ。足音が聞こえる……」

確かに、まだ足音が聞こえる。しかも今は走ってはいないらしく、ゆっくりと歩いているようだ。

「葵ちゃん、いい香りがする……」

前川が僕の頭に鼻をくつつけた。

「前川——？」

「普段もそうだけど、これだけ近くにしていると余計にわかるよ……」

不意にそんなことを言われて、顔が熱くなる。

なんか、こいつには本当に女の子として扱われている気がする。可愛いって言われて、悪い気もしなくなった。

女の子になつてからも直樹の態度はほとんど変わらない。少しだけ、ほんの少しだけ親切にはなったが、他のことに關しては男の時と変わらない。

体は一応、女なんだから、せめてそこだけでも氣を使つてくれてもいいんじゃないかな・・・。

あいつが僕に可愛いと言つたのは一度だけ、女の子になつたその日の朝だけ。それから「可愛い」の「か」の字も言われていない。むしろ、あいつは僕と話すのを避けようとしている氣もする・・・。

僕はため息をついた。

もう既に一回言つたんだから、また言つてくれてもいいのではないか・・・。

「ひゃう——！？」

突然、耳に違和感を感じ、変な声が出る。

「ま、前川？」

「ダメだよ、声を出したら・・・」

また耳にそつと息をかけられる。すごく、くすぐつたい・・・。

「誰のことを考えていたの？もしかして、直樹君？」

言い当てられた恥ずかしさで、顔がさらに赤くなる。

前川の両手が僕の腰を抱き、今までもくつついていた体が、さらに密着する。

前川の指先が僕の体を弄る。

「可愛いね。葵ちゃん・・・」

寒気がした。

うつん、前川の体自体が冷たい。

僕は力を入れて腰を抱いている手を引きはがそうとする。

だが、ここは掃除用具入れ。狭いせいで行動が制限されてしまい、思うように力が入らない。

「暴れないで」

前川が僕の右耳を軽く噛んだ。

「やあっ——！」

堪えきれずに口を開いた瞬間、前川の指が僕の口に入れられた。

「声出しちゃダメって言ったでしょう？」

口に入れられた指が舌を刺激するように動き回る。

「僕は見つかったても、困る人なんていないから別にかまわないけど、君は、いるよね……？」

前川のもう片方の手が服の中に入れられ、胸を触り、背中や太ももを弄る。足を閉じようとしたが、その前に前川が股に膝を入れ、それもできなくなった。

「んっ……ふぁ……ああ……！！！」

徐々に、前川の両手が下がる。片手でスカート持ち上げ、もう片方は……。

今、自分が何をされようとしているかは、簡単に想像がついた。

だが、もう既に僕の体は自分の意志では動かせなくなっていた。

涙が出てきた……。

僕はなんで泣いてるの？

怖いの？

怖い、怖いよ！誰か、助けて！

直樹、直樹、直樹、——を助けて——！！

——ガチャッ！

誰？

掃除用具入れの扉が誰かに開けられた。

体の力が完全に抜け切っていた僕は、目だけを動かして、そちらを見る。

「やあ、直樹君・・・」

突然、扉を開けられたにもかかわらず、前川は落ち着いている。

直樹と目が合った。その瞬間、直樹の目が見開かれる。

「葵——！？」

涙と涎で汚れた顔をそっちへ向ける。

直樹、来てくれたんだ・・・。

直樹は前川を睨んだ。いつものポーカーフェイスとは違う。怒っている、ということが一目見てすぐにわかるくらい彼の顔は怒っていた。

直樹のこんな顔は見たことがなかった。

直樹は僕の腕を引っ張り、僕を抱き寄せた。

「前川っ．．．!!」

直樹の目が怖い．．．。

僕は何とか自分の手を動かし、直樹の服の袖を引っ張った。

そんな顔をしないで。直樹は来てくれたんだから．．．。

僕の意志を察したのか、直樹は僕を抱きかかえ、前川に背を向け歩き出した。

いつの間にか、表情もいつもの直樹に戻っている。

「葵ちゃん．．．」

前川の声。

僕はちらつと、そっちを見る。

「バイバイ．．．」

前川は手を振りながら言った。

なぜか僕には前川の顔が泣きそうな子供の様に見えた．．．．。

「……………」
「……………」

帰り道、体の状態が回復した僕は、直樹に下ろしてもらい自分で歩いていた。

直樹を見る。いつもの様に、まっすぐ前を見ていた。
僕の視線に気づいた直樹が、僕を見る。

「悪かった……………」
「何が……………」

直樹は黙ってしまった。

沈黙…………。

「怖かったか……………」
「バカ言っな！誰が……………」
「ゴメン……………」

ふわりと、直樹が僕を抱き寄せた。僕は直樹の胸に顔を埋める。
直樹の体温が僕に伝わる…………。

温かい…………。

堰を切ったように涙があふれる。

「本当にゴメン……………」
直樹はもう一度言った。
「怖かった。怖かったよ……………」

涙が枯れるまで、直樹の胸で泣いた…………。

第十五話 ほら、やっぱりそうだった・・・。

side A（後書き）

こんにちは、コウです！

暴走しすぎました（反省中）・・・。

ごめんね、葵・・・。

いつもの和やかな（？）空気とは違い、大波乱の十五話、楽しんで（？）いただけたでしょうか？

いえ、きっとドン引きした人もいるはず・・・。

この作品の憎まれ役を一人、買って出てくれた前川・・・。

そんなに悪いやつではないんですよ・・・悪いのは今回だけ（たぶん）。

前川にもいろいろあるので、できれば嫌いにならないでやってください。

また、いろいろな所で登場する予定です。

感想、評価、ダメだし等々、お待ちしてます！

第十六話 ほら、やっぱりそうだった・・・。 side N (前書き)

第十六話の『side N』です！

物語は四人が二組に分かれ、肝試しをスタートした所から始まりま
す・・・。

第十六話 ほら、やっぱりそうだった・・・。

side N

「ねえ、直樹君？」

隣を歩いている京子が話しかける。俺は京子の方を向いたが、明かりが何も無いせいで京子の表情は見えない。

「どうした？」

「葵、前川君と二人で大丈夫かな？」

「大丈夫だろ。ここで手を出したら前川は本物の下衆だ・・・」
そうは言ったが、今一番気にかけていることではあった。

もともと、俺が葵について来たのは、前川がおかしな真似をしな
いか見張るつもりだったからだ。

「何で、懐中電灯の一本もないんだろうね？」

「その方が怖いからじゃないか？」

真っ暗な校舎を歩く二人。廊下には俺たちの足音だけが響く。

正直な話、ただ暗いだけで全く怖くない。

それ以前になぜ、俺がこんな茶番に付き合わなければならない。

安い挑発に乗った葵の愚痴を言っていると、京子が服の袖を引っ張った。

「直樹君、そんなに急がなくても・・・」
袖をつかむ手が震えている。

なるほど、女子はこういう物が苦手なのか。すると、前川は葵と
のこれを狙って・・・。

まあ、葵は中身が男だから大丈夫だろう・・・。

言い聞かせるようにしたものの、俺は不安を拭いきれなかった。
・・・。

「直樹君は、葵のことどう思っているの？」

不意に京子が口を開く。表情はわからないが、真剣に聞いているのは声でわかった。

俺は一瞬答えに詰まった。

「どうって？」

とっさに、とぼけてみる。

「葵のことを女の子として見ているかどうか」

女として見ているか・・・。

「ただの幼馴染。それに、あいつは男だ・・・」

「本当にそう思っている？」

「ああ・・・」

そう、あいつはただの幼馴染。
つい最近まで、男だった親友。

他に何かあるというんだ？

他に何が必要だというんだ？

「でもね、直樹君。葵は直樹君のことを意識し始めているよ。きっと・・・」

一瞬心臓が跳ね上がった。思いもよらないことを言われ混乱する。

あいつが、俺を・・・？

そんな馬鹿な・・・。

あいつは男だ。あいつ自身が言っている。

男だったあいつを俺も知っている。

そんなことありえない・・・。

「何を理由に・・・」

苦し紛れに俺はそう返した。

「んゝ、女の勘、かな・・・」

京子は笑いながら言った。

「残り半分くらいか・・・」

「そうね。そろそろ葵たちにも合う頃かも」

相変わらず京子は俺の服の袖をつかんだままだ。

暗いということが、それほど怖い物なのか。

残念だが、俺にはその感覚が分からない。

このままずっとまっすぐに進めば音楽室があるはずだ。
音楽室。そういえば、よく学校の怪談や七不思議で話のネタにさ

れる場所ではある。

「ねえ。もし、葵が直樹君のことを好きになったら、直樹君はどうする？」

「ありえないな」

俺はすぐに答えを返した。

「ううん。もしもの話だから。考えて・・・」

「男のあいつが・・・」

「葵と直樹君が体験した話が本当だとして。葵は今、女の子だよ」

あいつはもともと男。でも今は女。

つまり、何もおかしくはない。ということなのか？

そうだとしても、男に戻りたがっているあいつが、そんなことを思っはすなどない。

駄目だ。混乱してきた。自分が何を考えているのかさえ分からなくなってきた。

ふと、思い出したのは、あの朝の光景。

寝ていた俺を起こす葵。

いや、起こされた時にはそれが誰だか分らなかった。
長い髪をした少女が俺を覗き込んでいる。

一目惚れというものが実際に存在するとは思っていなかった。

俺は目の前にいる少女に一目惚れしたのだ。

「誰だ、お前？」

そう聞いた俺に、少女は呆れた顔をする。

「何、寝ぼけたこと言っているんだ？ 葵だよ！」

目の前にいた少女は葵の名を語る。

容姿も声も違う彼女。

それまでの話の内容が合うことから彼女が葵だとわかったのだが、それまでにかなりの時間を要した。

後から聞いた話だが、葵はその時点では自分が女になっているということには全く気付いていなかったらしい。

なんて鈍感な、というかアホなやつなんだろう。

そして、葵が女になってしまった。ということがわかった瞬間、俺の想いは急速に消え去った。

女になった最初の日に比べ、あいつはなぜか言動が女らしくなってきた。俺と京子以外の人には女として接しているからかもしれない。

ただ、そんな葵を見ると思い出してしまうのだ。
そして、思ってしまう。女のままでもいいのではないかと……。

葵は男に戻りたいと思っているのにもかかわらず……。

だから最近、学校では他の生徒が周りにいるときは、葵を避けるようになっていた。

女らしい葵を見ないために。俺や京子の前のあいつこそが本来の葵だ。

男に戻る、それが葵の望み。
なら、友人である俺はあいつを助けてやるのが当たり前。

ああ、俺はいつたいていどうしてしまったんだ……。早く、こんなことは忘れなければ……。

「直樹君……」

「どうした？」

京子に声をかけられ、自分が深い思考に入っていたことに気が付く。

「なにか聞こえない？」

「……ピアノの音だな」

この曲は、『月光』？

『月光』と言えば葵の得意な曲だったはず。もしかすると、あの二人は今、音楽室にいるのか。

「どうしてこんな時間に、ピアノが……！」

よほど恐ろしいのか、京子は縮みあがっている。

「幽霊が弾いてるんじゃないか？」

俺は京子に言った。もちろん冗談で……。だが、京子には冗談に聞こえなかったらしい。

「きゃーーーーー！！！」

しまっ……。

「おい、京子！」

京子は俺の袖を放しどこかへ走り去ってしまった。仕方なく、後を追おうとした時だった。

「誰だ！」

後ろから声をかけられる。振り返ると懐中電灯を持った誰かが近づいてきていた。

声からして、葵や前川でないことはすぐにわかった。

おいおい、俺たち以外に人がいるなんて、聞いてないぞ。

俺は毒づきながら、その誰かを撒くために全力で走った。

追いかけてくる誰かを完全に撒くことができた俺は、京子を探すために逸れた場所まで戻った。

一応、音楽室の中を覗いてはみたが、もうそこには誰もいなかった。

とりあえず、京子が走り去っていた方に歩いて行く。

どこかに隠れているのだろうか？

足音どころか物音一つしない。

念のため通り過ぎていく教室の扉に手をかけてみるが、どこも鍵がかかっている。

まさかとは思うが、あの中に隠れていたりしないよな・・・。

俺の視線の先にあるのは掃除用具入れ。もちろん人が入るためのものではないが、入ろうと思えば二人ぐらい入れるスペースはある。じっと見てみると、掃除用具入れが少し揺れたように見えた。

どうやら、まさか、が当たったらしい。

まだ、大分離れてはいるが、場所が分かったのだ。急ぐ必要はないだろう。

どう開けよう？

脅かすのも面白いかもれない、と思ったがまた逃げられると大変なのでやめようと思う。

仕方ない普通に開けるか・・・。

そんなことを考えているうちに、掃除用具入れのすぐそばまで近づいた。

・・・？

なにか聞こえる。

かなり小さい声だが、うめき声というか、泣き声のようなものが聞こえてきた・・・。

この中から——？

——ガチャッ！

「やあ、直樹君・・・」

中にいたのは、京子ではなく前川。

その顔はいつも通りの余裕を含んだ表情。

そして——

「葵——！？」

涙と涎で汚れた顔が俺の方へ向けられる。

その光景を見た俺は、自分の目を疑った。

そして、前川が葵に何をしようとしていたのかも分かった。

何かが頭の中で弾けた。

それがなんなのか俺にはわからない。

いや、知る必要がない。

俺は葵の腕を引っ張り、葵を抱き寄せた。

「前川っ・・・！！」

前川を睨みつける。

自分が怒っているということは簡単にわかった。

無意識に拳に力が入る。

その時、葵が俺の服の袖を引っ張った。

葵と目が合う。

どうして。どうして、お前がそんな顔をする。

許せと言っのか・・・こいつを？

お前に・・・俺の、親友にこんなことをしたこいつを許せと言っのか・・・。

葵の顔を見ていると、怒りが勝手に収まってきた。

葵を抱えて、その場から離れようとする。

「葵ちゃん・・・」

前川の声。

俺は気にせず歩き続けた。

「バイバイ・・・」

ああ、何と呑気なことを・・・！

一旦引いていた怒りが、また沸き起こってきた。

この場に葵がいなければ俺は、こいつをどうしていただろう・・・。

いや、恐らく何もせずに帰っただろう。

それは、真後ろにいるはずの前川の声が、途方もないほど遠くから聞こえたせいかもしれない。

「
．．．．．」
「
．．．．．」

学校から出て少し歩いた所で、急に「自分で歩く」と言った葵は俺の隣を歩いていった。

視線を感じる。

隣を見ると葵が俺を見ていた。

「悪かった．．．．．」

俺は口を開く。

「何が．．．？」

すぐに反応を返してきた葵に俺は何も言えない。

怖い思いをさせてしまつてゴメン。

たったそれだけのことが言えない。

沈黙．．．。

「怖かったか．．．？」

「バカ言っな！誰が．．．．．」

「ゴメン．．．」

俺は葵を抱き寄せた。葵が俺の胸に顔を埋める。

葵の頭に手を置く。

堰を切ったように涙を流す葵。

「本当にゴメン・・・」

俺はもう一度言った。

「怖かった。怖かったよ・・・!!」

葵の泣き声が胸に刺さる。

なぜ、あの時もつと早くあの場に行かなかった。

なぜ、こいつをこんな目にあわせてしまった。

なぜ、俺はこいつに何もしてやれない。

自分の無力さに臍を噛む俺だった・・・。

第十六話 ほら、やっぱりそうだった・・・。

side N（後書き）

第十五話の『side N』です。

正直、投稿しようかどうか迷いましたが

あの時の直樹を書きたかったのでつい・・・。

楽しんでいただければ、これ幸い。

感想、評価、ダメだし等々、お待ちしてます！

第十七話 一方、その頃……。 前編（前書き）

今回は第十五話から続く、『ほら、やっぱりそうだった……。』の『side K』のような物語です。

肝試しの途中、一人逃げ出しみんなに置き去りにされてしまった京子の爆笑（？）ストーリー……。？
今回は思わぬ人物が登場？

内容はかなりパロディ的な部分があり、
キャラ（主に京子）に対するイメージが著しく変化する可能性があります。
苦手な方は注意してください……。 （笑）

第十七話 一方、その頃……。 前編

「直樹君、直樹君！」

真つ暗な学校の中を一人歩く私。

「葵！前川君！」

一緒に学校に入っただけの友人の名を叫ぶ。

返事はない……。

「どうしよう……」

というより、私はなぜ今一人なのだろう……。

直樹君と一緒にいたはずなのに。

音楽室からピアノの音が聞こえてきて、直樹君が幽霊の仕業だつて言うから怖くなって逃げたのに。

直樹君も追いかけてきたはずなのに……。

「なんで、一人なの……!?」

私の声は虚しく木霊した……。

どうしよう。もう一人で帰ってしまおうか……。

ダメだ。そんなことしてしまうと直樹君や葵が（あと前川君も）

幽霊に捕まってしまうかもしれない！

怖いけど、皆を探さないと！

そうだ！私が皆を助けるんだ……！

十分後

うえええん、怖いよお！

真っ暗で何も見えない！

しかも誰もいない！

張り切って皆を探し始めた私だったけど、いくら探しても誰もいない……。

え、これって……。もしかして、学校の中にいるのって私だけ……？

みんな先に帰ってしまったの？

そんなの嘘だ！？

あと五分、それだけ探していなかったら私は泣きながら帰る！

私は自分を奮い立たせ、皆を探し始める。

そういえば結局、直樹君はちゃんとした答えを言ってくれなかった。何かをためらっているような顔ではぐらかしていた。

やっぱり直樹君は葵のことが好きなのだろうか……。葵が本当に直樹君を好きになってしまったら……。

胸が痛くなる・・・。

締め付けられるような感覚。

とんでもないほどに、痛い・・・。

突然、目の前に光る何かが現れた。

その光は徐々に人の形になっていき――！

私は近くにあった、掃除用工具箱の中から箒を取り出し、その光に向かってフルスイングした。

「うごあつ――！？」

光る何かは変な声を出して倒れる。

そして、ついに光が集束し謎の人が現れた。

謎の人は頭を押さえたまま、よろよろと立ちあがり、私に詰め寄る。

「なんで、なんで今殴ったの？変身シーン（？）だよ？どんな怪獣だつてヒーローの変身は待つんだよ？なのになんだ貴様は！鬼か！？」

「乙女が感傷に浸っているときにあんな登場の仕方する奴がいるか

！」

「うつ――！」

一瞬、謎の人がひるむ。

その隙にもう一発顔面にフルスイング！

「みぎゃあつ！」

また変な声を出しながら倒れる謎の人。

もう一発殴つといたほうがいいかな・・・？

あれ？

なんかさつきから私の中にドス黒い感情が・・・・。
気のせいか言葉遣いも乱暴に・・・・。

私が考えていると、謎の人が立ち上がる。

とりあえず、私は箒を構えた。

「ちよつ、待った待った！もう殴らないで！」
明らかに謎の人はおびえている。

「あなた、誰・・・？」

私は距離を取りながら聞いた。

「（この作品における）神だ！」

・・・・。

やっぱりもう一発いつところか・・・。

「ちよ、待つて、本当にやめて！お願いだから、その箒下ろしてえ
！」

自称神は顔を手で庇いながら遠ざかる。

さつきから、いったい何のつもりだろう・・・・。

「じゃあ、もう一回聞いわね。あなたは誰？」

「コウと申します・・・・。」

自称神は半泣きで名乗った。

第十七話 一方、その頃……。 前編（後書き）

遅くなつてすみません！

一話で終わらせるつもりが長くなつてしまったので二話に分けて投稿しようと思います。

二話目はまだ書き上げてないので明日かな？

因みに、これから数日間の予定を活動報告にて発表します。

正確には、いつ投稿できないかを記しているので、一度覗いてみてください！

つて、この話、私が出てませんかっ！？

しかも京子にいじめられてるっ！

なんか、明日香姉さんにもいじめられてるのに……。

因みに、私はMじゃありませんよ（泣）

感想、評価、ダメだし等々、お待ちしております！

第十八話 一方、その頃……。 後編

自称神、コウは箒を構えた私の目の前で正座して震えている。

他人から見れば、まるで私が正座させているように見えるだろうが、私はそんなこと一切要求していない。コウが勝手にやっていることだ。

しかも、おびえきった顔で私の顔を見ているが、私ではなく、私を通して別の誰かを見ているようだった。

震え方から、その誰かに強烈なトラウマを植え付けられたのが簡単にわかる。

「で、コウ？」

「はいい！」

なんでそんなに怖がるかなあ？

ただ、箒を構えているだけなのに。ウフフフフ……。。

……。はっ！？

いけない！また変な感情が……。

「あなた、自分のことを神って言ったよね？」

「はい、（この作品における）自称神です」

「本当に？」

「一応、本当です……」

私はコウの顔を見る。嘘をついている顔ではなかった。

「じゃあ、私の恋が成就するかどうか教えてくれない？」

「え？それ言っているの？」

「何よその言い方……！」

「わあ！？ごめんなさい、だから箒だけは……！」

大げさに顔の前で手を振るコウ。

なんかこの人、腹が立つ……。

「じゃあ、直樹君が私のことを好きになるようにしてくれない？」

「パス・・・！」

「あなた、やっぱりもう一発・・・！！！」

「待て待て！言葉が足りなかった！」

それを聞き、私は振り上げていた箒を下ろす。

「どういう意味・・・？」

「残念だが、そんな能力は持ってません・・・」

こいつに期待した私がバカだった、ということだろうか。

なぜか破壊衝動に駆られる・・・。

「まあ、仕方ないか・・・。そんなことしても意味ないし・・・」

うんうん、とうなずくコウ。

「自分で振り向いてもらえるようにならないと・・・」

「そうそう、そのとおり！」

「なんか、あなたに言われると、すぐく腹が立つのは気のせいかしら？」

「？」

「ごめんなさい。もう言いません」

土下座するコウを横目に、私は掃除用具入れに箒をしまった。

それを見たコウは嬉々として立ち上がる。

「誰が立っていいと言った？」

「はい、すみません・・・」

ちよつと直樹君風に言ってみました・・・。テヘッ！

「何が『テヘッ！』だ。ブラック京子め・・・」

「なんか言った？」

「いいえ、言つてません」

「それより、口に出していないのになんでわかったの？」

「心を読んだ（神なので）」

「へー、そういう人の役に立たない能力はあるんだ・・・？」

「そんなにストレートに言わなくても・・・」

本気でしょげるコウ。

いじめているみたいで、ちょっと楽しいかも・・・。

次はどうやってコウをからかおうかと考えている時だった。

「でもさ。それって、大切なことだと思うよ?」

「え?」

「直樹のこと好きなんでしょう?」

「それは・・・」

コウに言われて、顔が熱くなる。

「だったら、自分で何とか頑張ってみたら?」

「それができれば苦労はしないよ・・・」

「大丈夫。あの時だって聞けただろう?」

この人、余計なことばかり知りすぎ・・・。

あの時・・・。

直樹君に、葵のことをどう思っているか聞いた時の事だろう・・・。

確かにあれを聞くには勇気がいった。

もし、自分の望まない答えが直樹君の口から出ると思うと、どうしようもないほど怖かった。

でも、私は聞いた。それに意味があると、言いたいのだろうか・・・。

「自信持った方がいいよ。可愛いんだし」

コウが微笑みながら言う。

「・・・まともな恋愛経験ないくせに」

私は顔を赤らめながら返した。

「うぐっ——！京子も余計なこと知っているじゃないか！？」

可愛い、か・・・。

こんな奴に言われると思わなかった・・・でも、うれしい。

「コラー、聞こえてるぞー。だれがこんな奴だ」

やっぱり、葵が直樹君のことをどう思っているように、直樹君が葵のことをどう思っているように、私が直樹君のことが好きなことに変わりはない。

私は直樹君のことを好きでいていい。

それで、いいんだよね？

私はコウの目を見た。

「そう、それでいいんだよ京子。萌えキャラなんだし、もっと萌え萌えしたところを直樹に見せつけなければいいんだって。ま、明日香さんの方が美人だけだな・・・」

せつかくのいい雰囲気をこいつは・・・。

「最後の一言はすごく余計だけど・・・でも、ありがとう」

「京子！京子！起きなさい。学校遅れるわよ」
お母さんの声・・・？

ここは、私の部屋・・・？

いつの間に帰ってきたんだろう？

婆たちと肝試しをしていて、その後・・・・・・・・。

それよりさっきの変な出来事は、夢？

それにしても、変な夢。私が私じゃないみたいだった。変な人は出てくるし……。

すでに、あの時に会話していた人物の顔も声も名前も思い出せない。

なぜか、それを少し寂しく感じる。

私はすぐに学校の支度をした。

昨日の変な出来事はたぶん夢だろう……。

それでも私に大切なことを、あの変な人は気づかせてくれた。

もう、会うことはないだろうけど

ありがとう・・・・・・・・。

第十八話 一方、その頃……。 後編（後書き）

葵 「で、どうやって京子を運んだんだ？」

コウ 「仕方ないから担いだ……。意外と重いよ、あの子」

直樹 「まさか、あのタイミングで寝るとはな……」

コウ 「うん、焦った。ありがとう、って言った後すぐに倒れて寝だしたからね……」

葵 「そういえば、コウの強烈なトラウマの原因って」

コウ 「明日香さんに決まってるだろう！！（詳しくは『願い事』第十話、十一話の後書き参照！）」

明日香 「？……コウ、呼んだ？」

コウ 「いやあ、明日香さんはいつみても綺麗だなあ、と思って」

明日香 「あら、わかっているじゃない？」

京子 「あれ、みんな集まってどうしたの？」

コウ 「おっ、京子久しぶり」

京子 「……どうしてだろう、久しぶりな感じがしない？」

感想、評価、ダメだし等々、お待ちしています！

第十九話 僕と直樹と京子と隼人

あの事件から、学校で前川と会わなくなつた。

休み時間も、弁当を食べている時も、放課後でさえも前川は姿を見せなかった。

僕の周囲を離れず警戒していた直樹は拍子抜けしていた。前川のクラスに行つて理由を聞いても、誰も何も知らず。先生にすら何の連絡もなかったらしい。

そうして、二週間が過ぎた朝・・・。

「前川、今日は学校に来てるかな？」

僕は直樹に聞いた。

「あれから二週間がたった。お前、毎朝その言葉を言ってるぞ？」

険しい顔つきで直樹は言う。

「あんなことされたのに、心配する必要があるのか？」

前川の話になると直樹の言葉に棘が出てくる。そして、毎回その棘は僕に刺さっていた。

「心配なんてる必要ない。今度、目の前に姿を見せたら、俺は、あいつを殴る」

直樹は僕を睨みながら言う。早く話を切り上げたがっているように見えた。

「お前はそんなことしないよ」

僕は直樹の目を見ながら言った。

「どうして？」

「お前も聞いてるから・・・」

「何を？」

「あの寂しそうな前川の声を・・・」

「俺はそんなもの、聞いていない」

直樹は目を逸らしながら言った。

嘘をついているのが、僕にもわかった。

「直樹、どうして嘘をつく・・・」

「嘘なんてついていない」

「嘘だ・・・」

「嘘じゃない！」

珍しく大きな声を出した直樹に僕は驚きを隠せない。

「なぜ、あいつに関わろうとする？」

僕は何も言えずに黙り込む。

「もうその話は、俺の前でしないでくれ・・・」

その場に立ち尽くした僕をその場に残し、直樹は一人歩いて行った。

「葵・・・葵」

京子が僕の顔を覗き込む。どうやら何度も僕を呼んでいたらしい。
「ん、ゴメン京子。どうした？」

「どうした？はこっちのセリフ。今朝からぼーとしちゃって。どうしたの？」

「別に、何も・・・ただ、」

「ただ？」

「直樹のやつ、前川の話をするとうるんだ……。どうしてあんな奴の心配なんかするんだ、って……」

「葵、それは……」

京子は何かを言いかけたが、口を噤んだ。

「それは？」

「直樹君は葵のことが心配なんだよ」

京子は微笑みながら言った。僕にはその微笑みが無理に作られたものに見えた。

すでに京子は、前川が僕にしようとしたことを知っている。直樹が言ったようだ。

京子はもともと前川のことを悪くは思っていなかったから、話を聞いた当初は大激怒していた。

その怒りを鎮めるのに何時間かかったことか。

あの時の前川の話や様子を聞かせると、京子もあいつの事を分かってやろうとし始めたらしい。

ただ、京子曰く「どんな理由があっても、それは最低」だそうだ。もちろん、その件に関しては僕も同意見だ。本当に怖かったし、思い出すのも嫌だ。

それでも、思い出さずにはいられない、前川の体の冷たさ……。

僕はあいつを何とかしてやりたいと思っているのかもしれない……。

学校の終わりを告げるチャイムとともに、誰かが僕たちの教室に

入ってきた。

前川だった・・・。

直樹がそれに気が付き、席を立つ。

「葵ちゃん、話があるんだ。いいかな？」

僕は軽く頷いた。

「葵・・・？」

直樹が僕を見ている。僕は大丈夫だというように手を振った。

「直樹君と京子ちゃん。僕が信用できないようだったら、どうぞ一緒に・・・」

「・・・・・・？」

そういつて、前川は教室を出ていった。

僕たち三人は前川の後について行った。

それから、学校の近くのファミリーレストランに入り。僕たちはそれぞれドリンクを注文した。

直樹と前川にコーラ、僕にカルピス、京子にジンジャーエールが運ばれ、それぞれが少しずつドリンクを飲んだ。

「前川、話って・・・？」

「そう、それなんだ・・・」

前川は一度俯き、そして僕を見た。

「葵ちゃん、本当にごめん」

深く頭を下げる前川。京子は当然のことだと、言うような顔を、直樹は疑いの目を前川に向けた。

沈黙。

「前川、頭上げる・・・」

僕はできるだけ優しく聞こえるように言った。

だが、前川は頭を上げようとしなない。

「自分がどれだけ最低なことをしたか、わかってる。言い訳しようとも思わない。許してほしいとも言わない。でも本当に、怖い思いをさせた。ごめん」

「前川・・・」

頭を下げているせいで、表情はわからなかったが、前川の体は震えている。

「頭を上げて・・・」

僕はもう一度言った。

ようやく、前川が頭を上げた。二週間見ていなかった前川の顔は疲労の色が出ていて、それとは違う理由で目が赤くなっていた。

「前川、もう俺は大丈夫。大丈夫だから・・・」

直樹が僕の方を見るのが分かった。

「お前は、十分反省した。違うか？」

前川の顔がまた伏せられた。

「直樹も京子も、いいよな？」

「葵がいいのなら。でも前川君、誓って。もう、葵が怖がるようなことをしないって」

前川は無言で何度も頷いた。

その様子を直樹は腕を組んで、じっと見ている。その表情も険しいままではあるが、さっきよりは大分和らいでいる。

「直樹は？」

「葵がいいと言っならいい」

「素直じゃない言い方だな・・・」

くすつと、僕は微笑んだ。対照的に直樹は顔を少し膨らませた。

「あの。もう一つだけ話したいことがあるんだ」

「どうした？言ってみろよ」

「これは、葵ちゃんだけに聞いてほしい。だから、悪いけど直樹君と京子ちゃんは席を外してくれないかな？」

「それはできない。お前がまた何をするかわからないからな」

直樹が言う。だが、そのころにはいつもの前川に戻っていた。

「何のためにファミレスに入ったと思う？」

余裕の表情で答える前川。確かに周りには、他の利用客がいる。

ここでなら、僕に手を出したりはしないと思ったのか、直樹は席を立て外に出た。

「外で待っているからね」

そう言って、京子も席を立った。

ついさっき直樹に余裕の表情を見せていた前川だったが、二人だけになりなぜか落ち着きがなくなっていた。

僕には緊張しているようにも見えたが、理由はまったくわからない。

「葵ちゃん・・・」

不意に前川が口を開く。

「僕と付き合ってくれないかな？」

「え？」

「あんなことがあった後にだというのは分かっている。でも、僕は君のことが好きだ・・・」

一瞬、思考がフリーズした。

徐々に思考が回復していき、前川の言った言葉が僕の頭の中を反芻する。

前川の言葉をはつきりと理解した時には、すでに顔が真っ赤になっ
ていた。

待つて・・・。

女の子に告白されたことすらないのに。

心臓はどんどん速くなり、ときどきする気持ちも自分では制御で
きない。

いや、告白されたのは嬉しい。
好きだと言われたのは嬉しい。

「ゴメン。俺はその気持ちに応えられない・・・」

長い長い沈黙の後、ようやく僕は口を開いた。

「そっか、そうだね・・・」

前川は、ハハッと寂しそうに笑う。

「俺はお前のことをそんな目では見れない」

「うん」

静かに頷く。

「でも・・・」

「でも？」

「これからも、友達として仲良くしていこうな？」

前川の表情が明るくなる。今日、初めて見る、心からの笑顔だっ
た。

「もう一つ、お願いがあるんだ」

「なんだ？」

「僕のことを、名前で呼んでほしい。隼人って・・・」

「わかったよ、隼人。けど――」

「いたっ!？」

僕は頬に向かって伸びてきた前川の手をつねった。

「――お触りは、一日三回までな？」

僕は満面の笑みで言った。

第十九話 僕と直樹と京子と隼人（後書き）

隼人「葵ちゃん」

葵「ひゃうう！？こら隼人！それ今日、四回目のお触りだろうが！！」

隼人「また固いこと言っちゃって」

葵「ふっ、ああん！？コラ、そこはっ！って、五回目！！！！／／／」

直樹「アイツら何をしてるんだ？」

京子「お触りがひどかったから、回数を制限したんだって・・・」

直樹「・・・」

京子「たぶん、その制限を破られたから、葵が追いかけてるんじゃない？」

直樹「ハア~~~~（溜息）」

感想、評価、ダメだし等々、お待ちしております！

第二十話 これが乙女というものか？（前書き）

葵・・・、たぶん言ってること間違ってるよ。それ（サブタイトル）
・・・。

第二十話　これが乙女というものか？

最近、なんだか直樹に避けられている気がする・・・。

前にも一度言ったが、やっぱり避けている。確実に・・・。

登下校と昼休み以外、直樹は僕に近づこうとしない。

それどころか、僕から近づいていくと直樹は他の男子と話を始めるのだ。

。それで僕が近づけない。変な勘違いをされては困るからだ・・・。

どうして僕を避ける必要がある。

僕たちは、ただの幼馴染で親友。

違うのか？

直樹にとつて僕は、なんでもない。

それどころか、話もしたくない、そんな存在なのだろうか。

「なあ、直樹」

「・・・？」

「何で俺を避ける？」

僕は思い切って直樹に聞いた。

直樹は少し困ったような表情を浮かべた。

その表情を見た瞬間、心臓から嫌な音が鳴った。

「俺は避けてなんかいない」

直樹は一度僕を見て、そしてそっぽを向きながらそう言った。

質問に答えるときに僕の顔を見ない、それは多くの場合、直樹が嘘を言ったときの行動だった。

「話は変わるが、お前最近変わったことはないか？」

「話を逸らすな」

僕は直樹を睨む。

「いいから、答える。変わったことはないのか」

有無を言わさぬ口調で直樹が僕に迫る。

僕はその勢いに押され、口を開いた。

「例えば？」

「例えば、男にときめくようになった、とか」

それを聞いた瞬間、直樹の脛を蹴った。地味に痛かったらしく、直樹はその場に座り込む。

「何を言うかと思えば、そんなことを・・・！」

「例えを聞いたのはお前だろう！」

「それで、なにかないのか？」

「なにかって・・・ああ、そうだ。なんか最近、可愛い物が欲しくなったり、お風呂が長くなったり・・・」

それを聞いて直樹が溜息をつく。

「なんだ、その反応は！？それより何で、そんなことを聞いた！」

「まだ、確信が持てない・・・」

「なんだよ。質問するだけしておいて、理由は話さないなんて許さないからな！」

「わかった、理由は話す。ただ、その前にもう一つ質問に答える」

直樹の真剣な表情に、僕までも真剣な表情になる。

「率直に聞く。女になってから、男にときめいたことはあるか？」

僕はもう一度、直樹の脛を蹴ろうとしたが、今回は軽々と躲されてしまった。

「ふざけやがつて。何を訳の分からないことを！」

「ふざけてなんかない」

直樹の顔は真剣そのもの。どうやら嘘ではないらしい。

「あ、あるよ・・・」

僕は仕方なく答えたが、正直恥ずかしさでいっぱいだ。

京子や、他の女友達に言うのだって恥ずかしいだろう。それをこいつに言うなんて……。

「何回？」

「回数まで聞くのか！？……一回だよ」

ああ、もう……。

穴があれば入りたい。

「……」

直樹は口を開いたまま固まっている。どうやら、驚いているらしい。

って、どうして驚く！お前が聞いたんだろう！

と言いたくなるけど我慢。

「それは、何人だ？」

「……二人。なあ、何のつもりかは知らないが、これって必要なことなのか？」

直樹は僕の言葉を無視して、ぶつぶつと呟いている。顎に手を当て、何か考え事をしているように見えた。

「……その二人は、誰だ？」

「それはっ！言えるわけないだろうっ！と言うか、この質問、絶対必要ないだろうっ！」

直樹は小さく舌打ちした。

「もういいだろう、理由を教えるよ」

「まあ、いいだろう。ある程度、確信も持てた……」
さつきから直樹が言っている『確信』とはなんだ？

僕は直樹の口から真相が明かされることを期待して、耳を傾けた。

「お前が女になってから、もう一か月が経とうとしている。お前、体は女でも心は男とか言っていたよな？俺はそれが不思議でならなかった。それで最近、お前の言動を観察していたが、どうも女っぽい言動が増えている。そして、さっきの質問で確信を持った。つまり――」

「つまり・・・？」

「お前は体だけでなく、心まで徐々に乙女化している」

・・・・・・？

「え・・・？ええええええ！？」

第二十話　これが乙女というものか？（後書き）

ついに直樹が気づいた、葵の乙女化。

葵はこの事態を受け入れるのか、それとも・・・。

次話、乞うご期待（？）

感想、評価、ダメだし等々、お待ちしております！

第二十一話 ああ、これが乙女というものか・・・。(前書き)

葵、今回は間違えてないと思うよ。

第二十一話 ああ、これが乙女というものか・・・。

直樹の言葉に僕の頭はさらに混乱させられた。

「正確には女になっていていいるのではなく――」

「待て、待て。一度整理させてくれ・・・」

混乱したままの僕を放置して、説明を続ける直樹を止めた。

乙女化？

なんだそれは？

言葉のままの意味だと、僕が身だけではなく心まで女になろうとしている。

そういうことだ。

そういうことなのか？

「話を続けてくれ・・・」

僕は直樹を促した。

「正確には女になっているのではなく、体が女になったとき、すでに頭も女になっていたんだと思う」

「確かに、男に・・・キyunとしたり、ときめいたりしたことはあるけど。それなら、今こうして男やつてる俺はなんなんだよ？」

「恐らく、お前が男だった時の記憶が原因だろう・・・」

「女のように振る舞っているのは、お前がそうしろって言ったからだ。別にそうしたい訳ではないし、そうなっている訳でもない」

「今がそうなだけで、そのうち何とも思わなくなと思う・・・」

直樹に反論すればするほど、自分が追いつめられているような気がした。

そんな状況に耐えられなくなり、僕はついに一番聞きたくなかつ

たことを聞いてしまった。

「俺は、どうなる？」

「徐々に言動も含め、心までが女になる。どれくらい時間がかかるかは俺には分からないが、いずれそうなるだろう……」

「俺はどうすればいい？」

「お前はとうしたい？」

直樹は僕の目を見た。珍しく真剣な顔つきだ。

「俺は男に戻りたい……」

僕は涙をこらえながら答える。

涙？

今、僕は涙をこらえているのか？

なぜ？

何に？

僕は涙を流す必要がある？

「完全に心が女になってしまえば、男に戻りたい、と思わなくなるとしても？」

「そうだとしても、俺は男に戻りたい……」

そうか、と直樹が呟いた。

「なら、早く元に戻る方法を見つけないとな……」

直樹は僕の頭に手を乗せ、少し乱暴に頭を撫でた。

「コ、コラッ！髪がクシャクシャになるからやめろ！」

僕は恥ずかしくなり、直樹の手を振り払う。

なんで、こんな話の後に女の子を扱うみたいにするかな……。

溜息をつく僕だった。

「葵ちゃん、どうしたの。そんな浮かない顔して？」

僕は今、屋上で隼人と二人きりである。これはあの事件以来初めてのことだ。

まあ、呼び出したのは僕なんだが・・・。

僕はある目的のために隼人を呼び出した。

何を隠そう、不覚にもキュンとしてしまった人物の一人なのだ。

こいつに告白された時は本気でキュンとした・・・。

そして、もう一人は・・・。

やめた、恥ずかしいから言わない！

「もしかして、直樹君とケンカでもした？」

その言葉に、僕は変に反応してしまった。

別にケンカしたわけでもないのに、嫌な気分だ。

「違うそんなんじゃない。ただ、少し聞きたいことがあって・・・」

「なに？」

「隼人には、俺が男だったことは話したよな？」

「うん、聞いたよ。最初はびっくりしたけどね」

「俺が男に戻ったらどう思う？」

「別にどうも思わないかな。ほら、僕はどっちも大丈夫な人だから」

隼人は微笑みながら答えた。

「そっか。そうだったな」

忘れていた。こいつは女でも男でも問題ない奴だったんだ……。
何のために聞いたんだか……。

「それだけ？」

「ううん。聞きたいことはこれだけなんだけど、一つ頼みたいことが……」

「いいよ、葵ちゃんの頼みことなら、なんでも」

僕は深呼吸した。

緊張する。

でも、こんなことを頼めるのは隼人しかない。

「隼人……。俺を抱きしめてくれ」

それを聞いた隼人は一瞬きよとした。

そして、すぐに「喜んで」と返した。

ゆっくりと、僕と隼人の体が近づく。

体が触れ合うギリギリのところで、僕は隼人に優しく抱き寄せられた。

あの時みたいに、隼人の体は冷たくはなかった。

心臓がどんどん速くなる。

これがトキメキ？

ただのドキドキ？

この気持ち、オンナノコ？

ああ、温かい……。

もう少し、このままでもいいかな、と思わせるほどに……。

「一つ聞いてもいいかな？」

隼人が口を開いた。

「うん？」

「どうして、こんなことを僕に頼みに来たの？」

「ドキドキしてみたかった……」

僕は隼人を見て微笑んだ。

「これ以上、何かを望んだり、何かをしたりするのは駄目かな？」

「当たり前だろ。今日のお触り三回分は、これで全部お終いだ」

悪戯っぽく言ってやった。

「相変わらず、いい匂いだね」

そう言うのと、隼人は僕を抱いていた手を緩め始めた。

「どうした？」

「これ以上は僕がもたない……」

「そうか……」

——ガチャツ！

屋上の扉が開く音。僕たち二人はびっくりして、そちらに向いた。

ドアノブを握ったまま立ち尽くす彼。

普段、あまり感情を表に出そうとしない彼。

その彼の暗く、寂しげな表情。

「直・・・樹・・・」

僕は彼の名を呟いた。

第二十一話 ああ、これが乙女というものか……。 (後書き)

コウ 「最近、シリアス回が増えてきたね……。」

明日香 「そうね、ここの所ほとんどシリアスじゃない？」

コウ 「だね」

明日香 「それよりさ——」

コウ 「ん？・・・明日香さん、その物騒な物は何ですか？」

明日香 「——あたしの出番増やせ！！！」

コウ 「うわあああ！！！」

京子 「シリアス回だというのに、コウと明日香さんが空気を乱してすみません。感想、評価、ダメだし等々、お待ちしてます」

第二十二話 僕を嬉しくして下さい・・・。

「直・・・樹・・・・・・・・」

僕は彼の名を呟いた。

その声が、聞こえていたかどうかはわからない。
だが、直樹は何も言わずに扉を閉めて、その場からいなくなった。

「葵ちゃん。これ、まずいんじゃない？」

隼人が小さな声で言った。

ああ、そんなこと既にわかっているよ。

なんて最悪なタイミング。

「追いかけた方がいいんじゃない？」

隼人が言う。

わかっている。わかっているのに、自分の足が動かない。

「・・・葵ちゃん？」

隼人が不安そうに僕を覗き込む。

ああ、どうしよう。

直樹を追いかけて、僕はどうすればいい？

あんな顔をしていたあいつに、なんと言えればいい？

だんだん、頭が考えることを止めようとしている。

諦めかけている。

徐々に目の前が真っ白になっていった。

「・・・・・・・・えいつ！」

「ひゃうあぁっ!？」

変な掛け声とともに、後ろに回り込んだ隼人が、僕の胸を鷲掴みにした。

突然の隼人のお触りに、僕は涙目になりながら飛び上がった。すぐに、胸を両手で庇いながら、隼人から離れて彼を睨んだ。

「何をする!!！」

「だって、葵ちゃん。何の反応もなかったから」

「だからって、急に胸を揉むな！」

ハハッと微笑む隼人。こいつはいったいどういつつもりでこんなことを・・・・。

「葵ちゃん、しっかりしなよ。直樹君を追いかけておいで」

その言葉に、はっと気づかされる。

「隼人、ありがとう・・・・」

「どういたしまして」

僕は隼人が言い終わらないうちに、走り始めた。

でも、何か忘れている気が……あつ！

「隼人、さっきの今日四回目のお触りだろ！」

「えゝ、葵ちゃんのためにやったのに……」

「うるさい。あとで覚えておけ！！」

僕は勢いよく階段を駆け下りた。

「直樹！」

一人で下校しようとしている直樹を見つけるのは簡単だった。教室に戻り、京子に聞くと教えてくれたのだ。

直樹は、屋上の扉を開けた時と全く同じ表情で僕を見た。

「何の用だ？」

「その、さっきの事なんだけど……」

「それがどうかしたか？」

「お前にどう見えたかわからないが、あれは誤解だ……」

「前川と抱き合っていて、それが誤解だ、と？」

直樹の言葉に棘がある。そしてそれは僕の胸に深く刺さる。

「そんなことを信じると言うのか？ どう見ても、お互い合意の上に見えた。お前、本当は前川のことが好きなのか？」

「だから、違う。隼人のことが好きだとか、そういうのではないんだ。理由だってあったんだよ・・・」

「理由？どんな？」

「それは・・・」

僕の沈黙のせいで、直樹の表情が徐々に曇る。僕に対して疑惑の目を向けていた。

僕は直樹にどんな目で見られようと、打ち明けようと決心してここに来た。

だから、・・・。

「自分が頭の中まで女になろうとしているのかを確かめたかった。女の子の気持ちと言うものを知りたかったんだ。・・・」

「それで、あれか・・・」

あれとは、僕たちが抱き合っていたことだろう。

「ああ。隼人には俺から頼んだ・・・」

「なぜ、俺でなくて、前川なんだ？」

「え？」

「何で俺に頼まなかったんだ」

直樹が僕を壁際に追いつめた。

僕は壁にもたれかかり、直樹はそれでも詰め寄ってくる。

「直樹・・・？」

「俺は、お前の親友だろう。その程度の頼みぐらい、俺が聞いてやるのに・・・」

気が付かないうちに僕は唇を噛んでいた。

「ゴメン、直樹・・・」

でも、親友という響きは僕には寂しく聞こえた。

「直樹。俺を・・・」

「・・・？」

そこで僕は口を噤んだ。

隼人には言えたのに、なぜか直樹には言えない・・・。
そうされるのが嫌なわけではない。

ただ、言えない。

抱きしめてほしい、と。

女の気持ちを知りたい、と。

僕はようやく言葉を絞り出した。

「俺を嬉しくして下さい・・・」

一瞬呆気にとられた直樹は微笑み、僕の頬に触れた。

そして、ゆつくりと直樹の顔が、僕に近づいた・・・。

第二十二話 僕を嬉しくして下さい・・・。（後書き）

コウ 「今回は空気を読んで、キャラの掛け合いは自粛します（笑）」

「
京子 「だから、その（笑）がダメなんだって！」

明日香 「感想、評価、ダメだし等々、お待ちしてます」

第二十三話 僕だ。葵だ。真っ赤だ。

僕だ。葵だ。真っ赤だ。

顔が熱くて仕方がない。

何を思ったのか僕は直樹に「俺を嬉しくして下さい」と言った。
なぜか敬語。

うん、実際思った。

抱きしめてほしいと思った。

だけど、あんな、まさか直樹が、あの直樹が僕にキ、キ、キキキ
キ・・・・キスを！？

ああ、思い出ただけで顔が熱くなる。

直樹はなぜ、あんなことを・・・・！！

プシュ~~~~~！

「おい、葵。何一人で壊れてやがる・・・」
直樹の声で我に返る。

「う、うるさい！急にお前がキ、キキキ・・・！」

「キスか？」

「キス！？」

直樹が何の躊躇いもなく放った単語に、僕の顔がまたまた熱くなる。

こいつは何度、僕を壊せば気が済むんだ・・・。

「そうだよ、お前がキスなんかするから！」

「してはいない。しようとしただけだ」

そう言いながら、僕の方を見た直樹の両頬には、僕の顔に負けな
いほど真っ赤な手形が付いていた。

もちろん僕が付けました・・・。

往復ビンタです。

しかも、二往復しました。

「何も言わずにキスしようとするからだろ！」

「嬉しくして下さいと、しおらしく言ったのはお前だ」

「しおらしく・・・!!」

「じゃあ、先に言えばよかったのか？」

「そういう問題じゃない！もっとほかのことは思い浮かばなかったのか！」

「例えば？」

例えば！？

・・・例えば。

「可愛いよ。とか？」

僕は必死に絞り出した例えを言う。

「可愛いよ」

直樹が微笑みながら言った。

一瞬、キュンとくる。

「今さら！しかも言い方軽すぎ！」

僕は恥ずかしさで顔を背けながら言った。

「じゃあ、胸でも揉んでいけばよかったか？」

「そうそう、考えればいくらでも……。コラ、俺が胸揉まれて喜ぶ訳ないだろう！」

「いつも前川に揉ませているのに？」

「誰が、揉ませている、だ！揉まれている、の間違いだ！」

「揉まれている時、あんな顔しているくせに。何が揉まれている、だ……」

直樹は顔を少し膨らませた。

……え？

隼人にお触りされているとき、嬉しそうな顔してたの……？

衝撃の事実を伝えられた僕は、開いた口がふさがらない。

それを見た直樹が吹き出す。

「嘘だ」

「性質悪い嘘をつくな！」

直樹は笑ったままだ。いつも表情を表に出さないだけに、なんと
いうか笑顔がまぶしい。

「何がそんなにおかしいんだよ……」

僕は溜息をついたが、だんだんおかしくなってきた、僕も一緒にな
って笑った。

いつの間にか、二人とも笑顔になっている。

夕暮れの空に、二人の笑い声が響いた。

第二十三話 僕だ。葵だ。真っ赤だ。（後書き）

短かったですがこれにて、第三章完結です。

第四章。葵、そろそろ思い出さなければならぬことがあるんじゃない？

明日香「いつになったら、あたしの出番が来るのかしら・・・」
コウ「お願い明日香さん、その手に持つてる金属バットをしまつて」

明日香「なあに？球技大会に向けて素振りの練習しようと思ってただけど・・・」

コウ「いやあああ！素振りしながら近寄らないでえええ！」

直樹「感想、評価、ダメだし等々、あのバカ（コウ）が待っているらしい・・・」

第二十四話 明日香姉さんのバカ〜！

シャンプーの香りが風呂場を満たし、僕の髪を洗う手が鼻歌に合わせてリズムよく動く。実に楽しそうなりズムだ。

「姉さん？」

「ん、なに？」

鼻歌が止む。

「私の髪なんか洗って楽しい？」

「あら？ 葵はあたしに髪を洗われるのが嫌なの？」

「そんなつもりで言ったんじゃないわ。少なくとも、姉さんの方が私より髪を洗うのは上手だし、マッサージみたいで気持ちいい」

「少なくともって何よ、少なくともって・・・」

姉さんは大きく鼻を鳴らした。

実は女の子になったとき以来、姉さんに髪を洗ってもらっている。僕は何度やっても髪を絡ませてしまうのだ。

姉さんはいつも鼻歌を歌いながら、僕の髪を洗う。その鼻歌はなぜか最近の物は一つもなく、とても懐かしい物ばかりで、中には子守唄のような物まであった。

子供扱いされているようで、最初はちょっと嫌だったが、最近ではとてもリラックスして鼻歌を聞いていた。

そして、なぜか姉さんの鼻歌を聞いていると思い出す、幼い時の記憶。

直樹や京子と遊んだ記憶。

近所に住んでいたガキ大将に京子がいじめられたときに、京子を助け出す直樹。

僕が泣いている・・・。

直樹は誰かの人形を持っていた。

そして、それを泣いている僕に渡す。

僕は人形を渡されるとすぐに泣き止み、辺りを駆け回っていた。

あの人形はいつたい・・・。

やはり、幼いころの記憶というものはどんどん薄れていくものだ。全く自分の覚えのない風景が浮かび上がる時がたまにあった。

因みに、僕は毎日のバスタイムで耐性が付いたのか、自分の体を見てドキドキすることや、恥ずかしくなることはなくなった。これは正直、いいことなのか、悪いことなのか、僕には判断できない。

姉さんの方はというと、自分だけ服を着ているのをいいことに、たまに後ろから襲ってくる。よほど羨ましいのか、まな板明日香はメロンの僕の胸を集中的に襲ってくる。

もことから、中々な手つきではあったが、最近襲われるたびに姉さんのテクは上達している。なんか怖い・・・。

たまに僕も反撃に打って出ようとするが、姉さんはまな板なので揉むことはおろか、つかむことすらできない。そして逆鱗に触れてしまった僕は、言葉では表現できないような、もっとすごいことをされてしまうのだった。

それは、肝試しの時の隼人に相当するほどに・・・。

「……で、僕は何をしようとしていたんだっけ。
あつ、そうだ……！」

「姉さん、自分が女の子だなんて感じるときつてある？」

「なんだそれは？あたしにケンカ売っているのか？」

「いやいや、ただ気になっただけ！」

「質問を変えなさい……」

シャンプーのボトルを手に、高く振り上げている姉さん、どうやら地雷だったようだ。

「じゃあ、……男の子にキュンとしたことは？」

「え、キュ、キュンとって……」

姉さんの顔が赤くなる。

僕が言うのはあれだが、やっぱり顔は可愛いよ、姉さん。今こゝで男の体でない自分が悔しい……と言うのは嘘。さすがに犯罪になつてしまう。

「やっぱり、あまゝい言葉を囁かれたときかな……。あ、あと寝顔とかもキュンとくるかも！」

なんか、テンションが上がってるよ、姉さん。

でも、やっぱりそういう時にキュンとくるものなんだ……。

つまり、その経験がある僕は直樹の言っていた通り、乙女になつている、と……。

「姉さん、男の子に甘い言葉を囁かれたことあるんだ……」

僕は思ったことを口にした。本当に、純粹に思っただけ。でも世の中には口は災いのもと、という言葉がある。まさに今の状況がそれ。

「あんだ、やっぱりケンカ売っているのね」

姉さんの怒りに火がついてしまった！

姉さんは僕を羽交い絞めにして、風呂場のタイルに押し倒す。

マズい！これはマズいパターンだ！！
しかも、今日は後ろから！？

羽交い絞めに使っていた姉さんの手が徐々にメロンに向かって伸びていく。

そして…………。

「やつ…………！ちよつと姉さん！謝るからあああ！」

「んゝ、聞こえないなゝ」

姉さんの吐息が首筋にかかる。

「そうだ、葵。今日は姉さんが体を洗ってあげるっ！」

「いや、もう体は洗ってるから！」

「遠慮しないで」

満面の笑みを浮かべる姉さん。呼吸が荒くなってますよ…………！
それに、なんか手つきが…………！！

「いやああああああ！！！」

僕がいろんな意味で昇天した時の叫びは、近所にまで聞こえたという。

うつっ、もう嫁にいけない…………。

第二十四話 明日香姉さんのバカ〜！（後書き）

最近、また各話の文章量が減ってきている・・・。

明日香「ようやくあたしの出番が来た〜！」

コウ「明日香さん、本文中のアレ・・・」

明日香「ああ、葵にやったアレ？んふふ、楽しかったな〜」

コウ「やっぱりこの人、そっちの気あるんじゃないの・・・？」

感想、評価、ダメだし等々、お待ちしています！

第二十五話 ようやく思い出しました。

僕だ。葵だ。今は女だ。

ん・・・？

前にもこんな件くだりがあったような・・・。
まあ、それはどうでもいいか。

ところで、僕が女の子になって、早、一か月半。季節はもう夏。
クーラーなしでは乗り切ることのできない夏。
そして、あと一週間で待ちに待った夏休み。

夏と言えば、あれだ。

海に夏祭りに花火に肝試し。

や、肝試しはどっちでもいいや。むしろパス。怖いのは嫌いだ。

海と言えば、女の子の水着姿。

夏祭りと言えば、女の子の浴衣姿。

花火と言えば、・・・線香花火？

うん、楽しいイベントがいっぱいだ。

僕が男ならの話だが・・・。

今年からは自分が着て、見られる側だと思つとなんか恥ずかしい。だって、男がどういう目で水着姿や浴衣姿を見ているかを知っているから。

いや、僕がそんな目で女の子を見ていたわけではない！友人。そう友人がそういう目で見ていただけの話だ！

でも、そんな夏を前にして何かが引つかかる。

特に、『今年からは自分が着て』の『今年から』。これが一番引つかかる。

何か忘れてる。

何か僕は重大な過ちを犯している。

そうだ！水着は何色にするか、まだ決めていない。

可愛らしいピンク？

それともシックな黒？

水色もいいなあ・・・。

でも、どうやって選ぶうか。一人では選べないような気がするし。

京子と一緒に選ぶうか？

それとも、明日香姉さん？

違う、絶対違う。水着の事なんかじゃない！

じゃあ着物？

これも違う。

花火・・・そうそう、花火だ。

——ンなわけあるかあ！！

一体なんだ。僕は何を忘れているというんだ。

『今年から』……。

んん……？

今年『から』。

……つまり、僕はこれからずっと女？
嫌だ。それは嫌だ！

それならば、男に戻る必要がある。

そう、男に戻らなければいけないんだ！

そのためには、そのためには何をすればいい？

いや、何をしようと思っていた？

僕は何か行動に移そうとしていたはずだ。

思い出せ。思い出すんだ……！

僕が女になりたいと思ったのはあの時……。

あの時にそう願った。

恐らくそれが、僕が女になった原因。

それを直樹に話す……！

「それだあああ……！」

僕は勢いよく立ち上がり叫んだ。

そこは教室。授業中。

みんなの目は僕に集中。

なんだ、この空気は。

なんだ、皆のこのかわいそうなものを見る目は。

なんだ、僕はいつたい何をしていたんだ。

先生は呆れた顔で僕を見る。

化学の先生だ。

「島崎・・・この問題の答えを言ってみろ」

黒板には見たこともない化学式。

教科書を見たけど、僕の開いていたページとは問題が明らかに違う。

「分かりません・・・」

「お前・・・毎回授業で居眠りするだけでは飽き足らず、ついに授業妨害まで・・・!」

先生は怒りに体を震わせている。

僕は冷や汗だらだらだ。

他の皆は大爆笑している。

「廊下に立っていなさい!!」

こうして僕はこの国に、廊下に生徒を立たせる、と言う文化が残っていたことを知った・・・。

「うう、京子」。恥ずかしいよ。顔から火が出そうだよ」

僕は授業が終わった後に京子に泣きついた。

「授業中に居眠りしていた葵が悪いんでしょう」

「それはそうだけど・・・」

「大丈夫。今日はもう学校終わりだし、明日になったら、みんな忘れてるよ（わたしは覚えてるけど）」

「なあ、京子。最後になんか言った？」

「うっん。何も言っていないよ」

京子は笑顔で答えた。

・・・確かに何か聞こえたんだけどな。

僕は首を傾げた。

「あ、そうだ。こんなことしている場合じゃない！」

「どうしたの、急に？」

「京子、直樹のやつ、どこに行った？」

「さっき、教室を出て行ったところだけど・・・」

「サンキュー。じゃあ、また明日！」

僕はすぐに荷物をまとめて、直樹に追いつくために教室を後にした。

「遅かったな」

直樹が、息を切らしている僕に言った。

「どうせ一緒に帰るんだから、待つか、声かけるぐらいしたらどうだ！」

「まあ、考えとく・・・」

直樹はそっぽを向いて言った。

その行動に腹が立ったが、今はそれどころではない。

僕は適当に返事をする直樹への怒りを鎮め、本題に入ることにし

た。

「直樹、よく聞いてくれ・・・」

「なんで・・・？」

「真面目な話だから・・・」

「じゃあ、いつもは真面目じゃないのか？」

「だう、そういう問題じゃないんだ！」

僕はゆっくりと息を吐いた。

「俺が女になった原因。それについて、今一番心当たりのあることを、お前に話す・・・」

「ようやくか・・・」

直樹が僕の方を向いた。

その直樹に僕は人差し指と中指を立てて、手を突き出した。

「その前に約束だ。絶対に笑うな、そして引くな。この二つは禁止だ」

「つまり、絶対に笑われるか、引かれるような理由なんだ・・・」

直樹は呆れながら言ったが、僕はそれに言い返すことができなかった。

第二十五話 ようやく思い出しました。(後書き)

ようやく思い出した葵。

次話、物語が動く・・・！かもしれない。

感想、評価、ダメだし等々、お待ちしております！

第二十六話 暴露

「なんとというかだな、その……。あれだ、確かに俺は女になりた
いと願ったことがある」

「いつ？ どこで？ どうして？ 何のために？」

直樹が早口で捲し立てる。

「順を追って説明するから急かさないでくれ」

「じゃあ、いつ？」

「中学一年生の時……」

「どこで？」

「毎年、初詣に行ってる神社」

因みに、僕と直樹と京子は親同士の仲がいいので、初詣は毎年一
緒に行っている。

「どういうことだ？」

「だ、俺もよくわからないんだよ！ 黙って聞け！ 口出し禁止

！」

「……」

「で、次なんだっけ」

直樹を見ると口を片手で押さえていた。

それを見た僕は溜息をついた。

直樹はジェスチャーで何かを伝えようとしているが、正直何が言
いたいのかさっぱりわからない。

「いいよ。喋っても」

「撤回するぐらいなら、初めから言っな」

「こいつ……！」

僕は震える手を何とか抑え込み、平静を装った。

「で、どうしてそんなことを願った？ というか、お前の目的は何
だ？」

「よくわからない。覚えているのは、初詣が面倒だと思ったこと、お参りしたところで願い事が叶う訳ないと周りをバカにしていたこと、あと願い事なんて何もなかったこと、その三つだ」

「なんて罰当たりなやつだ。それに、願い事は何もなかったって、実際お前は女になりたいと願ったんじゃないのか？」

「最初は願い事なんか何もなかったんだ。だけど、自分がお参りするときに、ふと思いついたのが――」

「女になりたい、か・・・」

「軽い気持ちだったんだよ！お参りして、何か変わるんだったら、俺を女に変えて見せろ、って思っただけなのに！」

「罰が当たったんだ。他の参拝客がお参りしている時にお前だけ、訳の分からんことを考えたからだ」

「でも中一の時の話なのに！」

「それは俺に言うな。それで、女になって何をしようとしたんだ・・・？」

それを言われた瞬間、僕は心臓が止まりそうになった。

ついに来てしまった、この瞬間・・・。

「直樹、さっき言ったこと覚えてるよな？」

「絶対に笑わない。そして引かない、か？」

「そうだ」

「わかったから、早く言え」

緊張していた。手汗が半端ではない。

決心していても、やっぱり躊躇してしまう。

「もじもじするな、萌えるだろうが」

「う、うるさい！ 勝手に人で萌えるな！ せめて許可を取れ！」

「萌えてもいいか？」

「萌えてよし！ って、違う！ なんだ、この訳の分からないノリは！」

「一人で騒ぐな、喧しい・・・」

「冷静に突っ込むんじゃない！」

僕は何度も深呼吸をして、気持ちを落ち着けた。

「びつくりさせようと思ったんだよ、お前を・・・」

言い終わった瞬間、顔から火が出た。いや、もちろん比喻だ。実際に火が出たら大変だ。

だけど、それぐらい恥ずかしい。

この一か月半の間、僕と直樹を振り回してきた、僕の願い事。

それは、中学一年生の頃の罰当たりな僕の考え。何ともバカな思いつきの願い事でしかなかったのだから。

絶対に引かない。そして、笑わないと誓った直樹は、確かにそのどちらの反応も見せなかった。

ただ、超が付くほどの無表情で僕を見ていた。

「違う！ 違うんだ！ 俺にそっちの気があったとか、そういうのではないんだ！」

僕は大声を出しながら、一人で家まで走って帰った。

「ただいま。って、うわ！ 葵、あんたどうしちゃったの？」

姉さんが帰ってきたとき、僕は玄関で力尽きたように倒れていたという。

「姉さ〜ん！」

「どうしたの、葵？ あたしに泣きつくなんて、明日は雨かしら？」
姉さんはくすりと笑いながら言う。

「笑い事じゃないんだよ〜！」

と姉さんに今日の話を話そうと思った時に、タイミングよく僕の携帯電話が鳴った。

「・・・直樹？」

僕は自分の部屋に戻り、携帯電話を見つめていた。少しだけ電話を取らなかつたが、直樹が電話を切る気配がなかつたので、通話ボタンを押した。

「もしもし？」

（なんで走って帰った？）

「だって直樹があんな顔をするから」

（笑うな、引くな、と言ったのはお前だ）

「もう少しましな反応があるだろう？」

（思いつかなかつた）

「なんだよ。それ・・・」

（ところで、念のために聞いておくが、お前は男に戻りたいのか？）

「何度も言っているように、俺は男に戻りたい」

（じゃあ、明後日の日曜日。あの神社に行くぞ）

「何で？」

（男に戻りたいんだらう？ とりあえず行ってみる価値はあるんじゃないのか？）

「何でそんなに急に・・・。それに、行つてどうすればいいんだよ？」

（善は急げ、だ・・・。何をすればいいかは知らん。それは自分で考える。京子にも声をかけてある。待ち合わせは、俺の家に朝の九時集合。分かつたな？ 遅れるなよ？）

直樹は一気に捲し立てて、一方的に電話を切ってしまった。

僕は携帯電話をベッドの上に投げつけた。

第二十六話 暴露（後書き）

こんにちはコウです！

突然ですが、ここで質問です。

葵の願い事を知った時にドン引きした人は手を挙げてくださーい。

（はい！）

はい、全員ですね。（泣）

感想、評価、ダメだし等々、お待ちしております！

第二十七話 人生で一番恥をかいた日

「それで、神社に着いたはいいいけど、何をすればいいんだ？」

「昨日の電話でも言ったはずだ。自分で考えろ。俺たちはお前がその当時何を考えていたかなんて、全くわからないんだから」

直樹は僕を見て言った。

「そうそう、特に前川君なんて、当時は知り合いでもなんでもなかったんだから」

京子、今さらりときついこと言っただけだった？

ところで、今、京子が「前川君」と言った。そう、いつの間にか僕たちは四人で行動していた。

「隼人、お前いつからいたわけ？」

僕は隼人に聞く。

「うわっ、葵ちゃん。その言い方はひどくない？　僕はいつだって葵ちゃんの傍にいたのにな」

笑顔でキザッぽいことを言う隼人。それを聞いた直樹が溜息をついた。

「電車の中でお前が京子にもたれかかって寝ている時、偶然出くわしたんだよ」

「そうそう、運命感じちゃうよね」

と言いながら、隼人は僕の手を握る。

「はい。今日一回目のお触りな・・・」

「え？　これもお触りに入るの？」

とまあ、それからもいろいろ、なんやかんやがありながら、とりあえず神社の中を歩き回っていた。

正月でもない神社は思っていたよりも人が少なく、一般人は僕たちだけの様にも見えた。

「あれ？」

「葵、どうしたの？」

急に声を上げた僕の顔を京子が覗き込む。

「いや、そういえば、あの小さな賽銭箱に見覚えが……」

僕は少し遠くにある賽銭箱を指さした。

小さな、と言っても、それなりの大きさではあり、他の賽銭箱と比べれば多少、小さいということだ。

そう、確かあそこでお参りするために、ずいぶん並んだんだよね。30分ぐらいだったかな？

それに嫌気がさして、どうせ叶いもしない願い事なんてするなよ！ って気分になって……。

自分の番の時に、願い事を叶えることができるなら、僕を女にしてみろ！ と思ってしまった。

何度思い出しても気分が悪くなる。

ああ何やってくれたんだ！ 中一の僕！！

「とりあえず行ってみようか？」

隼人と直樹が先へ進む。僕と京子は遅れて二人に付いて行った。

「……………」

「とりあえず、お参りでもしてみたら？」

京子に言われるがまま、賽銭箱に五円を放り込み、お参りする。

「……………」

何も起こるわけねえよ！！

心の中で京子に突っ込む。

「とりあえず、大声で叫んでみたら？」

隼人が言った。さっきから、こいつら「とりあえず」ばかりを連

発しやがって。

「何を？」

「葵ちゃんの願い事」

「なるほど！」

「いや、なるほど！　じゃないだろ！」

手を叩いた僕に、直樹が突っ込む。

「じゃあ、他に何かいい案はあるのか？」

「いや、もういい。一人で叫んでいろ」

そう言つて、直樹は僕から離れたところに立った。

こいつ、もしもの時には他人の振りするつもりだ・・・。

誰が、そんなことさせてたまるか！　逃げようとした瞬間全力で

絡んでやる！！

京子と隼人を見てみる。ほら、僕の傍から―――つて、京子？

どうして、僕から離れるんだい？

直樹の所まで離れていった京子は僕の方を見ようとはしなかった。

僕は仕方なく、残った隼人を見る。

隼人は笑顔で僕を見ていた。だが、ゆっくり、ゆっくり、直樹た

ちの所まで後ずさりしていった。

京子、隼人、お前もか・・・！！

「そーですか。そーですか！　俺に一人で恥をかけ、と言いたいん

だな。お前たちは！」

「誰もそんなことは言っていないよ。葵ちゃんは僕たちのことを気にせず、自分のやりたいことをやればいいんだよ」

隼人、お前よくぬけぬけと、そんなことが言えたな！

「ああ、もう！　わかったよ！」

僕は周りを気にせず、大きく息を吸った。

僕からさらに離れていく直樹、京子、隼人を横目に僕は、大声で叫んだ。

「俺を男に戻してくれー!!」

そうだよ。

最初からわかっていたんだ。

何も起きるはずないって・・・。

恐る恐る直樹たちの方をしてみる。

やつらは、木の陰から様子を窺っていた。

僕は恥ずかしさのあまり涙目になる。

それを見た京子が駆け寄ってきた。遅れて直樹と隼人が歩いてくる。

「京子」

「よしよし。葵は頑張ったよ」

僕が京子に泣きつくのと、彼女は僕の頭を優しく撫でた。ただ、まったくフォローになっていない。

「こいつ恥も忍ばず、よくこんなことを・・・」

直樹が笑いをこらえながら言う。

「もう、直樹君！ 葵がとんでもないことをしたからって——」
京子、京子！ だから、フォローになってないって！

恨めしさいっぱいに僕は神社を睨んでいたその時だった。
突然、光の塊のような物が空から降りてくる。

「え？ なに？ なに？」

「ん？」

「直樹君、なんでそんなに冷静なの？」

「隼人、お前もだろ！」

「葵！ なにこれえ！？」

「知らないよ！ 俺が聞きたいぐらいだ！」

正体不明の光が僕たちの目の前に広がった。

第二十七話 人生で一番恥をかいた日（後書き）

しばらく、トンデモ展開が続きます。

一応、書き始めた当初から決まっていたイベントなので
どうか、ご容赦を・・・。

感想、評価、ダメだし等々、お待ちしております！

第二十八話 妖精って本当にいるんだ・・・。

僕たちの目の前に広がった正体不明の光は、やがて光の中心に集束していく。僕たちは黙ってそれを見つめることしかできなくなっていた。

一度集束した光は、また発散し始め、徐々に小さな人の形をとっていった。

光がなくなり、視界が安定したところ、あの賽銭箱の上には小さな男が立っていた。

背中まで伸びた白い髪、くすんだ青色の着物を着た小さい人らしきものが、僕らの目の前にいた。

「何？」

小さな人は、賽銭箱の上に胡坐をかいていた。

「なんじゃそりゃー!!」

突然、京子が叫び声とともに、全力のツッコミをそいつに繰り出す。とんでもないスピードの突っ込みだ。

「え？ ちょっ！ ぐふっ・・・!」

手のひらサイズしかない小さな人（以下、小人）は京子のツッコミを全身で受けたせいで体制を崩し、賽銭箱の中に落ちてしまった。「うわああああ!？」

悲鳴を上げながら落ちる小人。どうやら、賽銭もそこそこ入っていたらしく、最後にはチャリンというお金の音が聞こえた。

「はっ！ いけない、私ったら・・・!」

京子が両手を真つ赤になった顔に当てる。

こいつ、最近怖いよ・・・。

「おい。京子、今のは何だ？」

直樹が冷静に聞く。

聞くとこ、絶対そこじゃないだろ！

あの、人を殺せそうなスピードのツツコミはスルーか！？

「なんか、人みたいだったけど」

隼人、お前もかつ！

「どうしよう、どうしよう！ あの変なのを見た瞬間、体が勝手に動いて・・・。ねえ、死んだりしてないよね？ ね？」

京子は半泣きになりながら僕を見る。

「だから、心配するところはそこか・・・？」

僕は誰にも聞こえないほど、小さな声で呟いた。

「いたい、あの小人は何なんだ？」

しかも、あいつ、「何？」とか言ってたぞ。ということは僕たちが呼んだのか？

「いいや、呼んでない、呼んでない。」

あんな変なの、呼んだ覚えなんてない。

僕たち四人は一斉に沈黙した。お互い顔を見合わせ、様子を探り合っている。

次に何をすべきか。

今の、本当に何？

知らない、こっちが聞きたい。

どうする？

賽銭箱に落ちたよな？

覗いてみる？

いや、逃げるべきだろ。

じゃあ、お前先に行けよ。

そう言うお前が先に行け。

人間、目だけで会話できることを知った僕だった。というか、こ

いつらみんな腹の中真っ黒？

誰も何も話そうとしない。時間だけが流れる。
そんな中、こもったような声が聞こえた。

「おゝい！」

賽銭箱からだ。

僕たちは恐る恐る賽銭箱を見る。

「誰か出してええええ！」

四人同時にズッコケる羽目になってしまった。

「いやゝ、助かった！ 本当にありがとう！」

小人は僕たちに頭を下げる。

あの後、小人がずっと賽銭箱の中で泣き続けていた。あまりにも
かわいそうで、いたたまれなくなった僕たちは、小人を救出するこ
とにしたのだ。

直樹が近くの木の高い枝を折り、賽銭箱の中に入れて小人を救出
した。

賽銭箱に木の枝を突っ込む直樹。そして、それに捕まり救出され
る小人。

何ともシュールな光景だった。

直樹に救出された小人は、寶錢箱の隅に座ると、僕たちの顔を順番に見回した。京子の時だけ、顔を見た瞬間、震えあがっていたのは言っまでもない。

「京子も気をつけるよ」

僕は京子に向かって言った。京子は「てへっ」と舌を出す。

こいつ、反省しているのか？

「京子っ！？」

小人がなぜか、京子の名に反応する。

「どうした？」

「い、いや、なんでもない。こつちの話だ」

そう言った小人だが、僕には京子の名を聞いて震えているようにしか見えなかった。

「お前は何だ？」

直樹が聞く。

直樹はこんな状況になっても、ポーカーフェイスだった。

こいつもこいつで、ある意味すごいと思う。

「俺？ 妖精に決まってるだろ」

「こんな可愛い妖精なんかいる訳ないだろ！ そもそも妖精なんていない！！」

真面目な顔をして答えたが、僕のツツコミにより、己のすべてを否定されてしまった妖精は、口を金魚みたいにパクパクさせた。

自分がどれだけ妖精か（？）アピールする小人。それを僕たちはことごとく無視した。

「信じないならいいや・・・」

ついには、いじめてしまった。直樹が折った木の枝で地面をつついている。

そんな妖精のことは気にせず、僕は質問をした。

「とりあえず、訳の分からない登場シーンは、一旦置いて・・・何しに来たんだ？」

「？ 誰かが俺を呼んだから来たに決ってるじゃないか」

「いや、誰も呼んでないよ・・・」

僕はできるだけ冷静に言ってやった。

「いやいや、そんなはずない。そんなはずない」

二回も言うつ必要ないよ、と内心ツツコむ。

「だから、誰も呼んでないんだって。なあ？」

僕は直樹たちの方を見て言った。三人とも頷く。

「確かに呼ばれたはずなんだけどな。じゃあさ。この近くで、俺を男に戻してくれ。って叫んでいたやつを見なかった？」

「えっ？」

僕は一瞬にして全身が氷ついた。

ゆっくりと直樹たちの方へ向こうとした。

真横にいたはずの奴らの姿は、僕の後ろ。しかも十メートルほど離れた位置に立っていた。

「呼んだのって・・・俺？」

ひとり呟く僕だった。

「俺を男に戻してくれー!!」

俺は空高く、それでいてどこでもない場所で、強い願いを纏った叫び声を聞いた。

ベッドで寝ていた俺は、その叫びを聞いて飛び起きた。

女の声。声の感じからして、たぶん若い娘。

「なんだ？ 俺を男に戻してくれって、どういう意味だ？」

俺は地上から聞こえてきた理解できない願いに首をひねる。ただ、願いの強さから、おもしろそうな願いだ、と思ってもいた。

変な願いを叫ぶ女に会ってみたいと思う。

どうしよう？

いつものような願いなら無視するところだけど、これは面白そうな匂いがプンプンする。

そういえば、昔もこんなことがあったな・・・。

あの子供は今、どうしているのだろうか？

ちゃんと、あの願いは叶えてやれただろうか？

懐かしいことを思い出し、少し気分がよくなる。

「久しぶりに、仕事するか・・・」

俺はその場に立ち上がる。すると隣にいた奴が声をかけてきた。

「気をつけるよ。最近、『主』が悪魔のような女子高生に、箒で叩きのめされたりしいからな」

「心配しすぎだろ・・・。あ、でも念のため、その女子高生の特徴を教えて」

「『主』曰く、黒髪のショートヘアーで、見た目は『萌え系』の少女。だが、腹の奥底・・・ほんの一部ではあるが、我々も太刀打ちできないほど真つ黒な部分があるらしい」

「へえ。俺たち妖精でも太刀打ちできない人間っているんだ」

俺は感心していた。この世界の神である『主』にそんなことをできる人間がいるとは・・・。

できれば、そいつに会ってみたいものだ。

「名前は？」

「京子、というらしい。『主』は『ブラック萌え萌え京子』と呼んでいた……」

「そっか、それじゃあ行ってくるわ」

「くれぐれも、気を付けてな……」

俺は光を纏って、地上へ飛び降りた。

正直な話、仕事で地上に降りるまではよかった。

しかし、降り立った後から途中までは、願いを叫んだ女のことなど、気にする余裕がなかった。

俺は地上で出会ってしまったのだ。

『主』も恐れる最恐の女子高生『ブラック萌え萌え京子』に……

第二十八話 妖精って本当にいるんだ・・・。（後書き）

第二十八話『妖精って本当にいるんだ・・・。』

如何だったでしょうか？

というより、昨日は更新できなくてすみません。m(┐┐)m

そして、作者の完全な思いつきと悪ノリでできた、サイドストーリー
I『side F』の方は如何でしたか？w

いつの間にか、妖精たちの間で最恐女子高生として恐れられていた
京子。噂を流したのはもちろん・・・ww

（あの時は本当に怖かった。殺されるんじゃないかと・・・（泣）。
『主』K談。『願い事』第十七、十八話参照）

因みに『side F』の『F』は、『fairy』の『F』です。

感想、評価、ダメ出し等々、お待ちしております！

第二十九話 妖精との再会？

「嘘だろ。呼んだのって、俺なのか？」

目の前の妖精を見ながら呟く。

「ん？ ああ、お前が俺を呼んだのか？」

妖精は僕を指さす。

やめろ。また直樹たちに変な目で見られる。

もう一度、直樹たちを見ると、さらに五メートルは離れた位置から、かわいそうな物を見る目で僕を見ていた。

もう、いいや。

「確かに、男に戻ってくれて叫んだのは俺だよ」

僕は、直樹たちのことは放っておいて、妖精との会話に集中することにした。

「そうか、じゃあお前が俺を呼んだんだな」

集中するのはいいとして、さっきから「呼んだのは誰？」という話題から一切話が進んでいない。いい加減にしてくれ。

「なるほど、なるほど」と妖精は何度も頷く。

「ちよつと待つて。俺が呼んだということは、お前は俺の願いを叶えるために、現れたってことか？」

「ああ、そうだが」

妖精はなぜかきこちなく笑った。

「えっ？ 本当に！？」

僕は嬉しさのあまりその場で飛び跳ねた。

後ろから、三人分の変な視線を感じたが、それどころではなかった。

ついに、ついに男に戻る時が来たのだ！

「あゝ、でもね・・・」

妖精が何か言いかけたが、僕は無視した。

「直樹、京子、隼人！ やったぞ！ 男に戻る！」

「あ、いや、ちょっと待って・・・！」

僕は妖精の静止を無視して、直樹たちの下に走った。

って、嘘っ！

直樹たちは僕が走るのを見た瞬間、逆方向に向かって走り出した。
「待てよ。男に戻るんだって！」

僕が叫んだのを聞いて、三人の動きが止まる。どうやら、最初に言っていたのは、聞こえていなかったようだ。

「それ、本当か？」

「ああ、本当だよ！　だって、あいつが現れたのは、俺の願いを叶えるためだって・・・」

僕はそう言いながら、妖精の方を向いた。

「って、うわぁー！！」

さっきまで、寶銭箱に座っていた妖精が真後ろにいた。空中に浮かんでいる。よく見れば、背中には羽がつ！

「気持ち悪っ。なんか、虫みたい・・・」

隼人の陰に隠れていた京子が小さな声で呟いた。

もう、こいつヤダ。本当に怖い。

京子の呟きは、妖精にも聞こえていたらしく、肩を落とす。

「と、とりあえず。その女」

妖精が僕を指さす。

「俺か？」

「そう、お前。俺はお前の願いを叶えに来たとは言ったけど、叶えられるかどうかはわからないぞ」

「京子」

妖精の口から衝撃の言葉が放たれ、僕の機嫌は一気に悪くなる。
気が付くと京子の名を呼んでいた。

「この虫みたいなやつ。殺れ・・・」

「イエス、ママ」

京子是指をバキバキ鳴らしながら、妖精に近づく。

「わー！ 待つて待つて！ 願い事は聞くから待つて！」

妖精は京子から逃げながら叫んだ。

「じゃ、願い事言つて」

妖精は言つた。

なんだ、この軽いノリは……。

「男に戻してくれ」

「無理」

「京子……」

即答した妖精に、計り知れない怒りを抱いた僕は、また京子を呼んだ。

どうやら、この妖精は京子を極端に避けようとしている。かなり恐れているようだ。

まあ、初対面でいきなり賽銭箱に落とされたら、誰でもトラウマになるか……。

「だから、待つて。理由を聞いて！」

僕は溜息をつきながら、京子を止めた。

「願いが強すぎるんだ」

「強すぎる？」

「そう、その願いを叶えるためには、お前の体を変えるだけじゃなくて、他人の記憶を始めとする、お前がかかった物質——まあ、写真とかだな——を変えなきゃならない。だから、かなりの時間と力を使わないと叶えることができない」

「いや、今すぐ頼む」

「だから、無理だつて」

僕は妖精の返事に肩を落とす。

「？　もしかして、お前あの時の子供か？」

突然、妖精が僕の顔を覗き込みながら言った。

「あの時のつて？」

僕は顔を上げながら聞いた。

「ええと、いつだったかな……。駄目だ、何年前か思い出せない」
妖精は首を傾げながら言った。

「何年前か前、初詣に来た時に、おもしろそうな願い事しなかった？
あまりにも面白かったから、叶えてやったんだけど……」

妖精は僕の顔を睨めつけるように見ながら言った。

こいつかつ！　僕のほんの出来心で願った事を叶えたのは！

そして、三年もの時間がたった後に女になった理由もわかった。

さつき妖精が言っていた、他人の記憶を変えていたのだろう。

「俺だ、たぶん……」

僕は小さな声で答えた。

「やっぱりか！　うわ、凄いな。運命の再開ってやつだぜ？　つて、
お前は俺の事、見えてなかったか」

妖精は手を叩いて喜んだ。

何が運命の再開だ！　この変人め！！
と、言うより……。

僕は飛んでいる妖精の体を掴んだ。

「なんで、俺の願い事を叶えた！」

「ええっ！」

妖精は大袈裟に驚いているような表情を作った。

「いいから、俺の願い事を叶えた経緯を教える。そこに正座して。
さもなくば……」

僕は妖精を京子の前に突き出す。

京子は妖精に微笑みかけた。

妖精はすっかり縮み上がってしまった。

「はい。教えます・・・」

賽銭箱の上に正座した妖精が、わざとらしく咳払いした。僕たち四人は妖精の話に耳を傾けた。

「あれはいつだっただろう。毎年正月、初詣に来る人間たち。『主』に使える俺たち妖精は、人間たちの願い事を叶えるために地上へ遣わされていた。」

だが、毎年のように来る人間たちは、受験合格！ 彼女欲しい！ 彼氏欲しい！ 五円がありますように！（なんちゃって。てへっ）とか訳のわからんことを毎年のように願いやがる。毎年同じことを一日中ずっと聞かされる。最初は真面目に願いを叶えていた俺も、そんな人間に嫌気がさして、不真面目になっていた」

こいつの話、長っ！ いつまで続ける気だ！

そつと僕は隣の直樹を見る。

なんと、直樹は立ったまま器用に寝ていた。

「そんなある日、一人だけ他の連中とは違う願いを持った奴が現れた。それが――」

「俺か・・・」

溜息をつく僕だった。

第二十九話 妖精との再会？（後書き）

時間の都合により、非常に気になるところで終わってしまったかと思えます！

申し訳ありませんでした！m（――）m

隼人「僕、現場にいるはずなのに、セリフが全くないよ・・・」

コウ「ゴメン、隼人！」

隼人「もう、読者も僕の存在忘れてるんじゃないかな？」

コウ「そんなに悲観的にならないで！」

隼人「お触りでもなんでもいいから、出番が欲しい・・・」

コウ「だから、ゴメンって！ ほら、最後のセリフ言わせてあげるから」

隼人「感想、評価、ダメだし等々、お待ちしてます・・・グスッ」

第三十話 いじられた記憶？

「そう。ええと・・・」

「葵だ」

「葵。お前が現れた」

「それで、俺の願いを叶えた、と・・・」

僕は頭を押さえた。

そして、隣で立ったまま寝ている直樹を肘で起こした。

「直樹、終わったぞ・・・」

僕は弱々しく言った。

京子と隼人は、落ち込む僕の肩に同時に手を置く。そして、「ドンマイ」とまたも二人で同時に言った。

ゆっくりと二人の顔を見た僕は、二人の頭をグーで叩いた。

「ドンマイってなんだ！ もつと言葉選べ！」

二人は頭を押さえて、その場にかがみこんだ。

「せっかく、願い叶えてやったのに不満そうだな？」

妖精が言う。

「ほんの出来心で思った願いを叶える必要なんてないんだよっ！」

僕は妖精に向かってデコピンをしたが、空を飛んで躲された。

「出来心？ まあ、強さの割に控えめな願いではあったが？」

溜息をついた。

「不満なのか。まあ、確かにその様子からすると、まだのようだしな・・・」

妖精はなぜか直樹の顔を一度だけちらりと見た。気になった僕は、直樹の方を向く。直樹はいつも通りの表情でいた。

「まだ、って？」

「んん？ ああ、そうか。俺はお前たちの記憶も少しいじっていたのか。なるほど、それなら、覚えている訳ないか」

妖精は一人納得したように言った。

「それに、俺がやったのは、お膳立てみたいなものだしな。あとはお前次第だったわけだ。・・・そうだな、もう少し手伝ってやるか」
よしつ、と妖精は手を叩きながら、僕の前に飛んできた。

「願い事は、男に戻りたい、だっけか？」

「ああ」

僕は小さく頷く。

「その願い、叶えてやってもいい」

「本当か？」

妖精の言葉を聞き、一瞬にして声が明るくなる。

「ただし、いくつか条件がある」

妖精は僕の前に手を突き出した。

五分後

「嫌だ！ 絶対に嫌だ！ 絶対にそんなことはしない！」

僕は妖精に向かって叫ぶ。妖精は困ったような顔をした。

「オイ、コラ！ なんて、お前がそんな顔をする！ 困るのはこっちだ！」

「何でそんなに嫌がる？」

「嫌なものは嫌なの！」

「いいじゃないか。減るもんじゃないんだし」

妖精はいやらしい笑みを浮かべた。

僕は目に涙を浮かべた。

「減るから！ 絶対に減るから！」

「何が？」

「何かが減るの！ そつ、気持ち的な何かが！」

僕は妖精の条件を拒んだ。というか、拒んで当たり前だ。なんで、そんな条件を僕が飲まなきゃならない！

「いいじゃん、別に。ほんの数秒のことだぜ？」

「ほんの数秒でも嫌なの！ もう、他の事なら何でも聞くからさあ！」

僕は懇願するように言った。だが、妖精はにやけた顔のまま、首を横に振る。

「駄目だ。他なんてものはない」

後ろの隼人は、妖精の要求に啞然としている。京子なんか、それを聞いた瞬間気絶して、近くのベンチに寝かされた。無理もないことだ。

だけど、直樹だけは違った。妖精の要求を聞いてもポーカーフェイスのままだった。

何か反応しろよ、この野郎！

「さあ、葵。どうするんだ？ この条件すら飲めないようなら、次の条件など俺は言わない。お前の願いも、夢に終わるぞ？」

「ちくしょう。人が下手に出ればいい気になりやがって・・・！」

「もう、面倒くさいから早くやつてくれない？」

妖精はついに欠伸までし始めた。

僕は怒りと羞恥に体を震わせる。

「だから、できないって！」

僕は隣に立っていた直樹を指さした。

「こいつとキスするなんか、絶対にできないよおおお！！」

そう、妖精の要求とは、僕と直樹がキスするところを見せろ、とかいう訳のわからない物だった。

しかも、それができないと次の条件は言わない、という理不尽付き。

（心は）男の僕が男とキスできるわけないだろおおお！

さらに五分後・・・。

「おい、妖精」

僕と妖精が口論を続けていると、ついに直樹が口を開いた。

「なんだ？」

「それは、葵の方からでないのだめなのか？」

「いいや、別にどちらからでもいい」

妖精からの返事を聞いた直樹は「そうか」と呟いた。

「ちよ、直樹。そうか、じゃない。何やる気になってるんだ！」

「お前がすぐに男に戻るには、これしか方法がないんだろ。別に、お前は目を閉じてればいい。すぐに終わらせる」

すぐに終わらせる。・・・いや、そういう問題じゃないんだって。

僕は涙目のまま直樹を見た。

「ほら、早く目を閉じる」

「でも、・・・俺のファーストキスうう」

僕の目から涙がこぼれた。

「いいから」

しぶしぶ、僕は言われるように目を閉じる。

仕方ないんだ。

これは仕方がないことなんだ。

僕が男に戻るためだ。

それに、自分の意志ではない。

直樹が、あの変態ポーカーフェイスが勝手にやったことなんだ。決して、僕の望んだことなんかではない。

僕は自分に言い聞かせるようにして、その瞬間を待った。
だが、いつまでたってもその瞬間は来ない。

なぜだ！ 早くしろよ！

心の中で何度か叫んだ。

目を開けようかと考えたが、すぐ近くにいた時のことを考えると怖くて、できなかった。

——カシヤツ。

・・・？

なんだ、今の「カシヤツ」ってなんだ！！

僕はすぐに目を開けた。

すると、携帯を片手に少し息が荒くなっている隼人がそこにいた。
「葵ちゃんのキス待ち写メ、ゲット！！ 明日から、待ち受けはこれだー！！」

隼人は何かをやりきったような顔で、その場に倒れた。僕は倒れた隼人にのしかかる。

「消せ！ 今すぐ消せー！！」

「あははっ！ あははは！」

既に隼人の耳には入っていないかった。

「直樹、お前も何で！」

「前川が記念に一枚、と」

「何の記念だー！！」

そのやり取りを、今まで面白そうな顔をして見ていた妖精が止めた。

「どうしても、やらないというのか？」

「もうヤダ。一回は覚悟したのに、今ので心が折れた・・・」

僕がそう答えると、妖精は溜息をついた。

「ああ、じゃあもういいよ。でもその願いを叶えるのは保留」

「保留？」

僕は聞いた。

「そう、本人たちはいじられた記憶に気が付いていないみたいだし、正月になったらまた来い」

「いじられた記憶？」

「そう、お前の願いを叶えるとき、少し記憶をいじらせてもらった。さあ、葵。お前はそれを思い出すことはできるのかな。思い出すことができれば、あるいは・・・」

「お、おい！」

妖精は背中の中の羽をはたかせた。飛ぶつもりだ。

「さらば葵。そして愉快的仲間たちよ。また会おう！」

妖精は寶錢箱の隅から、空へ飛んだ。・・・はずだった。

だが、突然僕の後ろからものすごいスピードで伸びてきた手にかまれていた。

「あれえ！？」

妖精は明らかに動揺している。

僕と妖精はゆっくりとその手の主の方へ向いた。

「いやあああああ！？」

妖精が悲鳴を上げる。

京子だ。気絶して寝ていたはずの京子が妖精の体を掴んでいた。

その目はうつろで、視線こそ妖精に向いていたが、どこを見ているのかわからない。

「直樹君とキスするのは、・・・私だー！！」

京子は妖精を思い切り空に投げた。まるで野球のボールの様にそいつは飛んで行った。

そしてお星さまになったとき・・・。

いや、お星さまになられたら困るよ！

第三十話 いじられた記憶？（後書き）

妖精「うわあああああああ！？」

コウ「んん？——ぐああ！？」

妖精「あ、『主』すみません！！」

コウ「いや、いいよ。それより、どんな帰り方してんの？」

妖精「アイツです。『ブラック萌え萌え京子』に投げられました！」

コウ「・・・京子、恐るべし！！」

一方その頃

隼人「あはははは！」

葵「隼人！早く消せ！！」

隼人「記念に一枚ぐらいいいじゃない」

葵「だから、何の記念だー！！」

直樹&京子「感想、評価、ダメだし等々、お待ちしています」

第三十一話 京子の決断

次の日の放課後、僕と京子は、二人きりで屋上にいた。段差に腰掛け隣に並んでいる。

「記憶をいじった」

それがあの妖精の言葉。

僕の記憶はどうやら、女になったときに一部を変えられたらしい。重要なのは、どこを変えられたか、ということ。

今の僕には、まったくなんの心当たりはなく。変えられた記憶の検討もつかなかった。

そして、もう一つ気になるのが「お前たちの」という言葉だ。俺が女になりたいと願ったとき、——中学一年生の時だが——

「は、まだ隼人とは知り合いではなかった。つまり、こいつは除外？」

隼人に言う「酷いよ、葵ちゃん。僕はいつでも一緒なのに」と言っていた。

いったいどこまでが本気なんだか・・・。

となると、あの時一緒にいた、直樹と京子ということになる。だが、「たち」が複数を指す言葉ではあっても、僕たち三人ということでは、ないかもしれない。

可能性が一番高いのは、僕とほとんど同じ記憶を持った直樹。でも、直樹も何もわからないらしい。

「変えられた記憶に気が付けば、何か変わるのかな？」

京子が首を傾げながら言った。

「わからない」

僕は溜息交じりに答える。

「でも、あの妖精の言い方からすると、何か大事なことがあるみたいだけど・・・」

「記憶を思い出すのって、大変なんじゃない？」

「ああ、俺もそう思うんだ。特に、忘れたんじゃなくて、変えられたものだからな。でも直樹は、そのうち思い出すんじゃないか、って言うってた」

「どうして？」

京子はまた首を傾げる。

「いじったってことは、元々あった記憶に何か手を加えたってことだろう。そのうち綻びるんじゃないか、って」

「でも、いつか、って・・・」

「そうなんだ。そうなるとしても、いつ綻び始めるかわかったもんじゃない」

それに、と続ける。

「あの妖精、正月になったらまた来いって言った。それまでに思い出さなければいけないってことだよな」

「うん。たぶん、そうだと思う」

京子は軽く頷いた。

その時、はっと僕の頭を何かがよぎった。

「なあ、京子」

「ん？」

「なんか、マヌケだな・・・」

「えっ！ 私、そんなにマヌケ!?」

京子はびっくりした様子でその場に立ち上がった。「違う、違う」と僕は顔の前で手を振った。

「正月になったらまた来い、って言葉」

「ああ、確かに」

僕たち二人は笑いあった。

二人が笑い終わった後、沈黙が訪れた。

居心地が悪い。

空気が重い。

京子は俯き、スカートの端を強く握っていた。

「なあ、京子？」

たまらなくなつた僕が、話を切り出す。

「俺をここに呼んだ理由ってなんだ？」

よく見ると京子は、口を真一文字に結んでいた。京子の体の震えが、緊張を僕にまで伝える。

「あのね、葵・・・」

そこで、京子は一度大きく息を吐いた。

僕は座ったまま、京子を見上げていた。スカートの端を握る京子の手に、さらに力が入っていた。

「葵は直樹君の事、好き？」

そう切り出した京子の顔は少し赤くなっていた。遅れて僕の顔も熱を帯びる。

「な、ない、ない！ そんなことないよ！」

「本当に？」

「ああ、本当だ！」

「じゃあ、嫌い？」

「いや、好きだよ。でも、それは友人として・・・」

「そうなの・・・」

京子は少し息を吐いた。

何か、言い表せない不安が僕の胸を絞めた。この会話には一体何の意味があるのか、それを探ろうとしてしまう。

京子の、友人の胸の内を探ろうとしている不快感。そして、自分に対しての嫌悪感が同時に押し寄せてきた。

それがわかっていても、僕は京子は何を考えているのか、知りたくて仕方がない。

僕はそれを知りたくて口を開こうとする。

だが、僕より先に、京子の口が動いた。

京子の口から出た言葉は、あまりにも小さな声でほとんど聞き取れなかった。

それでも、なぜか僕は口の動きで、京子は何を言ったのかわかった。

京子は幼い子供の様に微笑んだ。

「明日、直樹君に告白する。葵。邪魔、しないでね？」

心臓が一度、大きく鳴った。

第三十一話 京子の決断（後書き）

第三十一話『京子の決断』 如何だったでしょうか？

ついに京子が直樹に告白・・・！

そして「邪魔、しないでね？」と言った京子。

その言葉の意味とは！？

またもやシリアス展開？

次回、乞う御期待です！（なんちゃって♪）

感想、評価、ダメ出し等々、お待ちしております！

第三十二話 告白

「葵ちゃん。こんなことして、いいのかな？」

「うるさい。静かにしてろ・・・」

小声で聞いた隼人を僕は軽く睨んだ。

次の日の放課後、京子は直樹を学校の近くにある公園に呼び出した。

僕は隼人を呼び出し、二人の後をつけた。

気が付かれないように、かなり後ろから付いて行き、二人が公園のベンチに座ってから、すぐ近くにあった大きな木の後ろに隠れた。真横から二人の様子を窺う形になる。

ここからならば、ぎりぎり二人の会話が聞き取れるはずだ・・・。

二人はベンチに座ってから何も話していない。直樹はずっと、まっすぐ前を見て動かない。そんな直樹とは対照的に京子は、ずっともじもじとしていて、落ち着きがない。

「やめといた方がいいんじゃない？」

隼人が僕の肩を叩く。だが、僕はそれを無視した。隼人は小さく溜息をついた。

「まあ、葵ちゃんがいいって言うなら、僕はいいけど」

悪いな、と胸の内で呟いた。

でも、どうしても気になる。

京子のあの言葉。

「邪魔、しないでね」

そして、あの微笑み。

子供の様に無邪気な微笑み。

どこにも、悪意など感じられなかった。

だからこそ、気になる。
なぜ僕に宣言したのか。

別に、言わなければ、僕にばれることはない。なのに、京子はあえて言った。

何のために？

親友として？

それとも幼馴染として？

そして、あの言葉の意味は一体……。

様子を窺っていると、近くで遊んでいた子どもたちのボールが、京子の足元に転がってきた。

京子はベンチから立ち上がり、ボールを拾い上げて子どもに笑顔で渡した。

「お姉ちゃん、ありがとう」

「どういたしまして」

京子は子どもの頭を撫でた。子どもは少し顔を赤らめながら、他の子どもたちの輪に戻って行った。

それを見送った京子はくるりと向きを変え、ベンチまで歩こうとした。

「きゃ——！」

——ズシャア！

京子は何もないところで転んだ。一瞬、駆け寄りそうになりながらも、僕は何とか踏みとどまった。

なんとという鈍臭さ。助けてあげたいけど、ここで気づかれたら大変なことになる。

直樹が京子に近づき手を貸した。

「大丈夫か？」

直樹が聞く。

「えへへ、大丈夫」

京子は恥ずかしそうに微笑んだ。

〽十分後〽

長い、長いよ。

ずっと二人とも黙ったままで、何してんの・・・？

いつまで待たせる気だ！

あれから一向に京子が何かのアクションを起こす気配が感じられない。

二人はずっと無言のまま、ベンチに腰かけていた。

僕は痺れを切らしかけていた。うん、自分でもわかるほどに。

一向に進展しない話、というのは苦手だ。

歯ぎしりまでしていた。

「それ、聞こえるんじゃない？」と隼人に注意された。

「あれ？」

隼人が小さくつぶやく。

視線は二人の所へ。僕も二人の方を向いた。

「京子。話したいことって？」

「う、うん・・・」

ついに、状況が動いた。

僕の心臓は徐々に速くなり、胸が締め付けられるような痛みまで出てきた。

どうしてこんなに痛いんだろう？

この痛みの意味はあるのか？

僕は無意識に胸元を強くつかんでいた。

唇を噛んで、二人を見つめる。

「葵ちゃん・・・」

後ろの隼人が僕に声をかける。僕は隼人の方を向いた。隼人は微笑んでいる。

「リラックス」

「うん・・・」

隼人の言葉で、胸の痛みも和らいで、少し楽になった。

僕たち二人は京子の次の言葉に聞き耳を立てる。

京子の口が開く。

でも、言葉は発せられない。

時間が流れる。

三十秒？

一分？

いや、もしかしたら一秒しかたっていないのかもしれない。

でも、僕にはそのたった数秒間が、とんでもなく長い時間にも感じられた。

僕の緊張は最高に高まり、心臓の音も高まる。隼人に聞こえてしまっているのかと思うほどに・・・。

このまま、心臓の音が高くなりすぎて、直樹たちに聞こえたらどうしようか、という心配までしていた。

「直樹君、私。あなたのことが好きです・・・」

僕は何とも言えない溜息をついた・・・。

第三十二話 告白（後書き）

ついに、京子が直樹に告白！

直樹の返事は・・・。

そして、京子の真意とは・・・！

（→コレ、前回の後書きでも言っていました。引っ張ってすみません
m（――）m）

まだ続く？シリアス展開・・・。

感想、評価、ダメだし等々、お待ちしています。

第三十三話 真意。そして二度目の告白

「直樹君、私。あなたのことが好きです・・・」

ついに京子の口から、直樹への告白の言葉が出た。京子は頬を染め、恥ずかしそうに下を向く。

直樹はいつも通りの顔で京子を見ていた。雰囲気から、直樹も少し緊張しているのがわかる。

僕の視界には地面が広がっていた。気が付かないうちに、俯いていたらしい。

「大丈夫？」

隼人が僕に聞いた。

「大丈夫？ それ、何に対して？」

僕はきつい口調で返した。

実際にそうだ。『大丈夫』、その言葉が何に対して言われたことなのか、僕には理解できていなかった。

そのため、哀れむような（恐らく、隼人自身にそんな気は毛頭ない）言葉を僕にかけた隼人に、苛立ちを感じていた。

完全な八つ当たりだ。

でも、僕はそれが何に対しての八つ当たりなのかすら、理解できていなかった。

もう、ぐちゃぐちゃだ。頭の中が訳の分からないことになっている。何がなんなのか全くわからない。

リラックスして、和らいでいたはずの胸の痛みも、また強くなっ

ていた。

どうしてこんなに痛いんだろう？

「ゴメン隼人・・・」

隼人は黙ったまま、僕を心配そうに見ていた。

僕は罪悪感から目を逸らし、直樹たちの方を見た。

「・・・それも、いいのかもな」

直樹が口を開いた。何が「いい」なのか僕にはわからない。

ただ、その言葉は僕を不安にさせるには十分だった。

京子の顔が上がる。

「でも・・・」

「？」

「悪いけど、俺には京子のことを幼馴染にしか見えない・・・」

直樹は申し訳なさそうな顔をして言い、京子に頭を下げた。

「そう・・・」

京子は笑った。

そして、空を見上げた。

「あのね、直樹君。私、直樹君がそう言うの、わかってたんだ」

ベンチから立ち上がり、直樹の正面、少し離れたところに立った。

「だって、直樹君。私の事なんて全然、見てないんだもん。だから、今日の告白は、ただ私の気持ちを伝えられたらって思ってた・・・」

直樹は黙ったまま、京子の話を聞いている。

「なのに、直樹君。返事を待たせるんだもん。それに、思わせぶりなことまで言って・・・。一瞬ちよっと期待してしまったんだよ？」

目の端に滲み出た涙を拭う。

「すぐにフラれて。それで、気持ちを切り替えるつもりでいたの。わかる？ わからないよね。私だって変だなって思う」

無邪気に笑う京子。僕にはその姿が痛々しく見えた。

・・・はずだった。

まさか、この後にあんなことが起ころうとは思ひもしなかった。まあ何というか、多少、僕の気も楽になったから結果オーライ、というべきなのだろうか？

「告白して、フラれた後に、こんなこと言うの変だけど、聞いてくれる？」

直樹が無言でうなずくと、「ありがとう」と京子は返した。

「私ね。直樹君のことが好きだった。ホントに好きだったんだ。昔から、今までずっと。でもね、他にも気になる人がいるんだ・・・。二股ってやつ、なのかな？」

え・・・？

僕、そんなこと聞いたことないよ？

「最低だよね？」

京子は自嘲気味に笑う。「いや・・・」と直樹は言葉を詰まらせた。突然の告白に、困惑しているのだろう。

「いいよ、私だってわかってる。気持ちを切り替える、って言ったよね？ 直樹君のこと諦めて、その人一筋になろうかと思っていたんだ。一筋、と言っても、まだ『気になる人』っていうだけなんだけどね」

京子から語られる真実に直樹も、僕たち二人も驚きを隠せない。

まさか、『邪魔しないで』って・・・。
フラれる邪魔をするなってこと！？

今までの僕の心配は一体・・・。

僕は力が抜けて、その場に座り込んでしまった。

「直樹君、怒らないの？」

「別に、お前が誰を好きになろうが、お前の自由だ。何人同時に好きになろうとも、俺はそれを否定するつもりはない」

「ありがとう。そういうトコ、好きだよ」

京子は微笑んだ。

「それに・・・」

「？」

「告白されたのは、初めてだったし。う、嬉しかったぞ？」

直樹い！

お前、思いつきり照れてるじゃないか！！

もう、いいや。——帰ろう。

「その、『気になる人』って・・・？」

「直樹君も気になるんだ？」

「まあ、幼馴染の助けになれるかもしれないしな」

「いいよ。直樹君には教える。まだ、葵にも言っていない。私から言うから、黙っててね？」

やめた。これは気になる。

これを聞いたら帰ろう。

隼人にも目配せしておいた。

「私の気になっている人は――」

直樹の顔に緊張の色が浮かぶ。

僕は固唾を飲んで見守った。

「――前川君、なの」

一瞬、僕は自分の耳を疑った。

今、「前川」って言った？

直樹も予想外の答えだったらしく、口をぽかんと開けている。

京子はまたも、恥ずかしそうに下を向いた。

僕は恐る恐る後ろを向いた。そこには隼人がいる。いったい、どんな反応をしているのだろうか。

「嘘やん・・・」

なぜ関西弁！？

「隼人？　おい、大丈夫か？」

隼人は完全にフリーズしてしまっていた。

「隼人？」

「あ、葵ちゃん。僕、どうしよう・・・」

なぜか頬を染めている隼人だった。

第三十三話 真意。そして二度目の告白（後書き）

こんばんは。 コウです！

はい、ここで質問です！

今回の章、「なぜそうなった！」と叫んだ人？

・・・はい。全員ですね（泣）

この二人の行く末は、また後日・・・。

『願い事』は「定時更新」を掲げている割に、

最近、時間に遅れるわ、更新できない日はあるわ・・・。

と非常に申し訳ない事態に陥っています。

なので、状況が落ち着くまでの一定期間「定時更新」の言葉を取り消そうと思います。

詳しくは、活動報告『お詫びm（――）m』を読んただけたらと思います。

そして、今後の投稿の休止予定です。

8月29日～9月1日の間、連載を休止いたします。

その期間は部活の合宿で、家にいないので更新ができないのです。

お待ちいただいている方には申し訳ないことをしています。

どうかご容赦を・・・。m（――）m

感想、評価、誤字脱字の指摘、その他作品への意見など寄せていただけると嬉しいです。

第三十四話 僕のことを忘れないで・・・。（前書き）

長い間、お待たせしました！

本編とは関係ありませんが、後書きにあのキャラが友情出演です♪
知らない人はすみませんm（―――）m

第三十四話 僕のことを忘れないで……

後日、京子に話があると言われ、また彼女の話に付き合うことになった。

因みに隼人は、あの後から学校を休んでいる。
あれだ。恋の病というやつだ。……たぶん。

話の内容は思った通り、先日の直樹への告白と、隼人についての事だった。

もちろん京子は、僕と隼人が一部始終を見ていたことを知らない。そのため、京子なこと細かく僕に説明してくれた。

僕は一度見てしまった話を、もう一度聞くことになってしまったのだ。

しかし、「見ていた」とは何があっても言えない。

僕は必死に京子の話を黙って聞いているのであった。

京子が隼人のことを気になり始めたのは、つい最近のことらしい。なんでも、お触りなどは除いて、僕が隼人に気がないことを知ってなお、隼人は僕のことをずっと好きでいる。その一途さ、ピュアさにトキメキを感じたとか……。

「私に振り向かないってことはわかるよ？ でも、気になるんだよね」と京子は笑った。

いや、振り向かないことはないぞ。

実際、隼人が学校を休んでいるのは、京子の事で悩んでいるかららしい。心配になって、家に様子を見に行った僕に、隼人は打ち明

けてくれた。

「僕には葵ちゃんという、心に決めた人がいるのに……。そのはずなのに。僕は一体どうすれば……」

いや、僕は全く受け止めてないけどな。

夏の暑さのせいで、半そで&スカートを限界まで折って短くしている状態でさえ、汗をかくと言うのに、隼人は長袖長ズボンにダウンを着込んで、羽毛布団までかぶっていた。

完全に病気だ。うん、やっぱり恋の病だ。

京子は最後に、何度も僕に謝った。

「別に謝るようなことしてないだろ？」

僕は京子にそう言ったが、彼女は謝ることを止めようとしなかった。

仕方なく、僕は京子を優しく抱き寄せて、頭を何度も撫でてやった。

僕は、このとんでもなく不器用な二人の今後を、暖かく見守ってあげようと思う。

で、全く進展しない、僕の今の状態なんだけど……。

「俺は一体どうすればいいんだ〜！」

「あれだな。覗いていた罰が当たったんだ。そうだ、それに間違いない」

「そんなわけあるか！ 時系列どう考えてもおかしいだろ！」

僕の隣で、まさかの何の感情もこもらない言葉を吐いた直樹。僕は思い切り直樹の足を踏みつけようとしたが、あっさり躲されてしまった。

因みに、直樹には僕と隼人が覗いていたことを正直に話した。それに対し、直樹は「そうか」の一言だけ。

せめて、もつとこう、怒るとか、恥ずかしがるとか、してほしかった、と思う僕は危ないのだろうか？

「ねえ、直樹君？ あたし、本当に悩んでいるのよ？」

僕は直樹の前に立ちふさがった。そして胸の前で手を合わせて、上目づかいでそう言った。

「お前、まさか中身まで女になったのか！？」

直樹が目を見開き、僕に詰め寄る。その必死さがあまりにもおかしくて、耐えきれなくなった僕は、思わず吹き出してしまった。

「ははっ、あははは！ 冗談に決まっているだろう？ なんだよ、その必死そうな顔？ お腹痛いよ〜！」

僕はお腹を抱えて笑った。途端に直樹は顔を膨らませていた。その顔がなかなか可愛く見えたのは、黙っておいた。

「お前な、冗談にしては質が悪すぎだぞ。ああ、一瞬本気で手遅れかと思った……」

直樹は、ふう、と力なく溜息をついた。

「お前、もう少し自分で考えたらどうなんだ？」

「考えてるよ。でも、何にも思い浮かばないから、こうしてお前に聞いているんだろう？」

僕は先々歩いて行こうとする直樹を、小走りで追いながら言った。
くると直樹が向きを変えた。突然だったので、僕は止まりきれず、彼にぶつかった。

「コラ、急に止まるな！」

「そう言うと思ったよ」

「どれに對してだよ？」

「お前がぶつかる前の言葉に對して」

「じゃあ、ぶつかった後の言葉には？」

「何も思っていない。むしろ、ぶつかるな。胸が当たる」

「頬染めて言うな！」

僕は胸を両手で庇いながら後ずさった。

第三十四話 僕のことを忘れないで……。 (後書き)

コウ「お久しぶりです!」

葵「一週間ぶりです!」

コウ&葵「長い間待たせてすみませんでした!」

コウ「ところで、文章の雰囲気変わった気がする……」

葵「確かに……。気のせいだといけど……」

コウ「『AS』の方も雰囲気変わった気がするんだよね。ミズキは後書きに顔出してくれないからわからないんだよね……」

ミズキ「呼びましたか?」

コウ&葵「うわあ!?!」

ミズキ「何ですか。人がせつかく来たというのに、化け物を見るような目をして?」

コウ「いや突然の事態にビックリして……」

ミズキ「ふう……。それじゃあ、顔は出したので、僕はこれで失礼します」

コウ「……………」

葵「行ったな……………」

コウ「うん……………」

ミズキ「感想、評価、誤字脱字の指摘、その他作品への意見など寄せていただけると嬉しいです。あ、『AS』の方もよろしければどうぞ。え? 宣伝じゃないかって? やだなあ、僕がそんなことするはずないじゃないですか(棒読み)」

第三十五話 藁〃やつの髪

「なあ、頼むよ。何かいい考えを出してくれ。親友だろ？・・・」
僕はさすがのように直樹を見つめる。

「都合のいい時だけ親友とすがってくる奴は、親友と思いたくない」
「都合のいい時だけって・・・」

「じゃあ、お前が何か俺にしたことはあるか？」

僕は記憶を巡り、何か直樹に貸しがないかを探す。だが、思いつくのは借りばかり。僕は自分の情けなさに溜息をつく羽目になった。
「ないな・・・」

僕は一人項垂れた。

「そらみる。まあ、考えが——」

「いや、あつた！ あつたぞ！ お前にしたこと！ 胸揉ませてや
つただろう！」

一瞬にして辺りが静まり返った。というより、周りには誰もいないので、そういう空気が流れた、ということだ。

直樹はかわいそうなものを見る目で、僕を見ていた。

「な、なんだよ！ 忘れたとは言わせないぞ、俺が女になった日の
ことだ！」

「いや、それは覚えているが、お前・・・」

直樹は頭を抱えるようにして唸った。

「それは借りとは言わないような気が・・・」

「うるさい。お前が揉んだんだからな。悪いのはお前だ」

「ここに痴女が一人」

「だゝ！ お前がやったんだろが！」

「どうでもいいけど、女が揉ませるとか、やったとか言つな」

「俺は男だ——！！」

「とりあえず、記憶を変えられたのなら、お前の記憶や思い出に残っている場所を訪れてみよう。そうすれば、何か思い出していくかもしれない」

「そんなので、記憶を取り戻せるものなのか？」

僕は真剣な表情で聞いた。

「要は綻びさえ見つければいいんだ。綻びさえ見つければ、あとはそれを引つ張るだけで、徐々に思い出していくだろう」

「それ、なんか根拠はあるのか？」

「ない」

「ないのかよ！」

僕は直樹にツツコミを入れようとしたが、やすやすと躲かれてしまった。

最近、なんかツツコミを回避されることが多くなってきた気がする。

「もしや、こいつ、ボケるタイミング見計らっているのか？」

僕は疑惑の目を向けた。

「俺はいつも大真面目に答えているつもりなんだが・・・」

「何で！？　なんで俺の考えていることがわかった！」

「なんか、そういう目をしていた」

「くう・・・！　こいつに目だけで考えていることを悟られてしまふとは・・・！」

「とにかく、何もせずにじっとしていて、お前の願いが叶わないよりはましだろう？　可能性があるなら、それにすがれ。藁でも何でもつかんで見せろ」

直樹は僕の肩を持って言った。その表情は凜々しく、何となく直樹が頼もしく見えてしまう。

僕はなぜか、赤くなる顔を背けた。

なんだよ！

ちよつと頼もしく見えただけじゃないか！

それなのにこんなに緊張するのって変だ・・・！

僕はどこがおかしいのか？

もう、なんか嫌になっちゃおう・・・。

「ああ、わかったよ。じゃあ、藁を掴ませてもらおう」

僕は苦し紛れにそう言っ、直樹の髪を掴んだ。

「それは藁じゃない」

「冷静に突っ込むな！」

既に夏休み。

学校の前に僕は一人で立っている。ここが待ち合わせ場所なのだ。

照りつける日差しは、僕の大敵だ。

日焼け止めを全身に、大量に塗りたくって、今ここに立っている。

日焼けはしたくない、だって痛いんだもの。

決して、女の子だから、肌は白くなりたい、とか思ったわけじゃない。

真っ白なワンピースに、赤いリボンのついた麦藁帽子をかぶった僕は、時間を過ぎててもまだ現れない友人を待っていた。

因みに今日の僕のファッションは、明日香姉さんが選んだものだったりする。

僕の後ろには、既に他の二人の友人が来ている。

五分後、待っていた友人、直樹が現れた。

第一声が「京子と隼人も呼んだのか・・・」だった。

一瞬、イラつとした僕だが、直樹のなぜか少し残念そうな顔を見ると、何も言えなくなっていた。

第三十五話 藁〃やつの髪（後書き）

葵 「アレだな。ようやく俺の記憶のほころびを探しに行くんだろ？」

コウ「そうそう、ようやくって感じだよ」

葵 「なあ、俺、前から思っていたんだけど、引っ張りすぎじゃない？」

コウ「うん、そうかもしれない」

葵 「解決策とか、ないの？」

コウ「あるには、あるよ。一話をもっと長くすればいい」

葵 「じゃあ、なんでしないの？」

コウ「たぶん、それをする、更新スピードがかなり落ちる」

葵 「え？ なんで？」

コウ「物語の情景は出ているんだ。あとはそれを打てばいいだけなんだけど・・・」

葵 「？」

コウ「なぜか指が速く動かない・・・」

葵 「何だそれ・・・」

コウ「こっちが聴きたいよ」

明日香「感想、評価、誤字脱字の指摘、その他作品への意見など寄せていただけると嬉しいです。それでは、また、次話で♪」

第三十六話 すれ違い

「で、……。なんで、この二人がいるんだ？」

直樹は、京子と隼人を順に見ながら言った。

「京子はまだわかる。記憶の相違点を探すのに役立ってくれるからな。でも、前川は……」

僕はふつと鼻を鳴らし、直樹に手招きした。耳を貸せと言ったつもりだ。

だが、直樹は耳を僕に近づけようとはせずに、あるうことが、顔自体を僕に近づけてきた。

「わあっ!!」

突然の出来事に僕は後ろに跳ぶ。

もう少しで、お互いの顔が触れ合うところだったじゃないか！

「なぜ逃げる？」

「近いよ、バカ！」

「お前が手招きしたんだろ」

「顔を近づけるとは言っていないだろ！」

直樹はムスツとした顔で僕を見た。

僕はもう一度手招きし、「耳、貸せ」と言った。

「つまりだな——、お互い気になっっているんだから、もっと仲良くなれる場所があった方がいいだろうと思って……」

僕は口元を隠すようにして、直樹にささやいた。なぜか途中で直樹が変な動きをする。

「どうした？」

「くすぐりたい」

こいつは……！

「真面目に聞く気あるのか？」

僕が耳元から離れ、少し怒ったように言つと、直樹は首を縦に振った。

そして、京子と隼人を順番に見て、「なるほどな」と呟いた。
二人はそれを聞き、お互いの方を見た。目線が合って数秒。今度はお互いに急いで、逆方向へ向いた。心なしか、二人の顔が赤くなっているように見えた。

なんか甘ったるいな。見てるこっちが恥ずかしいわ。

僕も一度でいいから、見ている奴が恥ずかしくなるようなぐらい、甘ったるい状況に陥ってみたいかも……。

そう思いながら、ちらりと直樹を見た。

よく考えると、今僕って女の子なんだよな……。
となると相手は……。

やっぱり、何も知らないやつってというのは嫌だし、直樹になるのかな？

状況は、やっぱりこう――。

――はっ！？

なんだ、今の？

なんなんだ、今の？

駄目だ。今のは絶対に駄目だ。

僕は今、絶対に合ってはならないことを想像した……！

ああ、忘れろ。忘れろ僕の頭……！

僕が首を横に思いつき振っていると直樹が首を傾げた。
僕が「お前のせいだ……！」と言つと、さらに首を傾げた。

「それでさ、なんでここに来ようと思ったわけ？」

僕は隣の直樹を睨みながら言った。

直樹が連れて来た場所。それは、小学校のころ、三人（隼人以外）でよく遊んでいた公園。

意外と大きな公園で、遊具の代名詞と言っても過言ではない滑り台やブランコを初めとする、たくさんの遊具があった。

なんやかんやで、大きなジャングルジム等もあるので、小学校を卒業するまではお世話になっていた。

「妖精（？）はお前の記憶を変えた、とは言ったが、いつどの記憶を変えたかは言わなかっただろう？」

言われてみるとそうだ。

「確かに」

僕は、「うう・・・」と唸った。

「なら、思い出の場所をすべて回っていけば、いつかはたどり着くんじゃないのか？」

「お前らしくない、行き当たりばったりな方法だな？」

僕は鼻で笑ってやった。

「別に俺を笑うのはいいけど、困るのはお前だぞ？」

・・・そうでした。

「うわあ、僕完全にアウエーだよ。こんなところ、来たの初めて。思い出なんて何一つもないや・・・」

隼人が引きつった笑みを浮かべながら言った。

むう・・・。やっぱり、隼人を連れてきたのは失敗だったかな？

「大丈夫、今から一緒に作ろう？」

「うわあ、京子の奴、また甘い言葉を・・・。」

恐らく京子の場合、これが何も考えずに口から出ているのだから怖い。

「う、うん」

僕、もうここから離れてもいい？

僕は一人、木陰のベンチに行こうとした。その後ろを直樹が付いて来る。

「なに？」

僕は振り返って聞いた。

「別に・・・」

「なら、付いて来なくたっていいだろ？」

「別に付いて行ってもいいだろう？」

「この屁理屈大魔王が——！」

僕が唸ると直樹ははつとしたように、そのあたりに生えていた、猫じゃらしを取ってきた。

「ネコか？ ネコは好きだぞ？」と言いながら、満面の笑みを浮かべて僕の目の前で揺らした。

「誰がネコだ！ 誰が！」

僕は直樹から猫じゃらしを奪い取り、適当な所に投げた。草である、もちろん投げても飛ばなかった。

「なんだ、可愛がつてやろうと思ったのに・・・」

——ズキュン！！

あれ、なんだ？

今の何だ？

なんだ『ズキュン！！』って？

なんで僕が直樹の残念そうな顔を見て、『ズキュン！！』ってならないといけないんだ！

それともあれか？

『可愛がつてやるう』か？

なんだ、可愛がつてやるって？

女の子（僕は男だけど）を可愛がる？

つまり、あれか！

ピーーーーーー。 （自主規制）

プシュ~~~~。。。

——— って！

「僕はMじゃない！！」

僕が叫ぶと直樹は口を開けたまま僕を見ていた。

「お前・・・何言って」

「えっ！？ 違うの！」

「葵、直樹君？」

「うわぁ！」

突然、京子に後ろから声を掛けられ、僕は飛び上がってしまった。

「もう、どこへ行くのかと思ったよ」

隼人は手を腰に当てて言った。

「いや、悪い」

直樹は手を振りながら二人に近づいた。

「って、葵ちゃん鼻血！」

京子が慌ててハンカチを僕に渡した。

「でも、久しぶりね。高校生になってまで、この公園に来るとは思わなかったよ」

京子が笑いながら言う。

「そうだよな。誰かさんのせいで・・・チッ」
直樹、舌打ちやめる。

僕だつてみじめな思いしてるんだ・・・。

僕は必死に思いついた話題に切り替えようと『それ』を口にした。
「そ、そうだな。そういや京子。覚えてるか？ お前ここでよく、
近所のがき大将に人形取られて、泣いてたよな？」

僕は笑いながら言った。

「え・・・？」

京子はそれを聞いた瞬間。とても悲しそうな、嫌な顔をした。

——しまった。わざわざ、そんな嫌な思い出に触れる必要も
なかったのに・・・。

なんて嫌なやつなんだ、僕は。

「ねえ、葵——」

「うん？」

僕は何を言われるのかドキドキで、冷や汗をかいていた。
そして、京子の次の言葉で、僕は一瞬にして凍りついた。

「——この公園で、人形取られて泣いていたの、葵だよ？」

——え？

第三十六話 すれ違い（後書き）

遅くなってすみませんでしたm（――）m
葵が暴走してますね。w

コウ 「明日香姉さん、出番ないね？」

明日香 「それ、気にしてる人にいう言葉？」

コウ 「ごめんなさい！ ちゃんと後で出番あるから許して！」

明日香 「あら、そうなの？ それよりさ、葵よりあたしを主人公に
使いなさいよ」

コウ 「男勝りな明日香姉さんの恋愛事情を、こと細かく書けと？

――むぎゅう！」

明日香 「葵より楽しくなるんじゃない？」

コウ 「いや、各所からブーイングの嵐が来るかもしれない。だからやめとく」

明日香 「……………」

葵 「感想、評価、誤字脱字の指摘、その他作品への意見など寄せて
いただけると嬉しいです」

第三十七話 相違点

京子の言葉は、僕を一瞬にして凍りつかせた。

「葵だよ？」

何度も、何度も、その言葉が僕の頭の中を回る。

僕が人形を取られて、泣いていた？

どうということだ？

「え、だって京子・・・」

「うん、私もたまに悪戯されていたけど、人形を取られていたのは、葵」

間違いないというように、京子は言い切った。

それが、僕を余計に混乱させる。

じゃあ、今、僕の頭に浮かんでいる子供は？

人形を取られて、泣いて、それを直樹が取り返し、泣いている子に渡す。

この子供は、僕なのか？

「直樹君、覚えていない？」

「・・・いや、——」

突然、風が吹いた。

僕は麦藁帽子を押さえようとしたが、少し遅かった。風に吹かれ、僕の頭から離れた帽子は、ふわりと空に浮かんた。

「あ——」

僕は帽子を追いかけてとした。

それより早く、直樹が動いていた。

直樹は、帽子を目がけてジャンプする。そして帽子の端を掴み、着地した。

直樹は麦藁帽子を僕の頭に被せ、ぽんぽんと叩いた。

「ありがとう」

僕は自分の鈍臭さに、少し顔が熱くなったが、直樹の目を見て、お礼を言った。

僕が言い終わる前に、直樹は目線を僕から逸らした。どこか決まりの悪いような顔をしていたと思う。

「おう」

直樹はいつもの様に、そっけなく返事する。

目を逸らすのも、いつものそっけない態度の延長だったのだろうか？

僕は直樹をじっと見ていた。

「葵、――」

直樹が口を開く。

「？」

「体調悪いみたいだ。悪いけど帰らせてくれ・・・」

直樹は申し訳なさそうに言った。

帰宅部とは思えないジャンプを見せられた後だったので、僕は驚いた。でも、直樹の表情は曇っていたので、本当なのだろう。

「大丈夫か？」

「ああ、たぶん大丈夫だ」

「顔色、悪いぞ」

僕が直樹の顔を覗き込むようにすると、直樹はまた視線を逸らせる。

一体どうしたんだ、こいつ。

その後、すぐに解散して、僕たちは帰路に着いた。

「送っていく」と言った僕を「必要ない」と直樹は断った。結局、帰り道が同じなので、僕たちは途中まで一緒だった。

そして、お風呂場。

肩までお湯に浸かると、自然と声が出る。

夏にしては少々お湯の温度が熱い気がするけど、それがまた気持ち良かったりする。

「あいつ、大丈夫かな」

突然、「体調が悪いから帰る」と言った直樹が心配でならない。

あいつは、小学校から今まで、ずっと学校を休んだことがない。

体が丈夫なはずのあいつが、口に出すほどなのだから、よっぽどのことなのだろう。

「大丈夫、とは言ってたけど」

僕は口をお湯に浸け、ぶくぶくと言わせた。

今日は、ずっと直樹の様子がおかしかった。なにか言ってくれれば、僕にだってできることがあるのに……。

「相違点、か・・・」

俺は自分の部屋で一人、物思いにふけていた。

体調が悪いのは嘘だ。三人には申し訳ないと思う。突然、ひらめいてしまったのだ。

京子の言ったことが本当なら、それが相違点ということになるのか。

実際、俺にもそんな記憶はなかった。俺が覚えているのは、悪戯されていた京子を庇っていたことぐらいだ。もしかすると、ただ単に、俺たちが忘れているだけなのかもしれない。

でも、キツカケはつかんだ。

そう思いたい。

京子の話を聞いて、一つの仮説（いい言葉が見つからないので『仮説』としておく）が思い浮かんだ。だが、それが正しいとは限らない。だから、ここでその『仮説』については触れないでおく。

駄目だ。あいつのはにかんだ顔が離れない。

俺は腰を上げ、机に置いてあった携帯電話を手に取った。

葵

0 9 0
× × × × × × × × × ×

俺は少し迷ったが、通話ボタンを押した。

呼び出し音が流れる・・・。

——ガチャ

（直樹？ 体調は大丈夫なのか？）

「ああ、大丈夫だ。ところで——」

俺は、「体調が悪い」と嘘をついた罪悪感に苛まれながら、葵と話をしていた。

第三十七話 相違点（後書き）

隼人 「空気になってきてる・・・」

明日香 「大丈夫。あたしなんか、名前あるのに、この出番の少なさよ？」

隼人 「うう、明日香さん・・・」

明日香 「一緒にがんばりましょう？」

隼人 「はい・・・！」

コウ 「うわっ。傷の舐め合い・・・！？」

隼人 & amp; 明日香 「お前のせいだろ！！」

コウ 「か、感想、評価、誤字脱字の指摘、・・・その他作品への意見など寄せていただけると嬉しいですよ・・・ガクッ」

第三十八話 白きデブネコ

お風呂から上がった僕は、バスタオルで髪を拭きながら、鏡を見ていた。

く
♪

僕の携帯電話が鳴る。

確かこの曲は・・・直樹か！？

僕は急いで携帯電話を取り出し、画面を見る。

直樹（笑）

やっぱり直樹だ。

通話ボタンを押す。

「直樹？ 体調は大丈夫なのか？」

（ああ、大丈夫だ。ところで、京子の言っていた人形。あれ、探したか？）

「いいや、まだだ・・・」

（今すぐ探せ）

「何で？」

（京子の思い違いか、俺たちの記憶にない出来事なのかを調べるためだ）

「え、俺たちって、・・・。お前も覚えてなかったのか？」

「ああ、相違点が見つかるかもしれない」

「ということは、どこの記憶が変えられたのかわかって、元の記憶

を思い出し、あの妖精に一泡吹かせた上に、俺の願い事が叶うって
ことか!？」

（・・・なんか、余計なものまで混ざってなかったか？）

「気のせいだ。それより、そういうことであっているよな？」

（だいたい、な・・・でも、そう簡単に行くとは限らない）

「・・・わかった。少し待って」

（? どうして?）

「服、着てないから」

（お前、そういうことを男に言うな。想像してしまうだろう）

「あ、・・・!？」

顔が熱くなった。

「やめて! 想像するのやめて!」

（ヤダ、止めない）

携帯越しにくすぐすと笑う声が聞こえてくる。

「~~~~~!」

（無防備な発言をしたお前が悪い）

「後で、覚えとけよ!」

（ああ、ずっと覚えておいてやるさ）

「それは覚えなくていい!」

叫んだ勢いに任せて、僕は電話を切ってしまった。

気づいた時には既に遅く、携帯電話の向こうからは、何も聞こえ
なくなっていた。

あ・・・。

まっ、いつか。

からかうあいつが悪いんだ。

せいぜい後悔してろ、変態ポーカーフェイス!

・・・で、あいつが電話掛けてきた理由って、何だっけ?

僕は部屋に戻り、ベッドに倒れ込んだ。

あれから、直樹から電話は掛かってこない。

あいつめ、なんで掛けなおしてこないんだ？
用があつたのはあいつだろう。

・・・もう少しだけ待ってやるか。

何分待ったかわからない。でも、いくら待っても直樹から電話は掛かってこなかった。

あいつ、もしかして、また体調悪くなったんじゃないだろうか？
大丈夫だ。——なんて言っていたけど、本当はやせ我慢だったとか？

・・・少しだけ。ほんの少しだけ心配になる。

こっちから、電話を掛けてみようか。

どうしよう・・・。。。。。

僕は自分自身の煮え切らない態度にイライラする。

何をためらう必要があるんだ？

近くにあった何かふわふわもこもことした、小さな物体を手にとった。

お腹の上に乗せてそれを、ふわふわしたものゝ撫でまわる。ちよつと、落ち着く・・・ような気がする。

僕はそれを胸の位置まで持つていき、両手でギュツとした。

「ふかふか」。・・・って、今さらだけど、なにこれ？」

僕はベッドから起き上がり、今まで抱いていた物体を見る。

「あ・・・！」

ふわふわもこもこの正体。それは可愛らしい顔をした白いデブネコの人形。京子が言っていた、あの人形・・・。

僕はさっきまでの葛藤のことなど忘れ、直樹に電話を掛けていた。

第三十八話 白きデブネコ（後書き）

明日香「最近の毎回の話の終わり方ですが、皆様、引っ張るような
終わり方にイライラしていませんか？ 他にも、毎回の話の文章
量が少ないから、もっと長くしてほしい、という方はいませんか？
もし、いらっしゃるようでしたら、コウまでお申し付けください。
感想欄でなくてもかまいません。活動報告のコメント欄、もしくは
コウ宛てにメッセージを送ってくださいな。」

それでは、感想、評価、誤字脱字の指摘、その他作品への意見など
寄せていただけると嬉しいです」

第三十九話 何がそんなに不安なの？

「直樹！」

（どうした、急に？）

「人形があつた。あつたぞ！」

（本当か？）

「嘘ついてどうする？ やつた、これであの妖精に一泡吹かせられる！ わはははは！！」

（お前、嬉しすぎて頭おかしくなったのか？ 目的を忘れているだら？）

「あ・・・」

電話の向こうから、溜息が聞こえた。

「うん、大丈夫だ。忘れてなんてない！ 僕は断じて忘れてなんてないぞ！」

（はいはい・・・）

「むう・・・。信じてくれないのか？」

僕はわざと可愛らしい声で、直樹に聞いてみた。

（お前な・・・）

「信じてくれないのか？」

（あー、もう。わかった、信じてやるよ）

投げやりな言葉が返ってきた。だけど、これでいい。この言葉が返ってくるのを待っていたのだ。

「そうか。それならいい」

僕はさざりと言った。

（・・・だんだん、女に近づいているな）

そんな声が、聞こえたような気がした。

「それでさ。これからどうするんだ？」

（他にもいろいろ探し回った方がいいかもしれないが、連日だとかれるだろ？　とりあえず様子を見る、というのもアリだと思う。という訳で――）

「・・・？」

僕は電話を片手に、次の言葉を待った。

（海に行こう！）

「え・・・！？」

（その後は花火な？）

「待て待て、どうして急にそんな話になる」

（どうして、だと？　夏だ！　海だ！　花火だ！　だろ？）

なんで「だろ？」だけ冷静に言っただんだコイツ。電話の向こうでドヤ顔している直樹が浮かんた。

「それはそうだけど」

「それはそうだけど」と返した僕まで、変に感じてくる。

「俺、女だよ？　今年から見られる側だよ？」

（自信ないのか？）

「・・・は？」

（だから、自分の体に自信が持てないのか？）

こいつ・・・！！

「行くよ！　そんなに自信はないけど！」

（まあ、自信あれば、あつたで問題だと思っけどな・・・）

「でもさ、水着持っていないんだけど・・・」

（女になった朝、服や下着が女物になっていただろう？　その法則

から考えると、水着も女物になっていると考えるのが、自然じゃないのか？)

「水着を置いていたら、な。去年、捨てたんだよ」

(なら、買えばいい)

さらりと返すな！　さらりと！

「女物なんて、買った事ないからわからないよ」

(誰かと一緒に行けばどうだ？　明日香さんとか、京子とか。言うておくが、俺は一緒に行かないぞ？)

「誰が、変態のお前なんか頼むか！」

(俺が変態なら、前川はどうなるんだ？)

「あいつはいいんだよ。純粹だから」

(お前は純粹の意味を勘違いしている・・・)

「なんか言った？」

(いや、何も・・・。それじゃあ、準備しておけよ？)

「はいはい」

(京子と前川は俺が誘っておくから。明日香さんを誘っておいてくれ)

「え？　なんで、姉さんまで？」

(人数は多い方が楽しいだろ？)

「それはそうだけど。他の奴は？　例えば、クラスの連中とかさ・・・」

(明日香さんだと、何か不都合でもあるのか？)

「いや・・・」

その時、僕の頭を過ったのは、直樹を「好み」と、悪戯っぽく言った姉さんの顔だった。

「ないよ」

(・・・？　それじゃあ、頼んだぞ)

僕は何も言わずに電話を切った。

なぜか少しだけ心配になる。なんで、姉さんなんだ？

別にクラスの奴でもよかったんじゃないか？

「あたしが直樹君もらっちゃおうかな。あの子、あたし好みだし」
明日香姉さんの言葉が蘇る。

もう、二か月近く前のはずなのに、まるで今日聞いたことの様に鮮明だった。

何がこんなに、僕を不安にさせるんだ？

僕はベッドにダイブした。

そして、そのままデブネコ人形に顔を埋める。

「本当は直樹君を取られたくないんでしょ？」

眠りにつく前に、姉さんの言葉が聞こえてきた。

「そんなんじゃないよ・・・」

僕は小さくつぶやき、そのまま眠りに落ちた。

第三十九話 何がそんなに不安なの？（後書き）

長い間お待たせしてすみませんでした。

明日香「久しぶりに、あたしの出番がありそうな気配ね？」

コウ「そうそう。出番だよ」

明日香「さて、どうやってあの二人を引っ掻き回そうかしら」

コウ「うわっ、姉さん怖っ！でも、その調子！」

明日香「あたしも水着準備しないと。っと、その前に・・・」

コウ「・・・？え？ちよっと？ぎにや~~~~~!!」

明日香「感想、評価、誤字脱字の指摘、その他作品への意見など寄せていただけると嬉しいです」

第四十話 今日だけはいいいね？

「葵。まだ？」

明日香姉さんの声が聞こえる。

「みんな待つてるよー！」

「ちょ、ちよつと待つて！」

僕は焦りながら返事を返す。

もう水着は着たさ。

涼しそうな、水色の水着。

少し前に、姉さんと京子と一緒に買いに言ったものだ。

なんて言っただけ？ このスカートみたいなやつ——そう、

パレオだ。——があるから、ビキニよりは露出は少な目だけど、

いざ着てみるとなんだか外に出るのが恥ずかしい。

もちろん、部屋で着たことは何度かあるのだが、人がいるとなると

話は別だ。僕は見られる側になっているんだ。

それに、なんというか、明日香姉さんの前では、絶対に言えない

けど——揺れる。意外と大きいのだ。

「葵？」

「きゃっ！？」

突然、明日香姉さんが更衣室のドアを開けて中に入ってくる。彼

女は淡いピンクのビキニだった。なんというスレンダーボディ（笑）

「勝手に入ってこないでよ！」

僕は女言葉で返した。そう、今日は姉さんがいるのだ。

だからいつもみたいに『俺』は使えない。身も心も女の子になり

きらなければいけない。なんか窮屈だ。

「なんだ、ちゃんと着てるじゃない。うん、似合ってる、似合って

る。さ、早く行くよ？」

そう言っただけは、僕の手を握って、引っ張った。

「え？ 待つて。わたし、心の準備がまだ——！」
「散々待たせといて、まだ待たせる気？」

抗議の声も虚しく、僕は姉さんに連れ出されてしまった。

明日香姉さん、京子、隼人は早速海に入って、きゃっきや言いながら遊んでいる。僕と直樹はその姿を、近くのパラソルの影に座って眺めていた。

「うう~~~~！」

「何をそんなに唸っている、犬か？ 吠えるなよ？」

「誰が吠えるか！ 恥ずかしいんだよ！」

「いいじゃないか、似合っているんだから。それに、可愛い」

「なっ!？」

不意打ちを食らった僕は、急速に赤くなる。もう、顔だけではなく、体全体が熱くなっている様だ。

どうしてこいつは、こんなにさりと『可愛い』と言えるんだ？

他の女の子ならまだしも、相手はこの僕だぞ？

男だった女だぞ？

こいつには抵抗という物がないのか。

「お前さ、その——」

「なんだ？」

直樹が不思議そうな顔をして、僕の顔を覗き込む。

「いや、やっぱりいい」

聞けるか。聞ける訳ない、そんなこと。

「直樹？」

「ん？」

「俺、どうなるんだろうな？」

「・・・」

「あれから、一週間近くたったけれど、何も変化がない」

「そうか」

「このままだと——」

「直樹く〜ん。葵なんて放っておいて、こっちで一緒に遊ぼう？」

明日香姉さんが手招きする。

なんで、直樹だけなんだ？

「姉さん！ 直樹を誘惑しないで！」

気が付けば僕は、その場に立ち上がっていた。

・・・。。

って、何言ってるんだ僕は~~~~~！！

今の、完全に既に付き合っている奴のセリフじゃないか！！

僕は頭を抱えてその場にしゃがみ込む。

なにが、誘惑だ！！

「葵」

顔を上げると、直樹が手を差し出していた。

「一緒に行こう」

「うん、そうだな」

僕は直樹の手を取った。

冷たい海感じが気持ちいい。

なぜか、癒される僕。

「葵、こっちこっち！」

明日香姉さんの所まで、直樹と走っていく。

その手にはビーチボール。

「てやつ！」

「ぶっ！？」

突然の姉さんのスパイクに、僕は反応できず、顔面に喰らってしまった。

ボールは空高く舞い上がり、風に流され、遠くへ飛んで行った。

「も、葵。鈍臭いんだから」

「姉さんが急に打ってくるからでしょ！」

「取ってきて」

「はいはい！ わかりました！」

僕は顔を膨らませながら、ボールの所へ向かった。

ボールに近づくごとに、どんどん深くなっている。気が付けばもう、胸の辺りまで水が来ていた。

でも、もうすぐでボールの所に着くから、足がつかなくなることはないだろう……。

え……？

足、着いてない？

突然、僕は海の中に沈んだ。

驚いたな。急に深くなっているんだもの。

水面から顔を出して、目を開ける。

「葵。大丈夫？」

姉さんが手を振っている。

「大丈夫！ わたし、それなりに泳ぎは得意だから！」
僕も手を振り返し、泳ぎ始めた。

『わたし』だって。

僕は自嘲気味に、笑った。

男だ、男だ、行っている割に、女の子として生活することに何の抵抗もなくなってしまった。

これから僕はどうなってしまうのだろうか。

男に戻りたい。

その願いはちゃんと持っている。

でも、男に戻ったとき、他の人たちとの関係は、どう変わるのだろうか。

それに、僕は男としてちゃんとしていられるのだろうか。

右足に激痛が走った。

嘘・・・！？

攣った！？

足の痛みのせいで、うまく泳ぐことができない。

「姉さっ・・・！」

助けを呼ぼうとしても、口に水が流れ込み、大量に水を飲んでしまっ

体に力が入り、どんどん沈んでいくのが分かった。

「直・・・樹・・・！」

ついに僕は、完全に海に沈んでしまった。

ああ、このまま僕は死んじゃうのだろうか。
結局、男に戻れず、女の子のまま。
こんなことなら、直樹に聞いとけばよかった。

——？　　って・・・。

ああ、駄目だ。意識が薄れてきた。何を聞こうとしたかすら、思い出せないや。

息ももう、もたない。

バイバイ、みんな。

——　　ふわりと体が宙に浮く、体中にあつた、水の感覚がなくなっていた。

まぶしい太陽の日差し。

僕の体は水を吐き出そうと、盛大に咳き込んだ。

誰かの腕に抱かれているみたいだ。

どうやら助かったらしい。

この体勢、いわゆるお姫様抱っこ？

目をうつすらと開ける。

そこには直樹がいた。

「無茶をするな」

直樹が小さな声で言った。

「別に無茶なんて」と、言い返す元気もなかった。

直樹は力強く僕を抱き、姉さんたちの待つところまで歩いて行く。

こいつに、お姫様抱っこをされるとは・・・。

まるで、女の子じゃないか。

僕はふっと、笑った。

直樹がそれに気が付き、僕を見る。

直樹に向かって微笑む。

直樹の胸に耳が当たっているせいか、直樹の心音が聞こえてくる。
なぜか、心地よい。

僕は直樹の首に腕を回し、ギュッと力を入れた。

直樹の顔が少しだけ赤くなる。

男に戻ることを諦めるわけではない。でも――

今日だけは、心も女の子でいてもいいよね？

第四十話 今日だけはいいいね？（後書き）

明日香「ねえ、それほどあたしの出番なかった気がするんだけど・・・」

コウ「えゝゝゝ。気のせい気のせい。アハハハゝゝゝ。ほら、あいつら見てよ」

明日香「ゝゝゝ？」

京子「今回名前だけしか出てこなかったゝゝゝ」

隼人「仕方ないよ、京子ちゃん。どうせ僕たちは脇役さゝゝゝ」

明日香「うわゝ、雰囲気暗っ！」

コウ「感想、評価、誤字脱字の指摘、その他作品への意見など寄せていただけると嬉しいです」

第四十一話 線香花火の願い事

姉さんと京子、隼人の三人は、花火を取りに行っていた。

僕と直樹は、砂浜に座っている。

波の音だけが聞こえていた。

海水浴は、とんだ災難だった。まさか、ビーチボールを取りに行こうとして、溺れるなんて思いもしなかった。

そして、溺れた僕を助けてくれた直樹。なんだか、凄くカッコよく見えた。

いつもの僕ならば、「なんてこと考えてるんだ〜!」とか言いそうだ。でも、今日だけは、自分に素直になろうと思う。

カッコいいし、なんでもできる。そんな親友。僕はコイツに憧れていたんだ。

「どうした?」

じっと見つめていた僕に、直樹が気づく。

「ううん。なんでもない」

僕は悪戯っぽく微笑んで返す。座ったまま、隣にいる直樹の肩に頭を当ててみたりした。

「お前、溺れた後から、何か変だぞ」

「うん。今日、ちょっと変かも」

僕は素直に認めた。

「今日だけは、変になってもいいことにしたんだ・・・」
直樹が不思議そうな顔をした。

だって、実際に変なんだ。

こんなにも、直樹がカッコよく見えることなんて、今までなかった。助けられた時の事を、お姫様抱っこをされた時のことを思い出すと、今でも顔が熱くなる。

女の子として見られている感じがしたけど、いつもみたいな気持ではない。なぜか、少しだけ嬉しかった。

「葵。花火、持ってきたよ」

「うん。ありがとう京子」

僕は京子から花火を受け取り、袋から出し始めた。

「あんた。休んでなくて大丈夫なの？」と明日香姉さん。隼人も隣で頷いていた。

「もう、さっきも言ったでしょう。わたしは大丈夫」

姉さんと京子と一緒に、取り出した花火を一か所にまとめて、近くに水を汲んだバケツを置く。少し離れたところで、隼人が花火に火を点けるための、ろうそくを立てていた。

結構な量があるな。

打ち上げ用の物まであった。

「姉さん。コレ、今日全部使い切るつもり？　かなりの量があるけど・・・」

花火を指さしながら言った。

「当ったり前よ！　あたし、花火好きだから、一人でこの半分はやるわ！！」

なんという気合。一人でこの量を半分って・・・。

ところで、さっきから直樹の姿が見えない。

どこに行ったんだろう？

僕が近くを探していると、両手に木の枝やら段ボールやらを持った直樹が現れた。

「直樹。それ、何に使うつもり？」

ピクリと直樹の身体が動いた。

たぶん、いつもみたいな話し方ではなく、女の子らしい話し方をしたからだろう。違和感があったのかもしれない。

「花火で燃やそうと思って」

「それ、小学生のすることでしょ」

くすりと笑う。

いつもの僕なら、こんな時になんて言っただろう。「バカ」だの「アホ」だの言っていたのだろうか。

でも、なぜかそんな直樹が可愛らしく見えた。

「よし、点火するよ。みんな離れて」

隼人が打ち上げ花火に、ライターで火を点ける。

しばらくすると、高い笛のような音とともに花火が打ち上げられる。

乾いた破裂音とともに、夜空が様々な色に彩られた。

「キレイだね」

「うん」

隼人と京子は、僕たち三人と少し離れたところで、花火を見ていた。

「おーおー、なんかいい雰囲気だね。邪魔しちゃいけないよね」

「姉さん。親父臭いよ」

「ん？ こっちも邪魔だったかなあ？」

悪戯っぽい笑みを浮かべて、僕と直樹を交互に見た。

「姉さん！ わたしたち、そんなじゃないって！」

「いいよ、いいよ。遠慮なくて、お姉さんは、離れているから」

「姉さん！」

僕は姉さんだけに聞こえるよう、小さな声で言った。

姉さんが直樹を誘惑しようと考えていないことがわかって、本当

はちよつと嬉しかったりする。そう、ほんのちよつとだけ。

打ち上げ花火がすべて終わり、みんなは自然と手持ち花火に移った。

「あれ、京子。もう、線香花火しているの？」

花火はまだたつぷりとあると言うのに、京子は線香花火をしていた。

「うん。私、線香花火好きなんだ・・・」

「わたしは、もっと派手な花火の方が好きだな。線香花火ってすごく儚くて、寂しい感じがする」

「でもね。その儚さがいいんだよ」

京子は線香花火を持続たまま、こっちを向きニツと笑った。

「葵、知ってる？ 線香花火を最後まで落とさずにいると――」

「知ってる。でも、それって迷信でしょう？」

「もう、葵は夢がないなあ」

そして、京子は「ほら、これ」と言つて僕に線香花火を押しつけてきた。

「葵もやってみなよ」

「うん・・・」

言われるままに線香花火に火を点ける。すぐに僕は京子たちから離れた。

「どこ行くの？」

「うん。一人でやりたいから・・・」

「なんだかんだ言つて、葵も信じているんじゃない」
京子が笑う。

「わたしだって、迷信を信じることぐらいあるわよ」

じつと花火の先を見つめる。

すぐに球体になった先端で、ぱちぱちと火花が散りだした。

綺麗だな。

ただ、純粹にそう思った。

揺らさずに最後まで・・・。

この儚い火の玉を最後まで落とさずにいられたら、わたしは・・・。

——ドンッ！

「あぁっ！？」

「おっと、悪い」

またどこからか木の枝を拾ってきた直樹が、わたしに軽くぶつかった。

その瞬間、最初よりは少ない火花を散らしていた弾が砂の上に落ちてしまった。

わたしの動きは止まっていた。

「悪い、大丈夫か？」

直樹がわたしの肩に手を置く。それを力任せに振り払い、立ち上がった。

「直樹のバカ！！」

みんなのいる方向と逆の方向に、全力で走った。

みんなのいる所から、大分離れてしまった。わたしは走るのを止めて、ゆっくりと息を整えた。

気が付けば視界が霞んでいる。

頬に触れると、雫が伝っているのが分かった。

「あれ？ わたし、なんで泣いているんだろう・・・？」

涙はいくら拭っても、次から次へとあふれてくる。

手にはまだ、使っていない線香花火を握りしめていた。

第四十二話 文化祭の出し物！？

気が付けば夏休みも終わって、新学期に突入。

期限まで、あと四か月もないのに、一向に何も思い出さない僕は、不安に駆られていた。

まだ四か月も？

違う。僕にとっては、あと、四か月しかないんだ。

誰でも、経験があるはずだ！

夏休みを謳歌して、宿題を放っておいたら、ラスト三日で全部仕上げなければいけなくなったこと！

まだ時間があったとしても、早く済ませておくことに、間違いはないのだ！

因みに、今年も僕はラスト三日で宿題を仕上げた。

それに『謳歌』と言っても、ほとんどいつものメンバーで遊んでいただけだけどね・・・。

「誰か、意見は・・・？」

いつものメンバーの筆頭、遠藤直樹が意見を求めていた。

今、クラス会の真っ最中なのだ。確か、文化祭の出し物を決めるとか、なんとか・・・。

僕は適当に楽しめればいいと思っているので、ほとんど話に参加していない。というか、聞いてすらいない。

もちろん、出し物の作成は頑張って手伝っけれど・・・。
因みに、直樹はこのクラスの委員長。だから、教壇に立って、皆の意見をまとめていた。

夏休み、楽しかったなあ・・・。

未だに夏休みの余韻に浸っている僕は、気が付けばずっと直樹に視線を向けていた。

「誰か、何も無いのか・・・？」

呆れ顔で言いながら周りを見回す直樹。

その時に偶然、僕と目が合った。

「ああ、・・・島崎。何か意見はないのか？ 何も無いなら、これで決定にするが・・・」

「え、・・・ええと」

目が合った瞬間の気まずさと言うか、何というか。僕は直樹から目をそらした。なぜか、目が合ったとき、夏休みに花火で遊んだ時のことを思い出したのだ。

なぜ、僕はあの時、涙を流していたのだろう。

結局、あの時の感情の整理ができていない。

ただ、線香花火が消えた時、胸が締め付けられるような感覚に襲われたことは覚えていた。

「いいんじゃないかな？」

とりあえず首を傾げながら言ってみた。

その瞬間、クラスの男子が一斉に歓声を上げた。女子の一部も「楽しみ～」とか「一回、着てみたかったんだよね～」とか、よくわからない発言をしている。

中には、僕の手を握って「ありがとう～！」なんて言ってきた男子までいた。

直樹は一人頭を抱え。僕は混乱したままで、最高に盛り上がったクラスの空気に置いてけぼりになっていた。

でも、この空気を見る限り、楽しいことには間違いないだろう。

「なあ、直樹」

クラス会が終わった後、すぐに直樹の所へ駆け寄った。

「このアホ！」

「ええ！？」

急に「アホ」って、なんで僕がそんなことを言われなければいけないの！

僕は少し目を潤ませながら、上目づかいで直樹を見た。

「悪い。そんなに強く言うつもりじゃ」

目を潤ませたのはわざと。それに気が付いていない直樹は、あたふたする。なかなか可愛い反応するじゃないか。内心、ほくそ笑む僕。

「でもな。お前なら、反対してくれると思っていたんだぞ」

直樹は僕の頭に手を置きながら言った。

「結局、何に決まったの？」

溜息をつく直樹。

「もしかして、クラス会、聞いていなかったのか？」

「てへっ」

「可愛く言っても駄目だ。俺は騙されないぞ」

さっき騙されたくせに……。

こいつは、僕のことを全然わかっていない。

「それで、何になったの？」

「ネコミミメイドカフェ……」

いつものような、ポーカークフェイスではなく、明らかに嫌そうな顔をしていた。

「ええー!!」

「だから、お前に意見を求めたんだ。反対するだろうと思って・・・」

「そんなこと言われたって」

「聞いてないお前が悪い」

ふう、っとまた息を吐く直樹。

「ところで、女子が着るのはわかるけど、男子も着るのか？」

「馬鹿かお前は。男子が耳と尻尾生やして、メイド服着たところで誰得だ。お前はそんな俺を見たいのか？」

「いや、さすがに・・・」

そこまで言った後。ネコミミメイドの格好をした直樹を想像してしまい、盛大に吹き出してしまった。

「想像するな」

「だって、アハハハ——」

「わかってているのか。お前だって着るんだぞ」

「うーん。でも、おもしろそうじゃない？」

さすがに男に戻ると着ることはできない。何事も経験。そう言った意味では少し楽しみかもしれない。

「俺は嫌だ・・・」

え、それってどういう？

一瞬の期待。

僕は後ろ手に次の言葉を待った。

「俺は——」

第四十二話 文化祭の出し物！？（後書き）

明日香「感想、評価、誤字脱字の指摘、その他作品への意見など寄せていただけると嬉しいです。厳しい意見も大歓迎です。」

第四十三話 時同じくして

「俺はお前のそんな姿を、他の奴に見られるなんて、嫌だ」

「あああああ!!」

俺はベッドにダイブして、頭を掻き毟った。絶叫したまま思い切り。

なぜ俺はあの時に、あんなことを言ったのか。あの時の自分を思い切り殴りたくなる。

葵の顔を思い出す。

驚いていた。

「え、そんな・・・俺、そんなこと言われても」

口を押え、戸惑い、逃げるように去っていった。

ああ、なぜ、口に出してしまったんだ。

黙っていればよかったのに、なぜ。

馬鹿野郎・・・。

「直樹、今のなに？」

叫び声が聞こえたのか、母さんが階段の下から、声を掛けてきた。俺は「なんでもない」と返した。

なんでもない訳ではない。

俺は通学カバンを壁に投げつけた。

「直樹！？」

「なんでもないって！」

大きな声で言った。

八つ当たりなど、格好の悪いことこの上ない。

「馬鹿野郎・・・」

俺は小さくつぶやいた。

どこかでまだ、葵に戻ってほしくないと思っている自分がいる。

それが嫌で嫌で仕方がない。

仮説が当たっていれば、と思う自分がいる。

「どうすればいいんだよ！」

自分で自分の頭を殴り、何とか気を静めようとする。

忘れる、忘れてしまえ！

今すぐ、そして二度と思い出すな！

「え．．．？」

突然の．．．。なんといえはいいのか。
ひらめき？

いや、ひらめきにしては、鮮明。
そして、それは確信に限りなく、近い。

『それ』に値する言葉を、俺は思いつかない。

そんな

まさか。

嘘だ。

それなら、あいつは．．．。

俺は．．．。

「どうすればいいんだよ．．．」

今度は憂鬱、そして、これまでになく不安な溜息と同時に、言葉が漏れた。

なんとかしてやりたいと、ずっと思っていた。

葵のために、なんでもいいから、何かしてやりたいと。

でも、．．．。

もう、．．．。

俺には、どうすることもできない。

時同じくして――

「なんだよ。何も変わっていないじゃないか」

「うん？　いいや、変わったさ。お前はこう言ったんだ。『何か一つでいいから、もとに戻してくれ』と」

僕は妖精と二人で話していた。

「どこが？」

「それを言ってしまったら、楽しくないだろう」

「俺はお前を楽しませるために、ここに来たわけじゃないんだぞ」

妖精の言葉に、僕は肩を震わせる。拳を振り上げたが、妖精はふわりと空に浮かんだ。

そうだ、こいつは空を飛べるのだった！

仕方なく、僕は拳を下ろした。

「言っておくが、俺はお前に答えを与えたのと同然のことをしたかな」

僕を指さしながら言う妖精。

「絶対に思い出せよ」

「お、おい！」

「期待してるぞ、葵」

くすりと笑いながら、妖精は空高く飛んで行く。追いかけるようにも、僕は空を飛べない。

空に手を伸ばしただけで、その手に、何かを掴むことはなかった。

「答えて、なんだよ・・・」

第四十四話 時同じくして、そして

「俺はお前のそんな姿を、他の奴に見られるなんて、嫌だ」

「なんだよ。ほんと……」

僕は少し荒くなった息を整えた。

ここまでくれば、もう直樹も追ってこないだろう。というより、追っていたのかどうか、謎だけれど。

走ったせいか、ドキドキしてて、体が熱くなっていたことに気が付く。

期待していた言葉。

まさにそのままだった。

それを言われたのに、

僕はあいつの前から逃げ出した。

だって、

驚いたんだもの。

あいつが、そんなこと言うとは思わなかった。

期待していたのに、

本当にそう言われると、驚いてしまった。

期待って、

意外と現実にならない方がいいのかな？

だから『期待』って言うのかな？

そんなことを思っで、僕はくすりと笑った。自分に対しての笑いだった。

「こんなことを考えるのも、ぜんぶあいつのせいだ」

毒づいてみるけど、気分はそれほど悪くない。もしかしたら、いい方かもしれない。

あの日だけでなかったみたい。あの後から、僕はずっと変。

それにしても、不思議だ。

前にまして、直樹に女の子の様に扱われているような気がしてならない。

ほら、今回だって、思い切り女の子として扱われているし。まあ、別にいいけど。いや、このままだと、まずいんじゃないのか？
いいのかな？

……いいけど、気になる。

僕の記憶はどこが変えられたんだ？

もう一度、あの場所へ行けば、あいつには会えるだろうか。

会える確証なんて、どこにもないのに、不思議と僕の足は、あの場所に向かっていた。

着いた。すべてが始まった場所に……。

「さて、と。どうすれば、あいつは出てくるかな」

僕は辺りを見回した。当たり前かもしれないけど、あいつはいない。

僕は首を傾げた。

初めてあいつに会ったとき、どうやって出てきたんだっけ？

ああ、そうか、思い出した。

僕、叫んだんだ。

今思い出しても恥ずかしい。それで、あいつが出てきたから、それは幸運なのだろうか？

ということとは、今回も叫ばないとあいつは出てこない？

僕は頭を掻きながら、真剣に悩んだ。

仕方がない。やるか……。

大きく息を吸い込み、僕は――。

「待て待て待て待てスト——ッブ——！」

小さな何かが、僕のこめかみに直撃した。僕は頭を押さえてうずくまる。

「叫ぼうとするな、馬鹿野郎！」

どうやら、呼ばなくても来たらしい。僕はうずくまった状態で、空を飛んでいる妖精を睨んだ。

「急に突進してくる奴があるか！」

「神社で急に叫ぼうとする奴の方があるか——！」

「うつ……」

僕は言い返せなくなり、口を閉じた。

「それで、お前は何をしに来た？」

立ち上がった僕は、妖精を見た。

「お前。俺の記憶を変えたって言ったよな？」

「ああ、言ったな」

妖精は笑いながら頷く。

「俺は、何について記憶を変えられたのか、まったくわからない」

「おいおい、そんなので大丈夫か。期限はあと四か月だぞ？」

「わかってるよ、そんなこと。でも、何もわからないんだ」

わからないことと言えば、もう一つ。直樹の態度の変化。あいつはあいつで、いったいどうしたのだろう。

「わからなくなっただって、何か行動して見たらいいじゃないか」

妖精は溜息を吐きながら言った。

「したよ、行動」

「もつと頑張れ」

「突き放すような言い方するなよ」

顔を膨らませながら言う。

「何が言いたい」

「だからさ、何かヒントとかないの？」

「お前まさか、そのために来たのか？」

「うん。何か一つでいいから、もとに戻してくれ」

「やだよ……」

ふうつと、溜息をつく妖精。その表情から、そんな気がないことがわかった。

「戻るのかな？」

僕はふと、最近湧き上がってきた不安を口にした。

「なに？」

「俺、もとに戻るのかな？ このままだと、なんか違う気がするんだ。このままじゃ、いけない。特に、あいつとか……」

妖精は黙り込み、顎に手を当てて、何かを考え始めた。

「ふうむ……」と一度だけ、妖精が唸る。

「よし、一つだけ、思い出させてやる」

妖精は腕を高く上げ、パチンと指を鳴らせた。

時同じくして、

そして――

第四十四話 時同じくして、そして（後書き）

さて、今回は前の話の最後の、少し前からのスタートです。

直樹が「あああああ！！」とか言いながら、ベッドにダイブしているときに、葵はこんなことをしてました。

わからなかった人がいるかもしれないので、言い訳させていただき
ます^^；

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9768u/>

願い事

2011年10月11日03時01分発行